

# 梁元帝評伝（二）

福井佳夫

## 目次

- 一 文武の道は絶えたり  
江陵をめざせ 梁廷の油断 市内突入  
元帝の処刑 書物炎上 陥落の夜 叔甥の争鬪 最期の日々
  - 二 隻眼の劣等感  
蕭繹の生まれ 母阮修容 優秀な兄弟 片目の失明 隻眼へのからかい つよい劣等感
  - 三 貪欲な読書魔  
上昇意欲 熱心な読書 地方官の日々 湘東苑のあそび 詩文の腕も達者 蕭績への哀悼  
蕭綱との親交
- 以上は前号

## 四 名声と野心

名声をめざす 著述をめざす

劉敬躬の乱

母の死

野心きざす

蕭綸の狼藉

西帰内人

## 五 即位と骨肉の争い

救援軍の混乱 鬱勃たる野心

誉譽との争い

西魏の参入

蕭紀の野心

兄弟対決

兵威を逞しくせよ

## 六 なぜ書物をやいたか

根源は劣等感 体面をかざる

被害妄想

衝動的な焚書

名声をあげる道具

書物への怒り

文化史上の蛮行

——以上は今号

蕭繹の生まれ

蕭繹（のちの元帝）（五〇八～五五四）あざな世誠は、蕭衍（えん）こと梁の武帝（四六四～五四九）の第七子として、天監七年にうまれた。

父の武帝は、いうまでもなく、文武を兼備した英雄であり、梁のみならず南朝の黄金時代を現出した名君である。とくに治世の後半から、あつく仏教を信仰するようになり、当時の人びとから皇帝菩薩と称されるにいたったのだった。

父の蕭衍は、わかいころは齊の皇族、竟陵王蕭子良の西邸に出入りし、学芸の方面で著名となっていた。もし梁朝をたてなくても、彼は文人として名をのこしたことだろう。

ところが永元二年（五〇〇）、齊の暗君だった東昏侯が、兄の蕭懿にせまって死をたまうという事件がおこった。この知らせを耳にして、蕭衍はついに蹶起したのである。このとき、彼は雍州刺史として襄陽に駐屯していたが、すばやく軍をひきいて郢州にくだった。そして、さらに長江を舟でくだって建康におしよせ、いっきに内城を包囲したのである。じつに果断にして、すばやい行動であった。

対する齊の東昏侯は、暴虐な性格によって、すっかり人心がはなれていた。そのため籠城まもなくにして、あつけなく臣下にごろされてしまったのである。こうして実質上、政柄をにぎった蕭衍は中興二年（五〇二）、自分が擁立した齊の和帝（東昏侯の弟）から、禪譲をうけて梁朝を樹立した。そして年号を天監元年とあらため、みずからの新政を開始したのであった。蕭繹は、この年号の七年目にうまれたのである。

この蕭繹は、うまれながら聡明にして俊敏、また天賦の才にめぐまれ、ものをいえば理屈がよくとおり、声も鐘の音のようにきよらかであつたといふ。幼時のころは、なんにでも興味をもつたよつで、誦咒じゆじゆに熱中したり占トにこつたりして（方術の類には生涯、関心をもつていたよつだ）、父の武帝から、親戚の子らはもう学問をはじめているぞ。おまえはやらぬのかな、といわれたこともあつたといふ。

だが、蕭繹がより興味をもち、より天分をしめしたのは、やはり学問のほうであつた。

五、六歳のときのこと、武帝がどんな書物をよんでいるのか、とたずねると、蕭繹は「曲礼を暗誦できるよつになりました」とこたえた。武帝が、ではやつてごらんといいつと、即座に上篇をそらんじた。左右で驚嘆しないものはなかつたといふ。曲礼とは、古典たる『礼記』の篇名である。ここの「曲」は委曲の意であり、古代における礼儀作法の細則をしるしたもの。おそらく教育の一環としてよまされていたのだらうが、幼児にとつては、あまりたのしいものではない。だが蕭繹は五、六歳で、それをきちんと暗誦できたのである。

この蕭繹、古典の暗誦だけができたのではない。詩文の才もすぐれていたよつだ。彼の手になる『金樓子』自序篇には、「余は六歳にして詩を為るつくを解す。「武帝の」敕を奉じて詩を為りて曰つ」とのべたあと、つぎのよつな自作の詩を引用している。それは、

池に浮草がはえて水面をおおい

池萍生已合

林に花がひらき一面にさきみだれている

林花発稍稠

風が林にふきよせるや花の枝がふるえうごき

風入花枝動

日が池にさしてくるや水面に陽光がかがやく

日照水光浮

といふものだ。

この六歳（満年齢だと五歳）のときの詩、四句からなり（稠と浮で韻をふむ）、春の風光を叙したものである。とりたてて深みはないものの、池畔ののどかな景色を、それなりに優美にうつしとっている。ここで注目したいのは、四句を二聯の対偶にしていることである。「池萍↕林花」「風入る↕日照る」「花枝動く↕水光浮く」などは、平易な字をならべた対応にすぎぬが、それでも、きちんとした対偶になりえている。

現在ふうにいえば、このときの蕭繹は、幼稚園の年中か年長さんぐらいの歳だ。詩を構想し、対偶をつくらうとすれば、文法や品詞の対応、さらに押韻のルールなど、六歳児にはけっこうむつかしかったに相違ない。だが、天賦の才にめぐまれた蕭繹のことである。おそらくみよみまねで、さっと詩作のコツをつかんだのだろう。才能とはそういうものだ。自序篇には、この詩をひいたあと、「爾これに困りてよま稍く文を為るを学べり」とあるから、蕭繹はこれ以後、本格的に詩文をまなびはじめたのだろう。

では、この聡明な蕭繹、しあわせな幼少期をすごしたのかといえは、そうではなかった。彼は幼時や少年時のころから、あとでのべるような三つのひけめがあつて、それがくらい影をおとしていた。そしてそのくらい影は、成長するにつれ、いよいよつよく意識され、蕭繹の生涯全体をおおうことになる。そのため、性格形成や処世のしかたにおいて、ゆがんだ傾向やかんばしくない事がらが、惹起してしまつたのだ。以下、その三つのひけめをのべてゆこう。

### 母阮修容

ひとつめは、自分の生まれである。

史書の記述によると、蕭繹の誕生は、つぎのようであつたという。

石令嬴せいらいえい（蕭繹の母。四七七～五四三）という采女（身分のひくい宮女）が、武帝の後宮のなかで奉公していた。あるとき、彼女が部屋のカーテンをもちあげようとすると、ふと風がふいてきて、彼女の着物のすそをめぐりあげた。これを見て武帝は心がうごき、その采女を寵愛した。采女はそのとき、月が自分の懐中にはいった夢をみたのだった。そして、蕭繹を懐妊したという。さらに天監七年、彼女が皇子をうんだとき、部屋に芳香がたちこめ、赤ん坊は紫の胞衣につつまれていた。武帝これを奇だとし、皇子をうんだ采女に阮という姓をあたえ、また修容の地位に昇格させたのである。

右の話は、『南史』『元帝紀』以下、『元帝紀』とあれば、『南史』のものをさす（の冒頭近くに、叙されているものだ。したがって当時では、よく知られていた話柄だったのだらう）。

ところで蕭繹は、自分でも母のくわしい伝記をつづり、それを『金樓子』后妃篇のなかに編入している。そのなかで蕭繹は、母が自分をうんだ経緯について、つぎのようにつづっている。

天監元年、選ばれて入りて露采女と為る。姓を賜わりて阮氏たりて、位を進められて修容と為れり。

すぐわかるように、自身の手になる『金樓子』では、叙述がそうとう省略されている。天監元年、石令嬴は選抜されて武帝の後宮にはいり、采女となった。そして姓をたまわって阮氏となり、さらに修容に地位があがった、というだけだ。風が着物のすそをめぐりあげた云々の話は、すべてカットされているし、そもそも、このとき令嬴が蕭繹をうんだという記述さえ、ここにはない。ただ、彼女が采女になったこと、阮の姓をたまわったこと、修容に昇格したこと——の三事が列挙されるのみで、三事相互の因果関係はもとより、なぜ阮姓をたまわったのか、なぜ修容に昇格したのかなども、まったくわからないのである。

実態としては、石令嬴（以下、阮修容）は、蕭繹をうんだからこそ、阮姓をたまわり、修容に昇格できたので

あつて、それをあいまいにしてしまうのは、伝記としては、不備なものだといわざるをえない。なぜ『金楼子』では、こんなにわかりにくく記述したのか。自分の誕生に関することでテレくさいから、あえて略したのだからか。

私は、ここに、蕭繹のひげめがひそんでいるのだとおもう。

この母の伝記では、だいたいに於いて、母親の人がらをほめたたえている。母がうまれつき、いかに徳すぐれし女性であつたか。いかに才識すぐれ、いかに心やさしかったか。いかに謙虚で、いかに信心ぶかかったか。そして、いかに自分をたいせつに養育してくれたか——などを詳細に叙している。つまり蕭繹は、自分の母親を賢婦であり、女性の鑑かがみであるとして、たたえたかつたのだろう。

そうした趣旨の文のなかに、風が着物のすそをめくりあげた云々や、自分をうんだおかげで、修容の地位にありついたなどの話があるというのは、どんなものだろうか。いうまでもなく、それらの話は母にとつて（そして自分にとつても）、名譽なことではない。蕭繹としては、秘しておきたい話柄であり、恥だとももっていたかも知れない。そうであればこそ、こうしたあいまいな書きかたにしたのだろう。その意味で、こうした書きかたこそ、蕭繹の「母親に関する」ひげめを暗示するものだと推察されるのである。

この阮修容、蕭繹の誕生時にすでに三十二歳だったせいもあつてか、その後の日々、武帝からたいせつにされることはなかつた。そのためか彼女は、武帝のそばに侍することなく、ずっと蕭繹のちかくですくしたのである。蕭繹が地方に赴任したときも、息子とともに地方へゆき、その世話をしつづけた。自分のほうから息子をおいかけて、地方にでていったのか、武帝周辺からそうせよといわれて、でていったのかはわからない。だが、すくなくとも彼女は武帝から、「自分のそばにおれ」とはいわれなかつたのである。

ただそのことは、蕭繹母子には、わるいことではなかったようだ。蕭繹の人生には、隻眼せきがんになったことをはじめ、いろんな苦難がおそいかかってきた（もつとも、みずからも他人に不幸をふりまいたのだが）。そうしたときこの母は、蕭繹を上げまし、しっかりせよと鼓舞しつづけたのだった。それは、薰陶よろしきをえていたのかもしれないし、過保護といわれかねぬことだったかもしれない。だが、いずれであつたにせよ、地方でもにすぎした歳月は、この母子にとって平凡ではあるが、やすらいだ日々であつたらう。じっさい、母の生存中、蕭繹はそうおおきな過誤をおかすことはなかつたのである。

#### 優秀な兄弟

ふたつめは、すぐれた兄弟へのひけめである。

父の武帝には、蕭繹もふくめて、八人の男子がいた。うえから順にならべれば、

長子 蕭統（昭明太子。五〇一〜五三二）

次子 蕭綜（豫章王。五〇二〜五三一）

三子 蕭綱（簡文帝。五〇三〜五五一）

四子 蕭績（南康簡王。五〇四〜五二九）

五子 蕭統（廬陵威王。五〇四〜五四七）

六子 蕭綸（邵陵携王。五〇七〜五五二）

七子 蕭繹（元帝。五〇八〜五五四）

八子 蕭紀（武陵王。五〇八〜五五三）

である。蕭繹を中心にみれば、六人の兄とひとりの弟がいたということになる。

このうち次兄の蕭綜は、母（呉淑媛）がもと斉の東昏侯につかえていたところ、齊梁交替のさいに蕭衍が自分の後宮にいれ、その結果つまれてきたのだった。ただ、蕭綜の誕生した時期からみて、東昏侯の種だったのではないかと噂されることもあった。そのためか成長後、彼は父や兄弟たちとあまりなじまず、北魏に亡命した東昏侯の弟（蕭宝寅）を叔父としたい、自分も北地にうつったのである。そしてその地ではやく死んだ。そのため蕭繹とも、あまり交渉はなかったとおもわれる。

また四兄の蕭績も、蕭繹二十二歳のときに死んでいるので、あまり交渉はなかったようだ。ただしこの兄が死んだとき、蕭繹は「三兄の蕭綱にむけて」丁寧な哀悼の書翰文をつづっている。

のこる五人の兄弟は、蕭繹とかなりふかい交渉があった。ただ、蕭繹のひけめと関わりがあるのは、長兄の蕭統と三兄の蕭綱の二人である。したがって本章ではこの二人だけとりあげ、のこる蕭統と蕭綸と蕭紀の三人は、のちの章でのべることしよう。

まずは長兄の蕭統から。蕭繹は、この皇太子だった長兄と仲がわるかったわけではない。それどころか、彼はこの長兄に親しみを感じ、よくなついていた。というのも、この長兄は「性は寛和にして衆を容れ、喜愠は色に形さず。才学の士を引き納れ、賞愛して倦む無し」、寛容で包容力にとんでいて、喜怒を表情にあらわさなかった。才学の士をまねいては、賞賛してやまなかった人物であったからだ。そうした寛容さや慈しみを、弟の蕭繹にも、ふんだんにふりそいでくれたのである。じつさい、二人で詩の応酬をしたり、蕭繹が兄の文集をほしいとってきたときは、躊躇なく弟に文集をおくってくれたりしたのだった。

おなじく三兄の蕭綱も、弟の繹にしたしく接してくれた（後述）。二人が応酬あった詩はすくなくないし、

また彼が「蕭統の死後」皇太子になって以後は、しばしば弟に贈り物をしてくれていた。さらに文学上の同志としても、遇してくれたようだ。じつさい彼の「与湘東王書」では、弟を曹植「そして自分を曹丕」になぞらえたうえで、ともに京師の文風を改革しようとしてよびかけている（後述）。

こうした長兄や三兄との仲のよさは、母親どうしの仲がよかったことも、関係があったようだ。というのは、蕭繹の母の阮修容が、武帝に幸せられるにいたったさい、「蕭統と蕭綱、そして蕭統もうんだ」丁貴嬪（本名は丁令光）が、かなり協力したようなのである。「南史」蕭統伝に、

元帝の母阮修容の「武帝より」幸を得しは、丁貴嬪の力に由<sub>よ</sub>れり。  
とある。

ここにいう「幸を得し」とは、例の、風が着物のすそをめくりあげたことよって、阮修容が武帝から寵をえたことをさすのだろう。このとき武帝のお手がついたので、阮修容は蕭繹を妊娠し、出産し、そして修容にまで立身することができたのだ。このできごとに、丁貴嬪がいかなる協力をしたかは、史書は説明しておらず、具体的な様相はあきらかではない。ただ彼女、風をふかすことはできないにしても、おそらく陰に陽に阮修容をあとおしし、武帝のそばにちかづかせる機会をおおくしたのだろう。そして阮修容（おそらく賢明かつ俊敏な女性だったのだろう）も、その協力にめぐりにこたえた。偶然ふきよせた一陣の風を利用して、たくみに武帝の心をひきつけたのだ。そして首尾よく、懐妊することに成功したのだ。

ところで、私がひけめといったのは、この長兄と三兄の二人、蕭繹がかなわないとおもうほど、学芸の才にすぐれていたということだ。たとえば長兄の蕭統は、書物をよんでは数行をいつきによみすすめ、しかも一度目をおせば、すべておぼえた。詩をつくっては、ながい篇幅のものでもさつとかきあげ、むつかしい韻でもおかま

いなしだったという。また三兄の蕭綱のほうも、やはり十行をいっきによめたし、諸子百家の文も、一読してすぐ記憶した。さらに詩文や辞賦の類も、筆をとればたちどころにかきあげ、儒学や玄学などの学問も得意だったという。

あとでのべるような事情（隻眼）で、蕭繹は、武芸が苦手だったせいも、学問や著述の方面で第一人者になるうと熱望していた。この方面では彼は、たいへんな負けずぎらいだったのだ。そうした蕭繹からすると、この学芸でもおいつけ、おいこせぬ蕭統と蕭綱は、親愛し尊敬する兄であるとともに、劣等感をおぼえ、ひけめを感じさせられる、やっかいな存在でもあったことだろう。

#### 片目の失明

みつめは、隻眼になったこと。蕭繹は十四歳のときに、片目を失明してしまった。この隻眼こそ、前二者とはくらべものならぬ深刻なひけめであり、蕭繹の生涯にくらい影をなげかけたのだった。

この片目失明の具体的な経緯は、はっきりしない。『金楼子』自序では、十四歳のとき眼疾をわずらって「暗きに転ず」という。いっぽう『南史』元帝紀では、うまれながら眼疾があり、「遂に一目を盲めくらつ」とある（もちろん眼疾の病名などはわからない）。両者をあわせかんがえると、蕭繹は、うまれながら眼疾をわずらっていた。そのため、てあつい治療がほどこされ、武帝も加療につとめさせたが、けっきょく十四歳（いまだいえば中学二年生である）のときに、片目を失明してしまった——ということではないかとおもわれる。

この片目失明、じつは予兆があった。まだ蕭繹がうまれるまえのこと、父の武帝はある夢をみた。その夢のなかに、香炉を手にもった片目の僧があらわれ、自分は王宮のなかにうまれるつもりだ、といったという。その後

まもなく誕生したのが、蕭繹だった。武帝は、蕭繹が片目を失明したあと、この夢のことをおもいだして不憫におもい、いよいよ蕭繹をかわいがるようになったという。

この元帝紀の記述にかぎらず、『南史』にはこの種の奇妙な話柄やできごとが、たくさん記載されている。それは、志怪小説が流行した時代風潮に影響されたもので、おそらく事後につくられた風説や訛伝のたぐいを取りこんだのだろう。それゆえ、事実かどうかという点では、もちろん疑問符がつくのだが、ただ当時そうした風説が浮遊していたのはたしかであり、それはそれで参考にならなくはない。

夢中で、片目の僧が王宮のなかにうまれてくるといったのは、もちろん蕭繹の誕生とその片目失明とを暗示するものだろうし、香炉や僧はおそらく、武帝の仏教篤信を反映したものだだろう。だからこそ、武帝は蕭繹が僧の生まれかわりだと信じて、蕭繹をかわいがるようになったのである。かく解読してゆけば、このふしぎな夢も、当時の各様の事情をよくふまえており、なかなかよくできた風説だといってよからう。

かててくわえて、蕭繹は現在ふうにいえば、神経性の疾患もわずらっていたようだ。彼は『金樓子』自序のなかで、その疾患を「心気疾」と称し、つぎのようにかたっている。

私は十三歳のとき、『百家譜』を暗誦しようとしていた。もつすぐ暗誦できそうなところまでいったのだが、そのとき心気疾にかかってしまった。発作がおこったときは、あたりをかけたまわったものだよ。

大人になつたら、この発作はおさまってきた。でも、私が息子五人をつづけてなくしたとき「再発し」、悲しみのあまり頭がボーとなって、苦菜をかんだような気分におちいった。家にも、屍になつたような気分だし、外にでてても、どこにゆけばいいのかわからなかった。またときどき、魂が外にでてしまって、かえってこないんじゃないか、と心配したこともある。

さらに長男の方等に命じ、軍をひきいて蕭誓の討滅をさせたところ、方等は逆にやぶれて溺死してしまつた。そしてその直後、父君（武帝）ご崩御の報に接したのだった（五四九年）。このときも私は、頭のながまつしろになつて、ものをかんがえることができなくなつたんだよ。

右は、蕭繹自身が叙している記述である。ここで彼が「心気疾」と称している症状、てんかんや不安障害のよくな疾患だつたらうとおもわれるが、これは、生涯にわたつて、おさまることがなかつたようである。ここで留意すべきなのは、こうした症状や発作を、蕭繹自身が神経性の疾患（「心気疾」。とくに「疾」に注意）だと認識していた、ということだ。そうだとすれば、この種の疾患を有することも、彼の心のふかいところで、ひけめとなつていたことだらう。

隻眼へのからかい

以上、蕭繹の有する三つのひけめについて、その概略をのべてきた。生まれに関するひけめ、すぐれた兄弟へのひけめ、そして隻眼へのひけめ——の三つである。

このうち、蕭繹にもっとも打撃をあたえたのは、もちろん、みつつめの隻眼になったことだつたらう。このひけめが、のちの蕭繹の生涯にいかに影響したかについては、近時、洪衛中氏が「從 吾于天下為不賤焉 到 擬迹桓文 関于梁元帝蕭繹行為の心理学解釈」(「揚州大学学报」一四 一 二〇一〇) という論文において、心理学的立場から詳細に論じてくれている。以下、おもにこの洪氏の御論に依拠しながら、隻眼によるひけめが、蕭繹にあたえた影響をみてゆこう。

まず、失明後の蕭繹の外見は、どうであったのか。

これは、よくわからない。失明したのは右目だったのか、左目だったのか。失明後は、片目がとじてしまったのか。それともあいてはいるが、ものがみえなかったのか。眼帯のようなものをしていたのか、していなかったのか。これらのことは、いっさいあきらかではない。ただ、いずれにしても、隻眼となった蕭繹の風貌は、よくない意味で、そうとう人目をひいたこととおもわれる。

六朝の逸話集『世説新語』に容止という篇があり、そこに、容貌に関する話柄があつめられている。そのうちのひとつを紹介しよう。

潘岳は美男で（原文「妙有姿容」）、魅力的であった。彼が洛陽の街をゆくと、女性たちが手をつないで、まわりをとりまいた。いっぼう、左思はたいへんみにくかった。彼が潘岳をまねて街にでかけるや、老婆たちはみな、いっせいに唾をはきかけた。左思は気をおとして家にかえっていった。

この話が暗示するように、六朝のころは、知識人のあいだでも、そして男のあいだでも、容姿の美醜が問題にされやすかった。男性が「妙有姿容」「美姿儀」「容貌整麗」であることは、それじたい価値あることだったのである。それゆえ美男は、ただ美男であることによって称賛され、たかい評価をうけられる時代だったのである。

そうした時代に、蕭繹は、片方の目をうしなったのである。これは、実生活で不便だったというだけでなく、当時の社交や世評の場において、そうとうマイナスになったこととおもわれる。

そうした例のひとつとして、やはり『世説新語』の話を紹介しよう。東晋の殷仲堪いんちゆうかんという男に関する逸話である。この殷仲堪、軍閥として重きをなした人物だったが、彼も片目を失明していた。

あるとき、画家の顧愷之が彼の肖像画をかこうとした。すると殷仲堪は、「わしはみにくいから、かかんでもいいよ」といった。すると愷之は、「片目を気にしてるんだね。だいじょうぶ。腫をきちんとかいたあと、

飛白でかくし、浮雲がお日さまをぼかしたようにするからね」といったという。

この話、巧芸篇におさめられるので、もとの趣旨は、顧愷之の画家としての手腕をたたえるものだったとおもわれる。だがこの話、顧愷之と殷仲堪との友情をかたった、美談だともいえなくもなさそうだ。ここでいう「飛白」とは、刷毛で「字や絵を」かすれさす手法をいう。浮雲がお日さまをぼかすように、隻眼もよくわからぬようにするから、だじょうぶだよと愷之はうけおったのである。

この話で注目したいのは、仲堪が自分の顔を「みにくい」（原文は「形悪」といつていることだ。後人の劉孝標は、ここに「仲堪は眇<sup>びやう</sup>目なるが故なり」と注している。つまり仲堪は、自分の隻眼を「みにくい」とおもいこんでいたのである。だからこそ、そうした仲堪の心情を察して、飛白の手法でわからぬようにするから、だじょうぶだよと愷之はいったのだらう。このように六朝では、「妙有姿容」が称賛されるのと逆に、隻眼は「形悪」として嫌悪されるものだったのである。

とすれば、蕭繹の場合も、たんに「片目でこ不自由でしようね」のとき同情だけでは、すまなかつたらうとおもわれる。いくら武帝の息子だったとはいえ、蕭繹の場合も、隻眼をみにくいとされ、嫌忌のまなざしをあびることも、すくなくなかつたらう。ましてや、兄の蕭統は「姿貌美しく、挙止を善くす」だったし、蕭綱のほうも「方頤<sup>ほうい</sup>にして豊下なり」という貴相をもっていた。「それにくらべて、あの七符（蕭繹の幼時のあざな）のほうは……」というひそひそ話は、きつと蕭繹の耳にもとどいていたにちがいない。

じつさい、蕭繹の隻眼は、当時の口さがない人びとのあいだで、かっこうの話題になっていたようだ。いろんな書物に、この蕭繹の隻眼の話がのせられ、現在までつたわっている。そのいくつかを紹介しよう。まずは、片目をつしなった原因に関する話。

蕭繹の母の阮修容があるとき、珍珠をなくしてしまった。蕭繹は当時ちいさく、これをのみこんでしまったのである。だが阮修容は、おつきの者がぬすんだのだとおもいこんだ。そこで魚「をころし、その眼をあぶつて、珍珠をぬすんだ者を呪詛しゅそしたのである。ところが二日後、珍珠は蕭繹のお尻から、大便といっしょにでてきた。

それからまもなくのこと、蕭繹は片目を失明してしまったのだ。おもつに、ころされた魚がたたったのだらう。

この話は、蕭繹の失明を因縁はなしにしたてたものだ。『太平広記』におさめられるので（巻一三一「報応」）、母の阮修容が珍珠をなくした話柄じたいが、そもそも信用できない。だが当時、こつした話が世間にひるまわって、あちこちでささやかれていた可能性は、ないとはいえないだらう。この話柄を、もし蕭繹母子が耳にしていたら、どんな気もちになったことだらうか。

つぎは、『南史』后妃伝下におさめられているので、実話だった可能性がたかい。

蕭繹の妻の徐妃（本名は徐昭佩）は、東海郷のひとである。祖父は齊の太尉、枝江県侯であり、文忠公と諡された。父の緄は侍中で信武將軍だった。彼女は、天監十六年十二月に湘東王の蕭繹の妃となり、世子の蕭方等や益昌公主含貞をうんだ。

だが、この徐妃は美人でないうえ、礼儀もまもらなかった。蕭繹は結婚後、二、三年に一度しか寢室にでむかなかった。徐妃は、蕭繹が隻眼だということ、彼が寢室にやっこよつとするたび、いつも顔半分だけ化粧してまちうけたのである。蕭繹はこれを見るとたいへんいかって、寢室からとびだしたのだった。

はじめに徐妃の祖父や父のことを叙しているのは、要するに、彼女が名門の出だったことを、いおうとしたの

だろう。その徐昭佩は天監十五年（十六年はあやまり）、九歳の蕭繹と結婚したのだった。べつの資料によると、この徐昭佩が不品行だったこともあって、この夫婦の仲はたいへんわるかったという。たとえば、彼女は酒ずきで、深酔いしては、やってきた蕭繹の服のなかへゲロをはいた。また、智遠道人という僧や暨季江という美男をこのんで、私通した。蕭繹の子をはらんだ妾がいると、刀できりつけた——などの話のこっぴいる。

ところで『南史』のこの話では、徐妃が蕭繹の隻眼をからかっているのに注目しよう。蕭繹が夜、夫婦の寝室へやってくるや、彼女は顔半分だけ化粧して、これをむかえた。片目しかないのだから、半分だけの化粧でもかまわないという、夫へのあてつけだろう。徐妃からすれば、自分が美人でないため、二、三年にいちどしか寝室にきてくれないので、それへの仕返しだったのかもしれない。

蕭繹は史書に「声色を好まず」、つまり音楽や女色をこのまなかつたとするされている。じつさいはそうでもなかつたようで、おおくの美人を後宮にいれたり（たとえば後述する西帰内人）、宮体ふうの詩をつくつたりしている。だが、やはり真の意味では、蕭繹は女性をいつくしみ、たいせつにすることはなかつたようだ。蕭繹が母に依存するマザコンふう性格だったこと（後述）、そしてこの徐妃との不幸な結婚生活などが、その遠因だったのかもしれない。

### つよい劣等感

右の徐妃との話柄で、問題だとももわれるのは、「蕭繹はこれを見るとたいへんいかって」（原文は「帝見則大怒」）いることである。蕭繹は、妻の「顔半分だけ化粧してまちうけた」行動に対し、「たいへんいかって」いるのだ。もちろん、自分の隻眼をからかわれて、うれしいはずはあるまい。だが、そうだったとしても、「いかる」

のではなく、鷹揚に「わらってすます」というやりかたもあつたのではないか。それが、貴人の大度をしめすことにもつながるのである。

たとえば、さきにもあげた殷仲堪は、それができた。隻眼をからかわれても、いかつたりせず、悠然とふるまえたのである。この仲堪というひとは、政治家としてもおもんじられていたが、また友人たちと談論をたのしんだりもしていた。ある日のこと、友人たちと「危語」というあそびをした。これは、各自が危険な内容の詩句をつくり、末尾に「危」と同韻をひびかせるというゲームである。

矛のさきで米をとぎ剣のさきで炊く

矛頭浙米劍頭炊

百歳の老翁が枯枝によじのぼる

百歳老公攀枯枝

井戸の轆轤のつえに嬰兒を横たえる

井上轆轤臥小兒

などの句が披露された。たしかに危険な内容（押韻にも注意）である。この席に仲堪の部下である、ひとりの参軍がいた。その参軍が、

盲人が盲馬にのり 夜中に深池にちかづく

盲人騎瞎馬 夜半臨深池

という句を口にした。もちろん、隻眼の仲堪をあてこすつたものだ。だが仲堪、この句を耳にしても、「おやおや、グサツとくるなあ」（原文は「咄咄逼人」といったただけだったという）『世説新語』排調）。

このように殷仲堪は、自分の部下に、おのれの隻眼をあてこすられても、それをグツとのみこむことができた。「ばかにされた」といって、おこりだすことはなかつたのである。そもそも、部下が仲堪そのひとのままで、隻眼をあてこすることができることじたい、彼の度量のおおきさをしめすものだろう。仲堪は、おそらくふだんから、余裕のある、おおらかな雰囲気を持ただよわせていたのにちがいない。だからこそ、周囲の人びとも、「グサツ

とくる「ような詩句を、彼のまえで平気で口にできたのである。

ところが、蕭繹のほうはちがった。彼は自分の隻眼を恥だと感じ、それを指摘されることをいやがっていた。だからこそ、妻の言動に怒りをおさえられず、「たいへんいかって」しまったのだろう。こうした態度は、妻に對してだけではなかったようだ。たとえば『南史』劉諒伝に、つぎのような話もある。

劉孝綽の息子の劉諒は、蕭繹からかわいがられていた。

あるとき蕭繹は、長江の川辺で秋の美景を堪能していた。すると諒が、「今日のような日こそ、帝子は北渚に降る かもしれませぬ」といった。だが、蕭繹は隻眼だったので、自分を揶揄したものとおもいこんだ。そこで蕭繹は、「そちは、目眇眇として以て予を愁えしむ」といいたいのか」とこたえたのである。

これからあと、蕭繹は諒をきらうようになった。

ここで劉諒が蕭繹にかたったのは、屈原の作とされる「九歌」湘夫人の冒頭の一節である。その部分を紹介してみれば、

堯の娘たる湘水の女神が、長江の北渚にお越しになった

帝子降兮北渚

目もとつるわしく、ちかく侍せられぬ私をかなしくさせる

目眇眇兮愁予

そよそよと秋風がふきよせてき

嫋嫋兮秋風

洞庭湖の水は波だち木葉がまいおちてきた

洞庭波兮木葉下

というものである。秋風がふきよせる長江、その畔に湘水の女神がお越しになられた、というものだ。この「九歌」の詩句、秋の長江の景物を叙しており、いま劉諒らの眼前にひろがる美景に、ふさわしいものだといつてよい。だから、劉諒は気をきかしたつもりで、初句「帝子は北渚に降る」を口にしたのである。ところが、蕭繹は

この発言を、劉諒が自分の隻眼を擲したものとおもいこんでしまった。だから、つづく第二句「目は眇眇として予を愁えしむ」を口にだし、おまえは「目が隻眼なので、自分をかなしい気分にさせる」「眇」は隻眼の意もある）といつて、オレをばかにしているんだらう、といったのである。

これは、とんでもない誤解だとせねばならない。この「目眇眇」は、「湘水の女神の「目もとがうるわしい」の意だが、蕭繹はあえて「自分の「目が隻眼である」とわるいほうに解釈したのである。いいがかりというべき解釈だが、しかしこのときの蕭繹は、ほんとうに擲されたとおもいこんだのだらう。こうした過剰な反応は、蕭繹がひごろから自分の隻眼に、つよいコンプレックスを感じていたことをしめしている。だからこそ、他人のなにげない一言にも、感情的かつ過剰に反応してしまったのだらう。

また『太平広記』卷三三六「鬼」には、つぎのような話もある。

蕭繹は、片方の眼を失明していたので、いつも盲人に関する話をさせていた。

彼が湘東王として、荊州に鎮していたとき、彼は博士に命じて『論語』を講義させた。郷党篇の「瞽者を見ては必ず色を変ず」のくだりにさしかかったが、博士はこの部分を省略せずに講義をつづけた。蕭繹はおおいに怒りを発して、その博士を毒殺させたのだった。

『論語』郷党に「齊衰の者を見ては、狎れるも必ず変ず。冕者と瞽者とを見ては、褻と雖も必ず貌を以てす」という一節がある。孔子は服喪中の者や盲人にであったときは、懇意な関係であっても、かならず真摯な顔つきをした、の意である。ここの「瞽者」は盲人の意だ。その「瞽者」がでてくる句を、博士は平気で講義しつづけた。蕭繹はこれを、「自分をあてこすっているんだらう」とおもいこんだのである。だから蕭繹は、博士を毒殺させたのだった。

このように蕭繹は、自分の隻眼をつよく意識するあまり、つい、他人からかわれたとおもいこんで、過剰に反応しがちだったようである。そのため、だれかがつつかりその忌避にふれたなり、おおいに怒りを発したり、毒殺させたりしたのだった。もっとも、右の博士を毒殺した話、『広記』におさめられる話なので、事実かどうかはかなりあやしい。だが、事実かどうかよりも、そうした話柄が残存していることのほうに留意せねばならない。つまり蕭繹は、そうしたことをしでがちな男だ、とおもわれていたのだろう。だからこそ、こうした話柄が記録され、現在までつたわっているのである。

こういう調子では、蕭繹の周辺には、ピリピリとした雰囲気、ただよってこざるをえなかつたろう。なぜ蕭繹は、あの殷仲堪のように、鷹揚になれなかつたのか。それはもう、彼の性格がそうだったとしかいいようがない。

#### 母子一体

蕭繹は成人後、とくに侯景の乱が発生したあとは、かずかずの残酷な殺戮行為をなし、その毒牙からのがれた者はすくなかつた。血のつながらぬ他人はいうまでもないが、自分の兄弟や親族に対しても、冷酷にあつたつり、危害をくわえたりしたのだった。

そうしたなか、彼の毒牙にかかることなく、死ぬまでたいせつに遇された人物がいる。それが、彼の生母たる阮修容である。

彼女はこの蕭繹に、無私の愛情をそそいだ（彼女が武帝とのあいだでうんだのは、この蕭繹だけである）。たとえば、蕭繹が眼疾にかかったとき、「余の」眼を患わづいし始め、「母は」衣ひは帯おびを解とかず。冬は則ち炎火に近づ

「かず、夏は則ち敢えて風に涼まず。此くの如きことありて寒暑を離たり」(『金楼子』后妃)。着物の帯をとくとなく、けんめいに自分の看病をしてくれた。その間、冬は火のそばにちかづかず、夏は風ですずまず、というふうにして日々をすごされた、という。

だが、看病の甲斐なく、蕭繹は片目をつしなった。すると彼女は、なおさら隻眼の息子をいつくしみ、庇護してやまなかったという。そうした母の愛情は、少年のころにかぎらなかった。蕭繹の成人後も、彼女はずつと息子の赴任先に同行し、諸侯王として政務にしたがう蕭繹を、そばで忠告し、はげましつづけた。

おかげで、息子の蕭繹のほうも、この母親につよい感謝の情をいだいた。そのため蕭繹は、これ以上ないほど母をたいせつにし、うるわしい母子関係をたもちつづけたのだった。

そして、そうした結果として、蕭繹『金楼子』の后妃篇のなかに、母親の一代記といふべき文章が収録され、現在にまでのこったのだった(前述)。「阮修容の事迹については、『梁書』や『南史』にはごく簡略なことしかかかれていない。だがこの『金楼子』の記述によって、我われは阮修容のひととなり、くわしくすることができ

る。

同書によると、彼女はじつさい、よくできた女性だったようだ。

たとえば、彼女はなごやかな性格で、明朗な氣質を有していたようだ。くわえて、賢明だという評判がたつたうえに、女の鑑かがみとされるべき徳も有していた。少女のころは、多忙な父にかわって、家政のきりもりをし、「女王」とよばれつつ、弟や妹の面倒をよくみた。長じては、まず齊武帝の後宮にはいり、つづいて蕭遙光をへて、梁の蕭衍の後宮にはいったのである。遙光に侍していたころは、よく礼儀をつくして妃につかえ、また主君をいさめることもあったという。

かく賢明で、女性の鑑で、また女功にもすぐれていた云々は、この種の女性の伝記では、よくかかれる事であり、それほど珍奇なことではない。だが注目すべきことは、彼女は、数歳で左思「三都賦」を暗誦し、五經の要旨も理解した、ともあることだ。男性だったなら、この種の記述にはときどきお目にかかるが、女性でありながらかく学問をしたというのは、めずらしいこととせねばならない。

かかる学識があつたからだろう、蕭繹は幼時、他でなくこの阮修容から、『孝経』『正覽』『論語』『毛詩』などをまなんだという。さらに、彼女は仏教にも関心があつたようで、『維摩経』にくわしかつた。また『雜阿毘曇心論』の第一人者と称されていて、三十年も『阿毘曇心論』の講義をしつづけ、ついに自分で『雜心講疏』なる著作（たぶん『雜阿毘曇心論』の注釈書だろう）をかきあげたという。蕭繹の母の阮修容は、ゆたかな母性だけでなく、こんな知性ももっていたのである。

いっぽう、この阮修容は、たいへんな孝女でもあつた。修容の父がなくなり、また母の陳氏も逝去するや、彼女は遺体にとりすがつて慟哭した。そして木をけずって両親の像まようをつくり、朝に夕にその像にお仕えたという。これからずつとのち、武帝と阮修容の没後、蕭繹もまた、木をけずって両親（武帝と阮修容）の像をつくり、朝に夕にお仕えしている。このように蕭繹は、母がその両親にしたのとおなじことを、みずからもまた実践しているのである。

『南史』元帝紀は、こつした蕭繹の行為を、体面をとりつくろつたための偽善的しわざだとして、きびしく非難している（後述）。たしかに、虚飾をこのんだ蕭繹のことだ。そつした意図も、なくはなかつたであろう。だが同時に、心理学ふうにかんがえれば、敬愛する亡き母の行為を、自分もまたまねてみたということも、多少はあつたのかもれない。

奇妙なことに、この阮修容と蕭繹の母子は、誕生時においても、ふしぎな暗合が発生している。天監七年に蕭繹が生まれたとき、彼が紫の袍衣につつまれていた、ということ、前述したとおりだ。ところが、母の阮修容がこの世に生まれたときも、「生まれて紫袍あり。朝請府君（阮修容の父）は以て靈異なりと為せり」。やはり紫の袍につつまれていて、父の石靈宝をふしぎがらせているのである。おそらく成人後、蕭繹はこうした暗合を耳にし、ますます母への愛情をふかくしたことだろう。

上昇意欲

さきの章では、蕭繹が有するひけめ、なかでも十四歳時の片目失明と、それによる劣等感とについてのべた。叙述が、しばしばさきにすすみ、青年後までおよんでしまった。この章では、時間をもとにもどし、わかい時期具体的には失明後から三十二歳のころまでをあつかう。

この時期の蕭繹の官歴をみておこう。蕭繹は七歳（五一四）で湘東王となり、九歳で徐氏と結婚し、建康市内の西州にすんだ。そして十歳で、寧遠將軍となり、さらに琅邪と彭城の太守に任じられて赴任した。じっさいに建康から任地へでたのは、このときがはじめてだったようだ。

さらに十二歳（五一九）のときには、会稽太守となった。彼が心気疾（てんかんや不安障害のような疾患か）を発症したのが十三歳。おなじく眼疾が悪化して、片目を失明したのは十四歳だったので、ともにこの会稽太守だったときのことだろう。そして十五歳のときに、丹陽尹となって建康にもどってきたのである。建康にいた時期は、十九歳のときまでだった。この時期までは、まだ少年期だといってよからう。

十九歳（五二六）になると、彼は荊州刺史となって江陵へ赴任していった。この荊州刺史に任ぜられたあたりから、蕭繹は、ひとりのわかき地方官として、じっさいに政務をとったものとおもわれる。この期間はながくつづき、三十二歳（五三九）のときまで、荊州の中心地だった江陵にとどまったのである。

さて、さきにみた隻眼による劣等感は、おおきくいえば、ふたつの方向へ蕭繹をみちびいていったようだ。ひとつは、異常なほどの上昇意欲であり、もうひとつは、強烈な被害妄想のほうへ、である。より具体的にいえば、

前者は、おのがハンディをバネとして、まけてたまるものかと努力する、前むきの向上心としてあらわれた。後者は、自分の隻眼をからかい、侮蔑している「と蕭繹がおもった」連中をにくみ、害をくわえてやるつという、後むきの悪意として発現してきたのだった。

この章があつかう三十二歳までは、右でいう上昇意欲がさかんな時期であった。蕭繹は、片目失明「や心気症」というハンディをおいながらも、けつして悲観したり消極的になつたりせず、学問をこのみ、よく読書にはげんだ。そうした蕭繹を、父武帝はとくにかわいがつたという。つぎのような話のこつている。蕭繹が十七歳だったときのこと（蕭繹は丹陽尹となり、武帝のそばにいた）、武帝は彼に「むかし「呉の」孫策が江東を支配したときは、いくつだったかな」とたずねた。彼が「十七歳でした」というと、武帝は「ちよつど、いまのおまえの歳だぞ」といつてはげました――。

こうした話柄のこつていたとしても、武帝は、蕭繹を孫策のごとき勇敢な武將に、したてあげようとしたわけではあるまい。そもそも隻眼となつては、武術に熟達するのはむづかしい。わが梁室にはさいわい、できよい長男の皇太子（蕭統）がいるし、五男（蕭統）にいたつては、膂力がつよく馳射もつまくて、わが家の任城王（曹彰）のごとき存在だ。そつだとすれば、七男の蕭繹よ、おまえは梁室の藩屏、つまり地方官となつて、自分「自分亡きあとに帝位をつぐはずの」蕭統をしつかり補佐してほしい。そのためには、武術より学問のほうがないせつだ――おそらく武帝は、こつかんがえていたのだらう。

そのためか、武帝は蕭繹の周辺に、おおくの学者や文人をあつめた。それは裴子野、劉頤、蕭勵、張纘、王筠、賀革、劉孺、王籍、顔協（顔之推の父）、顧協、劉杳、蕭子雲などだ。蕭繹はこつした人びとを、いわば随時の家庭教師として、学問や詩文の研鑽にはげんだのである。なかでも、蕭繹はわかりしころ、裴子野以下の四人

としたしく交際したようであり、『金樓子』序でも、これら四人は「余の知己ちきなり」とかたっている。

### 熱心な読書

蕭繹は、こうした父帝の期待にこたえようとしたのだらう。自分のため、そして有能な地方官となるため、学問に熱心にはげんだのである。この時期の蕭繹の研鑽けんざんぶりをつたえる資料を、以下に紹介しよう。

ひとつめは、顔之推（五三一～六〇二？）がしるした蕭繹の思い出である。この之推は蕭繹より二十三歳年少で、やはり学問ずき。わかいころから蕭繹につかえ、主君として敬意をほらっていた。

後日のことになるが、この顔之推は、蕭繹の江陵政権が崩壊するや、例によって虜囚となり、西魏に拉致されていった。二十四歳のときである。だが他人とちがって、之推は、たぐいまれな行動力があった。彼は拉致されて二年後、西魏から隣国の北斉（東魏の後身）への脱出をはかったのだ。北斉をへて、南方に帰還せんと欲したのである。あるとき、黄河の水が氾濫した。この機をまっていた之推は、妻子ともども、あれるう黄河の流れに舟をうかべ、いつきに川下へながれくだった。氾濫し増水した河流は、岩礁おおき浅瀬も安全な水路にかえてくれ、之推一家は、ぶじに北斉に脱出することができたのである。北斉の地では、優遇されて高官にのぼるが、やがて北斉は北周（西魏の後身）にほろぼされる。すると之推はやむなく、また北周につかえ、やがて隋になつてから没したのだった。

その之推、晩年、子弟のために家訓書『顔氏家訓』を執筆したが、その勉学篇のなかで、自分のわかいころ（江陵での日々）をふりかえって、つぎのような主君（蕭繹）の思い出をつづっている。

梁元帝さまがむかし、私（顔之推）にかたってくれたことだ。

「以前、余（蕭繹）が会稽太守だったころ、まだ十二歳になったばかりだったが、もう学問がすきになっていた。そのころ余は疥癬がひどくて、手もうまくにぎれず、膝もまげられぬほどだった。じゃが書齋に蚊帳をつつて、蚊をさけて独座したものじゃ。そして銀がめに山陰の甘酒をおき、それをときどき口にしながら、疥癬の痛みをやわらげた。こうやって気ままに史書によみふけり、一日に二十巻もよんだ。まだ先生から句読をつけておらぬので、しらぬ字やわからぬ語ができたが、なんどもよみかえして、あきることがなかったものだ」と。

蕭繹が、自分の十二歳のころの思い出を、わかひ之推にかたつたものである。似たような内容を、蕭繹は自分で『金樓子』自序にしている。この話は事実なのだろう。この時期、蕭繹は疥癬になやんでいたのだが、眼疾のほうはまだ悪化していなかったようだ。自分で書物をよんでいる。

十二歳といえば、いまだというと小学六年生である。この記述によると、小六の蕭繹は甘酒のみながら、一日に二十巻もの量の史書をよんだという。史書だから、彼がすきたった諸葛孔明の伝記でもよんでいたのだろう。当時の書物、一巻にどれくらいの字数がしるされていたのか不明だが、そうとうの読書量だったにはちがいない。ふたつめは、片目を失明したあとのエピソード。

右の話から二年後、十四歳のときに、蕭繹は片目の視力をうしなった。もちろん、のこった目で書物をよむことはできる。だが片目だと、つかれやすかったり、遠近感がなくなったり、視界がせまくなったりするだろう。とうぜん読書にも支障が生じやすい。では蕭繹はどうしたか。

彼は、無理して自分でよむことをやめた。そのかわり、配下の者に書物を読誦してもらい、それを耳でききとったのである。いわば「耳できき読書」といえようか。

『南史』元帝紀によると、蕭繹は片目の失明後、自分では書をよまぬかわりに、読みあげ係をそばにおいた。彼が読誦をきくのは、昼夜をとわぬ。読誦する者は途中で交代するが、蕭統自身は、ずっと耳をかたむけつづける。自分がねむったときでも、読誦は中断させない。五人の読みあげ係が一更（約二時間）ずつ担当し、いつも夜明けまでつづいた。深夜になると、蕭繹は熟睡していびきをかく。読みあげ係もねむくなってきて、読誦の順序がくるったり、巻や頁をとばしたりする。すると、帝はかならず目をさまして、読みなおしを命じ、また鞭でうたせたという。

そうした熱心な「耳できく読書」の結果、蕭繹は博大な学識を身につけた。これは、ただ知識をふやすだけでなく、もつとべつの動機があった。それは著述の資とすることである。すなわち『金樓子』序に、

私は戸口や窓のそばに筆記具をおき、いつでも著述するよう心がけていた。淮南王劉安や呂不韋が他人にたよって書物をかいたのを、なさけないことよな、と嘲笑したものだ。だから私は、まだ志学だったころから、めずらしい記事をさがしだしては、自力で一家の言をかきあげようとしたのである。

とある。右の文中の「志学」とは十五歳のことだ。すると蕭繹は、片目をうしなつた翌年のころから、「劉安や呂不韋のように」他人にたよることなく、自分ひとりの力で一家の言（たとえば『金樓子』などがそれだろう）をつづりあげようとしたころざしたようだ。こうした熱心な「耳できく読書」は、その著述のための準備でもあったのだらう。

以上のふたつは、梁室の藩屏になるため努力したというより、むしろ自分の好みに熱中していただけ、というべきかもしれない。だが、こうした行為は、広義の学問だといってよいだらうし、そしてその成果は、藩屏になる「はずの」蕭繹にとって、有益かつ有甲なものになるはずであった。

## 地方官の日々

ここまで、学問や読書にはげむようすをみてきた。ではこの時期、蕭繹はわかき地方官として、どんな政策を実践し、どんな成果をあげたのだろうか。

結論からいえば、地方官としての成績は、まあふつう程度だったのだろう。この時期の彼に対し、特段の称賛や非難のことはがのこされていないので、そう推測されるわけである。ただ彼なりに、努力はしたようだ。任地における治政ぶりについて、いくつかの逸話がのこっているので、紹介しておこう。

ひとつめは、蕭繹の治績をたたえた「丹陽尹湘東王善政碑」がつくられたことである。吳光興「蕭綱蕭繹年譜」によると、彼が丹陽尹をつとめた最後の年、普通七年（十九歳、五二六）にこれがつくられたとする。その碑文の序（六十九句）によれば、湘東王（蕭繹）さまが丹陽の尹となられるや、民衆がおしよせ、訴訟ごとが殺到した。だが王は、それらをあつというまに適切に処理され、まだ悠々と余力があることくであった。また農事にもご熱心で、農民への指導監督がよろしきをえたので、豊年がつつき、あまつた食糧が畝のなかにうなるほどになった。これをみた二、三の君子たちは、朝廷の許可をつけたうえで、蕭繹の善政をたたえる碑文をたてることになった云々——という事情でつくられたようだ。

以下に押韻した碑本文（三十句）がはじまり、「茫茫たる禹迹、万方を経啓す」云々とつづく。とうぜんのことながら、この本文でも、蕭繹の卓越した地方官ぶりが、経書を模した重厚な美文で叙され、その統治のすばらしさが強調されている。

この善政碑の内容をそのまま信じれば、蕭繹はたいへんりっぱな地方官だったということになる。だがこれは、皇子ゆえの特別の褒辞だとおもわれ、額面どおりにうけとめるべきではない。

なお、この碑文をつづった人物は、裴子野（四六七～五三〇）だったという。彼は、蕭綱より四十一歳も年上で、家庭教師格だった人物である。そうした裴子野、自分の孫のような青年皇子のために、格調たかい碑文をかいてやったわけだ。裴子野は、この碑文を撰してから四年後、蕭繹二十三歳のときに死去したが、そのおりは蕭繹が、尊敬する裴先生のために、「散騎常侍裴子野墓誌銘」をつづっている。

ふたつめは、地方に独自に学校をたてたことだ。右の碑文がたてられたその年の冬、蕭統は、丹陽尹から刺史として荊州へうつった。赴任した翌年、彼は同地に学校をたて、賀革を儒林祭主に命じ、儒学を講義させたのである（大通元年、五二七）。さらに同校に孔子（宣尼）廟をたて、儒林參軍一人、勸学従事二人、学生三十人をおいて、それぞれに俸禄を支給した。書や画も得意だった蕭繹は、みずから孔子像をえがき、それに賛の文をつくって揮毫したという。おかげで、当時の人びとは、蕭繹を「三絶」（詩文、書、画の三方面にすぐれる）とよんだのだった。

こうした学校や孔子廟の設置は、父武帝の熱心な文教政策に呼応したものであったろうが、おそらく蕭繹自身も学問や教育に、つよい関心を有していたからだろう。このときの学校設置にもなう文書が、二篇ほど残存している。ひとつは「召学生教」であり、もうひとつは「与学生書」である。前者はやや公的な文面なので、後者のほうを引用しよう。これは学校への入学生にむけて、蕭繹がおくった書翰文である。

吾はきく、「礼記」学記の「玉をきって器物をつくる」という話柄は、精励して道をしるべきことの喩えであるし、「易」蒙卦の「山から泉水がでて巨大な流れとなる」ということは、基礎からまなぶべきことをたとえたのである、と。だから孔子さまでも、「初步的な」射御の術をおるそかにされなかつたし、初心者も弓作りのまなびに、まずは「第一歩として」み算作りをまなんだのである。

またきく、後漢の高鳳はうつかり麦を水浸しにし、晋の車胤はむだな螢をあつめた。だが、高鳳が「鳥をおいつつ」読書に夢中になって、風雨に気づかなかつたほど愚昧だつたとか、車胤が月下で文書をかきながら、螢の明かりが微光にすぎぬのをしらなかつたとか、そんなことはありえないことであるぞ。彼らが麦を水浸しにし、螢をあつめたのは、「学問に熱中していたという」きちんとした理由があつたのだ。

このように不朽となり偉大となりたければ、学問をする以上のものはない。しつかり自身で学問をまなび、道を修得すれば、えらくなれるものであるぞ。

ここでは、『礼記』『易』の典故や高鳳や車胤の故事をひいて、学問のたいせつさを強調している。この書翰文、実態としては「学問のすすめ」なのだが、それでもかたぐるしい一方の文ではない。たとえば、後半にひかれた高鳳や車胤の故事は、兩人を揶揄したような使いかたであり、ややユーモラスな印象がただよっている。わかい蕭繹の闊達さを想像させるものだ。その意味で、文学史的には揚雄「解嘲」と韓愈「進学解」のあいだを、つくような作例だといつてよからう。

この「与学生書」、学生やその周辺の人びとに、どのようにうけとめられたのだろうか。この書翰文を読んだ彼ら、ユーモラスな故事援用にクスクスわらつただろうか、それともユーモアが理解できず、キョトンとしていたのだろうか。

さらに、この学校設置や蕭繹の学問推奨によって、学生が熱心に勉強するようになったのだろうか。そして荊州の学問水準が向上したのだろうか。この蕭繹のおこなつた文教政策、どうした成果があつたのか興味ぶかいのだが、残念ながら、それらをしりえる資料は残存しない。

## 湘東苑のあそび

地方官としての蕭繹をみてきた。善政碑をつくってもらったり、学校をたてたりしており、彼なりによき地方官をめざし、努力していたことがわかった。

ただ、こうした公務への精励は、どうやら、表むきの顔にすぎないようだ。というのは、かかる公務にはげむいっぽう、蕭繹は自分の楽しみにも熱心だったからである。『清宮故事』という書物には、この時期、彼が江陵に「湘東苑」という、豪勢な庭園をつくったことを叙している。それによると湘東苑は、つぎのようなものだったらしい。

地をうがって人造の山をつくり、それが数百丈つらなっている。さらに池には蓮や蒲をうえ、岸边にそって奇木がならんでいる。そして、通波閣という建物が池水をまたいでたてられた。

通波閣の南には芙蓉堂、東には禊飲堂、そのうしろには隱士亭もあつた。さらに北には正武堂があり、堂のまえには射棚（弓術の的をかける棚）や馬埒（乗馬の練習場）がある。その西には郷射堂があり、その堂には行棚があつて、移動させることもできる。いっぽう東南のほうには、連理の樹木がたつている。大清（五四七〜五四九）のころ、この連理の樹木がはえてきて、当時、蕭繹が踐祚する瑞兆だともつたという。さらにその北には、映月亭、修竹堂、臨水齋があつた。

また前方には高山があり、山のなかに石洞がうがたれている。その石洞は、二百余歩もあるいてゆけた。そして山のうえには、陽雲楼がそびえている。その楼にあがるとたいへんたかく、遠近がすべてみわたせた。さらにその北には、臨風亭と明月楼がたつていた。（『太平御覧』巻一九六「苑園」所収）

文中にある通波閣や芙蓉堂、映月亭、臨風亭などは、おそらく名称のままの景物がのぞめる建物だったのだろ

う。さらに正武堂と郷射堂は、どうやら乗馬や弓術もできる演武用の場所だったようだ。つまり湘東苑には、文武両様の施設もつくられていたわけだ。これからみると湘東苑は、広大な庭園というだけでなく、その内部にさまざまな建物や設備をそなえていたものとおもわれる。

蕭繹はおそらく、そうとつの公費をついやして、この庭園をつくったのだろう。苛酷な徴税や労役を課して、民衆からうらまれたという記事がのこっていないのが、むしろふしぎというべきかもしれない（武帝の息子ということで、悪評はもみけされたのかもしれぬ）。

この広大かつ豪勢な湘東苑で、公務の余暇、蕭繹はなにをしていたのだろうか。「与学生書」で学問のたいせつさを説いていた蕭繹のことだ。この庭園でも勉強部屋にこもって、読書や著述に専念していたのだろうか。

いや、それだったなら、わざわざこんな豪勢なものをつくるはずがない。おそらく気のおけない仲間たちと、風月をめで、景物をたのしみ、そして酒をのみながら、詩をつくりあつたりしていたのだろう。また正武堂と郷射堂では、不得意だった乗馬や弓術も、すこしは稽古していたのかもしれない。

この湘東苑でつくったとおぼしき詩が、現在まで何篇かのこっている。詩題だけしめすと、「春夜看妓」「後園看騎馬」「晚景游後園」「游後園」「詠陽雲樓簷柳」などがそれだ。このタイトルをみただけでも、蕭繹がどんなふうになさっていたかが推察できる。きっとここは、いこいと楽しみの場所だったのだろう。

そのなかから一篇、「春夜看妓」という詩をとりあげてみよう。すると、

蛾眉のような明月がのぼってくるなか

蛾眉漸成光

燕姬たちが小部屋のなかでたわむれている

燕姬戲小堂

やがて胡舞しながら閨房の戸をあけて

胡舞開春閣

鈴をならしつゝ廊宇まででてきた

鈴盤出歩廊

開始の笛が笙のリズムをととのえ

起龍調節奏

結尾の響きは笙の音をおさめる

却鳳點笙簧

樹木が舞席にまでその枝をひろげ

樹交臨舞席

蓮の花が燕姫たちの行く手をはさむかのよう

荷生夾妓行

竹が密生しているので影も区別なく

竹密無分影

花はまばらにさいてつよい香りをはなつ

花疏有異香

燕姫たちは酒杯を手にもつてわらいつづけ

拳杯聊転笑

よるこんで楽しみのつきることがない

歡茲樂未央

というものだ。春夜、妓女（燕姫）たちはあでやかに歌舞し、音楽もにぎやかに奏されている。竹がうわり花がさきはこる庭園のなか、彼女たちは、酒杯を手をわらいつづけ、楽しみはつきることがない……。艶詩ふうの娯楽的な詩だといふべきだろう。

『蕭繹評伝』六十七頁は、蕭繹のこうした日々を「荊州刺史として日々をすごすうちに、蕭繹もしだいに豪奢や浮薄さにそまっていき、このましくない傾向があらわれてきた」とのべ、こうしたあそびを批判的にみている。ここでいう「豪奢」（原文「奢華」）なるものは、湘東苑をつくったことをいい、「浮薄」（原文「浮躁」）というのは、そこで右のような詩をつくったりして遊宴することをさすのだろう。

ただ私は、そこまで批判的にみなくても、よいのではないかとおもふ。豪奢さにそまっていたというが、要は、建康にはあつた豪奢な庭園が江陵になかったので、蕭繹がつくったというだけのことだろう。また、浮薄さ

にそまっていったというが、この種のあそびは、魏の曹丕らの「南皮之遊」以来、六朝の貴公子や文人たちのあいだで、ひろく流行していたものである。彼の兄弟たちも、おそらく似たようなことをしていたはずだ（ただ長兄の蕭統だけは、妓女の歌声をすきではなかったようだ）。つまり蕭繹も、まじめいっぽうに学問や著述にはげむだけでなく、ふつうの公子なみに、遊宴もたのしんでいたということだろう。

ちなみに、この荊州刺史のとき、蕭繹はすでに片目をつしなっている。書物をよむのは、「耳で大きく読書」でござなっていた蕭繹だが、右のような詩文をつくる場合は、どうしていたのだろうか。史書には、口述筆記したという記事はのこっていない。逆に『南史』元帝紀には、「戎略殷湊し、機務繁多なりと雖も、軍書羽檄、文章詔誥は、毫を点ずれば便ち就り、殆んど手を遊ばさず」、軍務がたてこみ、仕事が多くなるときであつても、軍書や檄文、さらに書類や詔勅の類は、さつと自分で筆をくだしてかきあげ、ほとんどやすむことがなかった、とある。この記事は壮年期のことをいうのだろうが、おそらくわかいころから、こつだったのだろう。すると蕭繹は、湘東苑で詩句をつづる場合でも、自身で筆をとつたものとおもわれる。そうだとすれば文筆活動においては、とくに不便することはなかったとかんがえてよさそうだ。

蕭繹にはおおくの著作があるが、この種の艶麗な詩をおさめたものとして、自身の文集のほか、『西府新文』という選集もあつたらしい。この『西府新文』は、蕭繹が配下の蕭淑なる者に命じて編纂させたもので、西府（江陵）で編じた斬新な詩集ぐらいの意味だろう。これに蕭繹はじめ、その周辺の文人たちの艶詩を収録したのだとおもわれる（呉光興『蕭綱蕭繹年譜』一九八頁は、大同元年 五三五、蕭繹二十八歳のときの編とみなす）。顔之推は、自分の父（顔協）の詩は典雅なものばかりで、鄭衛の音ふつなもの（艶詩をさすのだろう）はなかった。そのため父の詩は、『西府新文』に一篇も収録されなかった——とのべて、くやしがつている（『顔氏家訓』

文章篇)。

この種の艶麗な詩は、密室で苦吟してつくるものでなく、文学サロンでワイワイと唱和しながらつくるものである。すると蕭繹は、自身でも艶詩をつくり、また『西府新文』も編纂させるなど、けっこう周辺の文学仲間と詩歌(艶詩がおおかつたのだろう)の唱和をたのしんでいたようだ。

その意味では、この荊州刺史をつとめていた時期、蕭繹はまだ社交的であり、仲間とまともな交遊ができていたのだらう。すくなくとも、「隻眼を侮蔑されたとして」劉諒の発言にからんだり、博士を毒殺したりするような(第二章の「つよい劣等感」を参照)、ひがみ根性はまだ露呈させていなかったのである。

詩文の腕も達者

じつさい、この時期までの蕭繹は、まだまだもたつた。後年において、吾こそ帝位につくべしとして、鬼神のごとく親族や兄弟を殺戮していったころとはちがい、いろんなひとと友好的に交遊することができていた。そのころの蕭繹の日常を、書翰文などで概観しておこう。

まずは、わかいた十代のころ。

蕭繹は十五歳(いまでいえば中三)のとき、まだ会稽太守だったころだらうか、耳よりな情報をきいた。それは、長兄の蕭統(このとき二十二歳、いまでいえば大学四年生)が、側近の劉孝綽に命じて自分の文集を編集させた。さらに『詩苑英華』なる五言詩の選集も、完成させているらしい——というものだ。このニュースを耳にするや、蕭繹は矢も楯もたまらず、蕭統に手紙をだした。そして、できたばかりの兄の文集と『詩苑英華』とをみせてほしい、とおねだりしたらしい。そうした七弟のお願いに対し、心やさしい長兄は、「わかつたよ、お

くるよ」という返事をかきおくれたのだった。蕭繹がねだった手紙は残存せぬが、蕭統の返書がのこっている。それはつぎのようなものだ。

お手紙拝領。『詩苑英華』と私の文集がほしいんだね、わかったよ。

文箱をあけておまえの手紙をとりだしてみると、よみだしてとまらなかつた。おまえの手紙「や同封の詩文」は、主題は虚構をまじえ、内容は見当ちがいの比喩をつかっているが、それでも清新さがとびぬけていて、じつに佳作だとおもう。

いったい、文学は典雅であれば粗野になりやすく、美麗であれば浮薄になりやすいものだ。美麗でありながら浮薄でなく、典雅でありながら粗野でなければ、ぶんしつひんびん文質彬彬として君子の気風をそなえたものになる。私はそんな詩文をつくりたいんだが、残念ながらうまくかけない。

ところがおまえの詩文をみると、びたり文質彬彬の風をそなえているじゃないか。今回のおまえの手紙の文などは、ことにすばらしい。古風な趣をそなえ、古籍をまなんでいるから、おかげで成果がよくできていて、すくすばらしいできになっているよ。

前半だけを訳してみた。この返書、いかにも仁愛のひとたる蕭統らしい内容である。中二の弟の手紙「や詩文」をよんで、大四の兄貴が「文質彬彬の風をそなえているよ」と、ほめているのだ。この時期、書翰の文は文学性を意識してつづっていたので、蕭統も文学として弟書翰を評しているのだらう。もちろん、この兄の好意的な批評、身内の称賛なので、わりびいてかんがえる必要がある。さらに片目を失明した弟をばげまそうという意図もあつた、ということも想定せねばならない。

それでも、この長兄の書翰文から、この時期の蕭繹について、つぎのふたつは指摘できそうだ。

ひとつは、この時期から詩文の創作に、つよい意欲をもっていたということである。だからこそ、長兄の文集と『詩苑英華』とをおくってほしい、とのぞんだわけだ。もし詩文に関心がなければ、そんな手紙をだすわけがない。

それにしても、まだ印刷術がなかった当時のことだ。長兄の文集にしろ、『詩苑英華』にしろ、基本的に一冊しかなかったはずである。それをねだられ、おくることを了承したということは、蕭統はおそらく側近の者に筆写を命じて、副本をつくらせるつもりだったのだろう。それを蕭繹におくろうというわけだ。その意味では、けっして容易なことではなかったろうが、この兄弟、それを苦もなくできる経済的、そして人的な資源にめぐまれていたのである。

もうひとつは、蕭繹の詩文の腕前が、それなりのレベルに達していたろうということだ。というのは、蕭統の褒辞「清新さがとびぬけていて」「文質彬彬の風をそなえている」はかなり具体的であり、空虚なお世辞ではないからである。ただ残念ながら、かく称賛された蕭繹の書翰文はのこっていない。だから、どんな文章だったのかはわからぬが、おそらく、中三としてはよくかけているというレベルではなく、ひとりの文人として評価にたえる、文質彬彬たる行文だったのだろう。

では、このころの蕭繹の詩文能力は、どの程度だったのだろうか。当時かかれた書翰文は残存していないが、すこしおくれた時期の作として、『劉孝綽書』という書翰の文がのこっている。これをよんで、わかき蕭繹の腕前をうかがってみよう。

この書翰文は普通七年（五二六）、蕭繹十九歳のときの執筆である。蕭統に文集をねだってから四年後、荊州に赴任してまもなくの作ということになる。おくれた相手は劉孝綽（四八一―五三九）、このとき四十六歳。さ

きにもふれたように、この孝綽は、蕭統の文集を編纂するなどしており、人脈的には長兄のほうにちかい。

この孝綽、詩才が卓越し、当時では、いわば文壇の大御所と称すべき存在だった。ところがその性格たるや、狷介にしてかつ傲慢。他人と悶着をおこすトラブルメーカーとしても有名だった。じつさい、蕭繹がこの「与劉孝綽書」をおくったときも、トラブルをおこして免職中だった。そのいきさつはこうである。すこしまえ、劉孝綽は廷慰卿（司法をつかさどる官）に任に就いた。ところが、彼は官舎に妾をつれて入居し、老いた母親のほうには私宅にほうつておいた。孝を重視する中国においては、あつてはならぬふるまいだ。敵のおおかつた孝綽、さっそくこのことを弾劾されてしまった。かくして、彼は廷慰卿のポストを免職になってしまい、建康の城下でも、この話でもちぎりだったという（『顔氏家訓』風操篇）。

そこで蕭繹は、この失脚してしまつた文壇の大先輩に、慰めかたがた、着任あいさつの書翰文「与劉孝綽書」をつづつたのだった。このとき蕭繹は、刺史として荊州に赴任したばかり。その新任の地でこの書翰を執筆し、建康の孝綽におくつたのである。

貴殿は隠棲して時間がありますので、存分に古典をよみ、詩文をつくっておられることでしょう。さいきん古人の事例をみたところ、彼らも不遇な状況におかれなないと、執筆意欲がわかなかつたようです。あの虞卿や司馬遷も、不遇だつたときに名著をつづっています。おもつに貴殿も、創作意欲がたかまつているのはありませんか。左思は「三都賦」で洛陽の紙価をつりあげ、趙壹はその名声で都にひびかせましたが、むかしもいまも、詩文の意義たるやたいへんなものです。

ちかごろ、私は「荊州刺史に」赴任の途上で時間がとれ、すこし詩文をつくってみました。紀行の作はできませんでしたが、「懐旧」の文がかけました。ところがこの荊州へ赴任してくるや、仕事がおしよせてき

たのです。この地で私は、任用しようとして「朱雲のごときひとから」出仕をことわられぬかとおそれ、道をさえぎられて「朱博のように」老從事から能力をためられるのではないかと心配しています。そういうわけで、馬車のカーテンをあげて子細に視察し、困窮者がいないかと精励せざるをえません。ですからよい詩文をかくひまなど、どつしてありましょつ。

でも、すきな詩文の道を、すてさつたわけではありません。貴殿からの新作をお待ちしていても、なしのつぶて。いまの私は、高尚な寶石を夢み、明珠をほしがるような気分です。私の才たるや、卜氏の璧や随氏の珠に及びもつきませんが、詩文はいまでもすきな道なのです。貴殿に新作があれば、ぜひ私にお見せいただきたい。けつしてご遠慮されず、私の願いを無下にされませぬよつ。

貴殿にさしあげるものもありませんので、このお手紙でもって便りにかえさせていただきます。我われをへだてる行路を計算しながら、貴殿からのご返事をお待ちするしだいです。

この書翰文、いきなり「貴殿は隠棲して時間がありますので」「云々と」「孝綽の」近況推察のことばからはじまるので、時候のあいさつが略されているのだらう。ここで蕭繹は、免官された孝綽を虞卿や司馬遷になぞらえ、不遇のときこそ、りっぱな詩文がかかるものですよ、となぐさめている。つづいて、「ちかごろ、私は」と自分の近況を叙しながら、孝綽の新作をまちのぞんでいますとのべて、相手をたくみにもちあげている。そして最後に、貴殿の返書を鶴首しているとかたつて、一篇をむすぶのである。

この文章、文壇の大先達に敬意を払いながら（免官を隠棲といいかえているのに注意）、自分の文学すきもかたつていて、十九歳とおもえぬ巧妙な書翰文だといってよい。しいて、長兄が評した「文質彬彬の風」の批評にこじつければ、的確に布置された典故技巧（詳細は『蕭繹集校注』参照）が「文」、免官された孝綽への思

いやりが「質」で、あわせて文質彬彬の風あり、ということになるうか。

これより二年まえ（劉孝綽が免官されるまえ）、兄の蕭綱も「与劉孝綽書」をつづっている。つまり「与劉孝綽書」なる書翰文は、前後して兄弟による二篇がかかれていますのである（蕭繹はたぶん、兄書翰を意識しながら書いたのだらう）。ところが、「梁書」は兄の書翰でなく、この蕭繹書翰のほうを孝綽伝に引用しているのだ。兄書翰も「六朝文繫」に採録されており、けっして凡作ではない。だが初唐の姚思廉は、その兄書翰よりも、弟のほうを引用の価値ありとしたのである。このように、十九歳のときの蕭繹は、もう堂々たる文筆能力を有していたと断じてよからう。

さらにこの書翰の文面をみるかぎり、「皇子とはいえ」きちんと先達に敬意を払い、思いやりの情を披瀝するなど、じゅうぶんの良識をもっていたことがうかがわれる。蕭繹はしばしば、「吾は天下に於いて賤いやしからず」（周公の発言を模する。「史記」魯周公世家）などと傲慢なことを発しているが（「金樓子」序など）、このときの彼は、そんなことはおくびにもたさぬ、謙虚さをつらぬいている。こうしたことから、蕭繹の傲慢さは後半生特有のものであり、わかいころは良識を有していたらうと推測されるのである。

#### 蕭績への哀悼

つづいて二十代のころ。

このころも、兄弟とはまだ仲がよかった。じゅうぶん心をかわせていたようだ。

たとえば、蕭繹が二十二歳（中大通元年 五二九）のとき、四兄の蕭績が死んだ。この蕭績は、蕭繹より四歳年上の異母兄である。南康王に封じられ、南徐州刺史、南兗州刺史、江州刺史などに任じられたが、質素儉約を

このみ、たいへん清廉だったという。そうした性格と関係があるのか、ひととしての線がほそく、母の董淑儀が逝去するや、過度に哀悼し、地方官がつとまらぬほどやせほそった。そして病をえて、二十六の若さで没してしまっただった。

この蕭績が逝去したとき、蕭繹は三兄の蕭綱（まだ皇太子ではなかった）と書翰文を交換して、その死をいたんでいる。そのときの蕭繹の「答晋安王叔南康簡王薨書」がのこっているのです、それを紹介しよう。いま存するのは、兄蕭績の死をいたんだ部分だけなので、おそらく他の部分は逸したのだろう。

兄の蕭績こと南康簡王は、度量が高邁で風采もめきんでておられました。魏の中山王曹袞は謙遜なままでおわり、晋の扶風王司馬駿も師父と称されただけでした。兄の蕭績をこの兩人にくらべると、「兄のほうが一齒牙にもかけぬほどりっぱです。

兄は江州刺史のとき、尋陽で「生母の董淑儀のために」個人的に服喪し、その孝行ぶりは神霊を感動させました。哀しみにたえらぬほどおとろえ、ささえられてやっと、おきあがれたほどでした。それでも私は、天道はひとを裏ぎらないし、善人に幸をささげぬはずがない、と信じていたのです（ですが兄は死んでしまい、天は善人に幸をささげなかつたのです）。

私は生前、兄とお別れしてひさしく、顔をあわせることはほとんどありませんでした。宮中でしたし、くたのは、ほんの年少のときにすぎず、離ればなれに地方に赴任し、何年も歳月がすぎていたのです。兄弟であつまる日をねがっておりましたが、ついに桓山の鳥のごとき永別になってしまいました。松がしげると「仲間」の「柏がよるごぶのは、むかしからそうでしたが、いまは、芝がやかれて「仲間」の「蕙がなげくように、私は嗚咽しているのです。

ここで「宮中でしたしくしたのは、ほんの年少のときにすぎず、離ればなれに地方に赴任し、何年も歲月が過ぎていたのです」というように、蕭家の息子たちは、物心ついたときには、もう各地に諸侯王として派遣させられた。そのため、たがいに顔をあわす機会は、あまりなかったのだらう。皇家の兄弟とはそういうものかもしれぬが、こうした希薄なつきあいが、のちの兄弟相剋の一因になったのではないかとおもわれる。

ところでこの書翰文は、文学的にもすぐれた特質を有しているのに注意しよう。蕭繹はここで、兄の人格の高さをのべ、董淑儀の死に過度に服喪したため、逝去したのだらうと推測する。事実も、この記述どおりだったようだ。どうやら蕭繹は、兄の性格や逝去した事情について、信頼できる筋から情報をえて、くわしくしていったらしい。そのためか、兄への尊敬の情や人からへの思慕、そして死をいたむ情感には、たいへん真実味がこもっていて、よむ者の胸をつつものがある。

くわえて、この書翰文は行文もすばらしい。原文をしめしてみると、

南康兄「器宇冲貴、魏之中山、徒聞退讓、用令方昔、若吞夢雲。」

風神英挺。「晋之扶風、雖号師範。」

及尋陽私疾、孝感神明。殆不勝喪、扶而後起。

猶冀天道可期、  
豈謂福善虚説。

且「分違易久、

網繆宮闕、不過紈綺之事、

志冀双鸞之集、

松茂柏悅、夙昔歡抃、

嘉会難逢。」

離群作鎮、動回星紀之歴。

遽切四鳥之悲。」

芝焚蕙歎、今用嗚咽。

というものだ。一見して、対偶や四六句がおおいことに気づこう。なかでも「網繆」云々の対偶は、美文で理想とされる上四下六の輕隔対である。四声の配置もとのっており、讓、範、事、歴は仄声どうしが対するが、四

声でみると違反とはいえないものだ。

くわえて、いちいち是指摘せぬが、文中には魏の曹衰や晋の司馬駿らの故事をふまえ、さらに司馬相如「子虛賦」、礼記、「老子」、李陵「与蘇武書」、陸機「歎逝賦」などの典故もちりばめている（詳細は『蕭繹集校注』参照）。つまり修辭技巧の上でも、学識の面でも、堂々たる行文になっているのである。

このように、この書翰文は、兄の死をいたむ情、文章をかざる修辭技巧、ふまえられた学識、いずれの方面においても、高レベルの哀悼書翰だと称されてよい。このとき、蕭繹はわずか二十二歳。この年齢で、彼はもはや、当時でも有数の創作手腕をもった文人となっていた、といつてよいであろう。

#### 蕭綱との親交

兄弟の死については、さらにそれから二年後、おおきな動きがあった。

中大通三年（五三二）の春四月、長兄の蕭統が三十一歳で逝去したのである。この蕭統の死は、おなじ兄弟の死でも、蕭績の死とは比較にならぬ、大事件であった。なにしろときの皇太子が薨去したのである。つぎの皇太子にはだれがたつのか、蕭家はもちろん梁朝にとつても、注目のまとなつた。

衆目の一致するところは嫡孫、つまり蕭統の長男だった蕭歡であった。ところが、武帝がつぎの皇太子としてえらんだのは、蕭統の弟である蕭綱（蕭繹にとっては三兄）だったのである。このことが、蕭歡本人だけでなく、梁室の人びとに不満と疑念をもたらすことになった。

なんで嫡孫でないのか。三男でいいのなら、四男や五男でもよかったのではないか。ただ年齢のたかい順（二男は北朝に亡命し、蕭統と同年に死去）なのか。徳望や評判はどうでもいいのか。口こそださね、おおくの者は

心中そうおもったことだろう。これが親族、とくに兄弟たちの不和をまねき、のちの侯景の乱において、天子武帝と太子蕭綱との救援に、積極的にてむかなかつた遠因となった。そして結果的に、建康が陥落するという痛恨事に発展するのであるが、そのことは、あとでのべよう。

ところで、この長兄が死んだとき、蕭繹はどうだったのだろうか。

このとき蕭繹は二十四歳。資料をみるかぎりでは、蕭綱の後継に不満を感じたようではない。なにしろ、まだわかいし、しかも七男にすぎない。それゆえ、三兄をさしおいて自分が太子になるべきだった、などとはかंगाえなかつたのだらう。この蕭綱立太子ののちも、あいかわらず蕭綱と仲がよく、むしろ彼に接近さえしていたようだ。

というのは、この時期、立太子（中大通三年七月、五三一）直後の多忙ななかで、「建康の」蕭綱と「江陵の」蕭繹の兄弟は、しばしば書翰を交換して、詩を唱和したり、文学論をのべあつたりしているからである（ただ現存書翰は蕭綱のものばかりで、蕭繹執筆の書翰は佚）。

たとえば、同年の秋十一月ごろにかかれたとおほしき蕭綱「与湘東王書」は、綱が繹にむかつて、建康の文風が浅薄になっていると痛憤したものだ。そうしたなかで、蕭綱はつぎのようにのべている。

ひどいものだ。文学の混乱ぶりが、これほどになるとは。ちかごろの謝朓や沈約の詩、そして任昉や陸倕の文章、これらこそ文学の最高峰であり、著作の規範とすべきものである。張率の賦や周捨の論弁も、名手の手になるものであり、そうお目にかかれぬ傑作だ。

このように文学の道はまだほろびず、世には俊英がひそんでいるはず。そうした連中を領導する者は、弟のおまえ以外にだれがいようか。こうしたことを議論したいのだが、いい機会がない。私はわが子建（曹植）

をおもつては、ともに文学を批評してみたくなってなんのだ。

右の後段を書き下しでしめせば、「文章は未だ墜おちず、必ず英絶有らん。之を領袖する者は、弟に非ずして誰ぞ。之を論ぜんと欲する毎ごとに、与ともに語るべき無し。吾が子建を思い、一とも共に商榷せんのみ」となる。なかなか格調たかい呼びかけである。

ここで蕭綱が弟を「吾が子建」とよんで、文風改革の同志とみなしているのに注目しよう。文風改革を他でなく、繹によびかけたということは、綱が弟の文学的能力をたかく評価していたことをしめしている。逆にいえば、この時期、兄から、かくよびかけられるだけの詩文の能力を、蕭繹は体得していたのである。

もう一篇、蕭綱の蕭繹あて書翰「答湘東王書」を紹介しよう。吳光興「蕭綱蕭繹年譜」によると、蕭綱が太子になって三年目の中大通五年（五三三）、蕭繹三十一歳、蕭繹二十六歳のときの書翰文である。

暮春の時節は風光うるわしく、風や雲もはれやかだ。蘭の葉も手折たることができ、沂川でも水浴びができるだろう。

おまえは、召南で訴訟がすくなくなると、召公がときどき甘棠の木陰で休憩したようにやすらぎ、また冀州で政務をとったとき、賈琮が視察をしばし中斷したようにくつろいでいることだろう。また唐勒や景差「のごとき側近」は大言賦をささげ、釈道安や竺法汰「のごとき人物」はとだえぬ熱弁をふるっているだろう。そして当地でいろんな美景をながめられて、きつとたのしいことだろうね。……

我われをへだてる大河はひろいが、寤寐ごびにおまえのことをおもっている。おまえからの書翰を入手するたびに、病状が軽減してゆくことだろう。また便りをするよ。今回の手紙では、じゅうぶん意をつくせなかつたからね。

ここにみえる「我われをへだてる大河はひろいが、寤寐におまえのことをおもっている」の表現などは、二人のあいだにつよい親愛の情があったことをしめしている。風あたりがつよかった新太子蕭綱にとって、蕭繹は諸侯王として江陵にではいるが、信頼するにたる弟だったようだ。そうした事情があったからこそ、蕭綱は自身が編纂せしめた大著『法宝聯璧』の序文も、わざわざ蕭繹にかかせたのだろう。

それを反映するかのように、蕭繹には、この時期のものとおぼしき東宮あての礼状が、たくさんのこっている。標題だけしめせば、たとえば「謝東宮賚陸探微画啓」「謝東宮賜彈棋局啓」「謝東宮賚辟邪子錦城褊等啓」「謝東宮賚貂蟬啓」などである。これらを見ると、蕭繹は、建康の蕭綱からいろんな贈り物をもらっていたようだ。これから十数年のち、兄太子は弟の驕慢ぶりをにくむようになり、弟蕭繹のほうも、建康の内城にとらわれた兄を見殺しにしてしまっわけだが、この時期の二人は、そうした将来など想像もできぬほどの、仲のよさをしめしているのである。

#### 四 名声と野心

名声をめざす

この章では、蕭繹が荊州をさって建康にかえり（五三九）、そして江州刺史に転じた三十三歳（五四〇）から、侯景の乱が勃発する蕭綱四十一歳（五四八）までをあつかう。四十七歳で死んだ蕭繹にとっては、壮年期だといってよからう。

この時期の蕭繹の官歴をみておくと、蕭繹は三十三歳のときに江州刺史となって、尋陽に赴任する。この尋陽においては、玄学（老荘の学）をこのんで熱心に講義したり、反乱に対処したりする日々がつづいた。やがて四十歳のときに、ふたたび荊州刺史（第二次）となって江陵に赴任する。そして江陵赴任二年目にして、侯景の大乱が勃発したのだった。したがってこの章では、おもに江州刺史だったころを中心にして、大乱前夜の日々を叙してゆこう。

この時期は、おおきく前半と後半（三十六歳時の母の死を境とする。後述）にわけると、理解しやすい。前半は、基本的にまえの荊州刺史のころとおなじであり、ひきつづき上昇意欲がつづいている。後半は、その意欲が過剰になって驕慢となり、周辺から警戒されはじめた時期である。

まずは、前半の上昇意欲がつづく時期をみよう。蕭繹は、隻眼でありながら、地方の諸侯王として充実した明け暮れをすごし、さらに梁室の重鎮として貴祿もついできた。なかでも江州刺史に就任する前後は、蕭繹の得意の日々だったといつてよい。

大同五年（五三九）七月、三十二歳の蕭繹は、荊州刺史の地位を四兄の蕭統にゆずり、護軍將軍・安右將軍お

よび領石頭戍軍事の官に任命された。これによって繹は、ひさしぶりに建康にかえることができたのである。このあらたな任務は、あとからみると、荊州刺史（第一次）と江州刺史のあいだの、休息の時期だったかのように見える。

彼は同年九月に建康にかえって、父武帝や兄皇太子（蕭綱）と再会することができた。この建康での日々は、あとにのべるような西帰内人の事件があつたとはいえ、それ以外は愉快なできごとがつづいた。その愉快な事ごらゝを、蕭繹は『金樓子』雑記上でつぎのようにつづっている。

建康へかえつた直後の九月九日、私は父ぎみ（武帝）にしたがつて楽遊苑にいった。輔佐を命ぜられ、軍主をやれとおおせつかつた。

そのころ私は荊州からかえつたばかり。帰還したときの人馬の軍装ぶりたるや、都のなかでよくめだつて、人びとは「我われをみたいと」垣根のようにつらなつたものだ。父ぎみの息子のうち、私がとくに覚えめでたく、あいついで贈り物をたまわつた。この九日、昼間は詩をつくつて賞賜をかたげなくし、夜分は玄学を論じて称賛された。左右の者は目をみはり、親友たちも評価をあらためてくれた。

この日は空気がすみ、寒暖もほどよく、めつたにないすばらしい時候だつた。父ぎみはあるひとに、私のことを「玄義は荀彧のよう、武芸は孫策のようだなあ」とおっしゃつたそう。

この記事、建康へ帰還直後の意気軒昂とした気分が、よくうかがえよう。「帰還したときの人馬の軍装ぶりたるや、都のなかでよくめだつて」や、「父ぎみの息子のうち、私がとくに覚えめでたく」の記述は、いかにもほこらしそつだ。その結果、蕭繹は父帝から「玄義は荀彧のよう、武芸は孫策のようだなあ」（後者は、武帝が、蕭繹十七歳時の自分の発言を記憶して、こついったのだらう）と称されたという。こつした記述からみると、

この時期の蕭繹は、たんなる地方官というより、梁室の重鎮として遇されていたのだろう。蕭繹は、きっと有頂天だったにちがいない。

このとき、蕭繹が親近したのは、父帝だけではない。同篇にはひきつづき、やはり秋の一日を皇太子蕭綱と歎談したこともつづっている。

以前、私は太子さま（三兄の蕭綱）の講義にたづなつたことがあるが、それはある秋の日のことであった。当日、私は含露閣にまねかれたが、その場にいたのは、自分以外には定襄侯の蕭祗と庾肩吾だけだった。

講義のあと太子さまは、華宴をひらいてくださり、夜から朝まで四人で一緒した。太子さまの温容に接し、東宮のなかですごしたのである。夜もふけ、暁天がおぼろにあかるむころは、潘岳「秋興賦」の一節「月は瞳朧とうろうとして以て光を含む」もかくやというほどだったし、月下を散策しては、曹植「七哀詩」の一節「明月は高楼を照らし、流光は正に徘徊す」を想起するほどだった。

これも一生の至染だったなあ。

「一生の至染だった」というのは、おおげさな言いかたのようにみえるが、この大同五年の秋の日々の、そしてこれをつづつたときの、蕭繹の実感だったのだろう。この時期、蕭繹はこの兄皇太子とくに親密な仲となり、陰に陽に目をかけられていたようである。さらに『金楼子』の同篇には、つぎのような笑話もしるす。

まだ『金楼子』が未完だったとき、余は荊州から建康の地へもどつたのである。だが建康では、余の金楼子を、黄金でつくつたミニチュアの楼台だと勘ちがいがいた者がいた。そのこ仁、余のもとへきて酒杯をかさねたあと、いつもねだつたものだ。貴殿の金の楼台をさわってみたい。きっと精密なものなんでしょう、と。まったくわらうべきだね。

金楼子（蕭繹の号でもある）なることは、たしかに字句だけをみれば、ミニチュアの楼台だと勘ちがいた者がいたかもしれない。それにしても彼の『金楼子』は、それほど話題になっていたのだろう。このユーモラスな話も、上機嫌な蕭繹をつかがうにたる記述だといえよう。

蕭繹の上機嫌はさらにつづく。これよりすこしあと、やはり『金楼子』雑記上に「後に「余の」江州刺史と為りしとき」とあるから、大同六年（五四〇）のことだろう。江州に赴任した蕭繹のもとへ、おいかけるように都の太子（蕭綱）から、知らせがとどいた。それにいう。

都ではさいきん、つぎのようなことばがはやっているよ。「ことを論じるなら湘東王をお手本にしよう、仕官するなら王克をめざそう」と。

「王克」はこのとき尚書僕射となり、いわば立身のトップにいた。すると、対になる「湘東王」（蕭繹）というのは、さしずめ論壇の雄、ということになるうか。つまりこの時期、蕭繹は議論の方面でも、超一流の存在だとももわれていたのである。この話柄、都におけるたかい名声がうかがえるとともに、そうした知らせをとどけてくれた太子（蕭綱）の好意にも、また注目すべきだろう。

こうした『金楼子』中の記述は、蕭繹のひとつの重要な性向をしめしている。それは元帝紀にいう「頗る高名を慕う」、たいへん名声をこのむという性格である。父武帝から「玄義は荀粲のよう、武芸は孫策のようだなあ」と称されたこと、都人士からも「ことを論じるなら湘東王をお手本にしよう、仕官するなら王克をめざそう」と評判されたこと。これらは、すべて名誉な事からである。そして、それを嬉々として『金楼子』中にかきこむこと、それじたいも、また彼の名声好みをものがたるものだろう。

もとより、悪名をこのむ者がいるはずはない。その意味では、蕭繹がこうした事がらをかきしるし、自己の名

声を自慢したことは、とうぜんのことだったとせねばならない。ただ問題なのは、この時期以後の蕭繹、こうした傾向が過度にわたるようになったことだ。そしてやがて、名声は、自分だけが保持すればよい。他人は有さなくてよい。いや有すべきではない、とまでかんがえるようになってゆくのである。そのことが、蕭繹の周囲に、いろんな軋轢をうんでゆくことになった。こうしたことについては、のちほど説明しよう。

#### 著述をめざす

江州刺史として尋陽におもむいたのち、蕭繹の学芸方面の意欲は、どうやら詩文の創作より、著述の執筆のほうにむかったようだ。詩文のほうでは、なんといつてもライバルがおおい。この時期、長兄の蕭統は没していたが、そのあとをついだ蕭綱は、宮体詩の領袖として名がとどろいていた。そしてその周辺には、おおくの文学の士がたむろしている。沈約や劉孝綽などの大家は死んだけれども、まだ王筠や徐摛、庾肩吾などは生存しているし、さらに新進の徐陵や庾信なども台頭してきている。そうした錚々たる面々をおさえて、蕭繹が一頭地をぬくことは、さすがにむづかしい。

そこで蕭繹はおもったのだらう。そつだ、著書を執筆することだ。おおくの書物をよみ、そこでえた知識でもって著述にはげもう。こちらの方面なら、自分はいかいらから努力してきた。隻眼になっても、側近に命じて書物を読誦させ、そつとこの知識を脳裏にたくわえてきた。これをいかして、著述の執筆で名をはせればよいではないか——と。

右は、私の想像もふくまれるが、根拠がないわけでもない。蕭繹が、自分でもこれにちかいかたっているからである。それは、『金楼子』立言上にみえる発言だ。これは、まだわかいころだともおられるが、彼は

家庭教師格の老先生（裴子野）と、つぎのような対話をしている。立言上にのこされた対話を、適宜略しながら訳してみよう。

あるとき、裴先生（子野）がお尋ねになった。

西伯は幽閉されて『易』の本質を解説し、孔子は厄難にであって『春秋』をつくりました。このように、古人は実生活で不遇となり、心に鬱屈が生じたとき、著述することをおもいたったのです。それに対し、公子どの（蕭繹）はいかがでしょう。尊貴の家にお生まれになり、任地でも功績をつまれています。封地は周公旦ゆかりの荊州であり、名声は召公奭にひとしく、門前に貴人や賓客がおしかけておりまゝにして、実生活での不遇などないはずで」す。それなのに公子どの、なぜカーテンをおろして著述にはげんでおられるのですか。

私（蕭繹）はお答えした。

私は天下でいやしからぬ身です。それでも、洗髪も食事も中断するほど努力しているのは、まだ名声が確立しておらぬからです。私はもともと、四辺の地を制圧し、忠義をうちたて、国家につくして名声をたてるのが第一の望みでした。「ところが隻眼のため、はたせません」また、第二の望みは、きままに飲酒や弹琴しながら日々をすごすことでした。ですが、これも、志こそあれども実践はできません。

いっぽう、私は性分として、ひとや事物を論評するのがだいすきなのです。きちんと批評し、その価値をさだめたいとおもいます。だから私は、真夏のあつさにもまけず、厳冬のさむさにもひるまず、ひたすら著書『鴻烈』（いまは亡佚）をかきつけにいます。

対話相手の裴子野は、中大通二年（五三〇）に死んでいるので、この問答は、蕭繹がまだ荊州刺史だったころ

になされたのだろうか。もし子野の死の年の対話だったとすれば、彼は六十四歳、蕭繹は二十三歳だったことになる。

老先生の問いに、わかい蕭繹はこたえた。私はもともと、辺地や戦場で大功をたてたかった。だが、それは「隻眼になったこと」で「むつかしくなった。次善は、酒をのみ琴を弾いたりする、気ままな日々をおくること。でも、そんな安逸な生活は、自分の性格上とてもできそうにない。そこで、つかびあがったのが、著述をかきのこすこと。自分は性分として、ひとや事物を論評するのがだいすき。だから『鴻烈』という書物でそれをやり、それによって自分の名声を樹立したい——と。

この蕭繹のことばは、おそらく伝統的な「最上は立德、次善は立功、それがだめなら立言」（『春秋左氏伝』襄公二十四年）の考えかたをふまえるのだろうか。私は、こうした彼の人生目標（立德、立功がだめなので、立言著述で名をのこす）が、この時期、つまり江州刺史のころに、いっそう強固なものになったのではないかと推測しているのである。

こうしてかかれた蕭繹の著述は、亡佚したものもふくめれば膨大な量となった。『金樓子』著書篇によれば、六百七十七卷（側近の協力によったものもふくむ）にのぼるといふ。このなかで狭義の詩文に属するものは、『集』三秩、三十巻にすぎない。つまり、全著述の二十二分の一たる三十巻（ただし『南史』は「文集五十巻」とする）のみが、自分で作った詩文であり（他人の詩文の編纂はのぞく）、それ以外は、著述に属するものなのだ。このあたりからも、蕭繹の創作活動は詩文よりも著述のほうに、重点をおいていたことが推察されるのである。

こうした著述をかくには、前提として、はばひろい読書や「その結果としての」学識が必要になってこよう。

その読書や学識の獲得に、蕭繹はきわめて熱心だった。隻眼となつた蕭繹が、読みあげ係に命じ、夜を日について読誦させ、それにききいつていたことは以前にもふれた。ここでは、もうひとつ、玄学をまなんださいの逸話を紹介しておく。

わかくして蕭繹につかえていた顔之推（蕭繹より二十三歳わかい）は、晩年にかいた『顔氏家訓』勉学篇で、当時の蕭繹の玄学ずきを回想してつぎのようにいう。

元帝さまが江州や荊州の刺史をされていたころ、やはりこの玄学をお好きになられた。学生をよび、ご自身で講義されたが、寝食もわずれ、夜を日につぐという熱心さだった。刺史の激務で気分がわるくなられることもあつたが、そのたびに講義することによって、憂さをはらせておられた。この私も、ときどき末席をけがして、元帝さまのご講義をきいたものだが、うまれつき愚鈍であるせいか、どうもあまり良さがわからなかつたよ。

このように顔之推も舌をまくほど、蕭繹は、寝食もわずれて学問にはげんだようだ。右の玄学はもちろんのこと、儒学や文史、仏学、方術などにも、造詣がふかつた。さらに絵画や書、囲碁などの方面でも、たかい手腕を發揮したという。

そうした成果として、ふかい学識に裏うちされた著述が、つぎつぎと完成していったのだった（具体的な書名は、第六章の「名声の根源」を参照）。蕭繹はつねづね「私は、文士としては玄人はだしたが、武人にはあわせ顔がない」といい、周辺の者もあたっているな、と納得していたという（元帝紀）。この記事の、すくなくとも右発言の前半については、そのとおりの能力を有していたといつてよからう。

こうした学問や著述に没頭するタイプは、宴席で酒のみ、艷体の詩をこのんでいた人びとには、珍奇な存在

にみえたことだろう。そのためか、ときにからかわれることもあったようだ。

蕭繹のとおい親戚に、蕭恭という人物がいた。彼は警沢すきであり、賓客をまねいて朝までのみさわぎ、かたりつくすことを、日々の楽しみにしていた。その蕭恭、酒をこのまず、熱心に著述にはげむ蕭繹のことを、つぎのように評したという。この世には、楽しみをこのまず、寢床に横になっても、まだ天井をみながら著述している者があるそう。そんなに刻苦したって、だれが千年後までつたえてくれようか。がつがつ努力しても、名声など入手できっこあるまい。清風や朗月のもと、酒をのんでたのしむのがいちばんじゃ。

じつさい、当時、蕭繹は、酒ものまず、声色もこのまぬ男だと、おもわれていたようだ。おなじ武帝の息子であつても、太子の蕭綱などは、蕭繹におとらず著述に熱心だったが、それでも宮体の詩に熱中するなど、硬軟あわせもつ幅ひろさを有していた。それに対し蕭繹は、いわば堅物の知識人だとおもわれていたのだろう。

#### 劉敬躬の乱

この時期、江州刺史たる蕭繹の名声はたかまっていたが、その彼にはひとつ、具合のわるいことがあつた。それは、隻眼だつたためか、騎馬などの武芸が、あまり得意でなかつたということだ。北魏との緊張関係がつづく当時にあつては、隻眼でしかたがないこととはいえ、軍事方面が不得意ということは、地方官としてはこころもとなないことであつた。

その蕭繹が、意外なことに、軍事で大功をたてた。ときは、江州に赴任して三年目の大同八年（五四二）、蕭繹三十五歳のときである。

同年の正月、州内安成郡の名望家につまられた劉敬躬という男が、反乱をおこした。敬躬が田地でしろい蛆虫を

つかまえたところ、それが急に金龜に変化した。その金龜、やきころそうとすると光を発する。そこで敬躬は以後、金龜を神として祭祀するようになったという。ふしぎなことに、その金龜に願いごとをすると、よくかかった。そこで評判となり、無頼の徒まで周辺にあつまるようになった。敬躬はその無頼の徒をひきいて、安成で反乱をおこしたのだった——。この金龜と敬躬の話、まことに奇妙きつなものであるが、じつさいは、おおかた龜を利用したインチキ（史書は「左道」とか「妖術」とか称する）で、人びとを幻惑したのだろう。

乱がおこるや、遠近の連中が呼応して大勢力となり、ますます拡大していった。その結果、敬躬はなんと改元までおこない、官署を設置したのである。さらに、安成内史の蕭説が逃走したので、安成を根拠地として廬陵に侵攻し、また豫章の地まで占拠した。その勢力は数万にも達し、新淦や柴桑の地にまで侵攻しようか、という動きをしめすにいたった。当時、南方の地ではひさしく戦争がなかったので、人びとはこの反乱におどろき、たいへんおそれたという。

そうしたなか、ひとり奮闘したのが、豫章内史の張縮という人物（張纘の弟）であった。官軍総崩れといつてよいなか、彼だけはにげだすことを拒否した。そして義勇兵一万余をあつめて、敬躬の軍に抵抗したのである。これを見た蕭纘は二月、王僧弁や曹子郟に命じて豫章内史の張縮の傘下にはいらせた。そして協力して、敬躬の軍を攻撃させたのである。子郟が奮戦して敬躬軍を撃破するや、安成郡ににげかえった敬躬を、王僧弁がとらえた。これによって劉敬躬は建康におくられて、刑殺されたのだった。

この劉敬躬の乱、蕭纘自身が軍をひきいて鎮圧したものではない。ただ、彼の命があればこそ、王僧弁や曹子郟が出勤し、張縮の軍と協力して乱をしずめることができたのである。その意味で、蕭纘の的確かつ果敢なりーダーシップは、たたえられてしかるべきだろう。

かくして蕭繹は大乱をはずめ、江州刺史として、りっぱに責任をはたした。この功によって、彼は文事だけでなく、武事においても、指導力があることを実証できたのである。おそらく「隻眼の自分でも、これだけのことができた」と蕭繹はうれしくおもい、そして自信をふかめたことだろう。

後の時代から蕭繹の生涯をふりかえったとき、このころまでが、上昇意欲にみちた時期だったといつてよい。隻眼のハンディがありながらも、いやハンディがあるからこそ、蕭繹はまけるものと勤勉に努力した。そしてその努力が功を奏し、ゆたかな実りをもたらしたのが、この時期であった。

ところが、この時期をすぎると、蕭繹の性向はすこし変化してくる。それは、このましからぬほうへの変化であり、人格的には、いわば下り坂になってゆくといつてよい。具体的には、しだいに自信過剰となり、自分もつと名声をもつてよい、いやもつべきだ、とおもうようになっていったのだった。

そうしたところへ、侯景の乱が勃発したのである。これによって、いままで頭があらなかった父武帝や兄蕭綱が、侯景によって幽囚されたり、殺害されたりという事態になった。こうした状況をむかえるや、だれもが、平和な時代はすぎさり、乱世が到来したことを、認識せざるをえなかったろう。蕭繹もこの情況をみて、「我こそは」という野心をもつたろうとおもわれる。だがそれは、他の兄弟もおなじだった。その結果、競争者となった他の兄弟とのあいだで、軋轢が生じるようになったのだった。

このころから、蕭繹は、ふたたび自分の隻眼をつよく意識するようになる。競争者との軋轢や抗争が激化するにつれ、競争者やその周辺がそれをはからかい、侮蔑することがあったからである。ここにおいて蕭繹は、あらためて、隻眼による劣等感をつよく感じざるをえなかった。その劣等感が、「劣等でない」他人への嫉妬心をうむことになった。かくして、自分をしのぎ、からかおうとする連中（とくに梁室の競争者）をにくみ、危害をあた

えてやろうという、どすくろい悪意が発露してきたのである。

## 母の死

叙述がさきいきかけた。もとにもどろう。

では、この江州刺史の時期、蕭繹はどうして、性向がかわってしまったのだろうか。右のような状況だけでなく、彼の内面でも、なにか変化があったのではあるまいか。私は、性向がかわるきっかけ、すくなくともそのひとつになったのが、蕭繹の母、阮修容の死だったのではないかとおもう。

阮修容は、さきにもしるしたように、武帝の気まぐれというべき行為によって懐妊し、蕭繹をつんだのだった。武帝はその後、彼女を近侍させなかったため、阮修容は蕭繹とともにすくすくすることができた。蕭繹が荊州刺史となつたときも、江州に赴任したときも、彼女はつねに息子とともに任地におもむいた。その意味で、この母子関係はそうとう密接だったのである。

その阮修容が、劉敬躬の乱鎮圧の翌年、大同九年（五四三）、蕭繹三十六歳のときに死んだ。享年六十七だから、当時としてはかなりの長命だったといつてよい。喪があけた大同十一年六月、蕭繹は母の一代記といつべき文章をつづり、それを『金樓子』后妃篇のなかに編入したのだった。この文章ははさきにも引用したが、蕭繹は、母の生涯を叙するのはとつぜんとして、生前のさまざまな個人的思い出もしている。そのなかの若干を紹介しよう。

母うえは、私とともに地方（荊州や江州）にでるや、為政のあるべき道を私にご指示くださった。地方官の政務には、繁簡や大小、さまざまなことがあったのだが、つねにお教えをたまわることができた。任地で洪水や旱

魑が生じると、母うえは「自身も食事を質素になさって、民衆の生活を心配なさっていたものだった。

また、私が江州刺史となって尋陽にいったとき、母うえは「天文のようすがおかしい。南方のほうで妖気がただよっているよ」とおっしゃった。そのころは、李敞の乱が鎮圧されたばかり。世間の人びとは、もうこれ以上は反乱をおこす者はおらぬだろう、とおもっていた。ところが、いくばくもなくして、母うえがおっしゃったとおり、劉敬躬の乱がおこったのである。

私は、東は禹川（会稽）の地で太守となり、西は雲夢（荊州）の沢にうかがうというふうで、地方官としての日々をすごしてきた。この間、私は、冬はあたたかく、夏はすずしくと、いつも母うえの日常に心をくだき、ほぼ二紀（二十四年）の歳月をきぎんできた。そつした、朝夕ご機嫌をつかがう日々が、ある日「母うえのご逝去によつて」とつぜんうばわれてしまったのである。

今日は「ご逝去からあしかけ三年後、喪あけの」大同十一年の六月だが、気候はお亡くなりになったときとかわらない。だが、母うえはとわに冥界にゆかれ、おそばに待することはかなわぬようになった。その慈顔はとおくさつてしまい、私の心はつぶれるかのようだ。

こうした記述が、えんえんと二千字ちかくにおよぶ。興膳宏氏は「金樓子訳注（一）」において、この文章は「いわば息子の立場から見た 女の一生 を愛情を籠めて綴ったものであり、六世紀半ばのこの時代までに、これほど詳細に自分の母の生涯を記した伝記は他に類を見出しがたい」と指摘されている（「中国文学報」第七九冊 二〇一〇）。たしかにこの文章をよむと、蕭繹が母を敬愛していたこと、ときどきの訓戒をありがたくおもっていたこと、そして、なにより母子の仲がきわめて良好で、密接な関係であったこと——等がよくうかがえる。現代ふうにみると、この母子は、親ばなれ子ばなれができていなかったのではないか、とうたがわれる

ほどの密接ぶりだといえよう。

この記述で私がとくに注目したいのは、蕭繹は、地方官として政務をおこなうにさいしても、母を頼りにしていたらしい、ということだ。この母、天文の微細な兆候をうかがって、劉敬躬の乱を予言したこともあつたよつだから（さらに、武帝の弟の蕭宏や長兄の蕭統の逝去も、いいあてたという）、蕭繹は母に対し、「神秘的な予知能力ももっておられる」と、たんなる敬意以上のものを有していたのかも知れない。

じつさい、『金樓子』雑記篇下には、

余は詩賦を詠じたり、著述したりするのがすぎだった。すると母うえは、政治というものは、民草を教化する根本なのですよ。「詩文や著述だけでなく」これにもしつかりはげみなさいといって、私をいましめられたものだ。余はいつも、この母うえのおことばに留意していた。だから、いつも夜も灯火のしたで政務をこなし、夜がふけてから寝についたものである。

とあり、母の訓育ぶりに感謝の情をささげている。こうした記述は、蕭繹の詩文や著述への傾倒を、母親がうまく抑止し、善導してくれていたことを、暗示するものといつてよからう。

このように母親の訓導は、蕭繹の日々の政務やその他の活動にも、効果的に作用していたようだ。そうしたところへ、蕭繹三十六歳のとき、この母が逝去したのである。これは、いい意味でもわるい意味でも、母の監視から解放されたことを意味する。蕭繹が政治以外の方面へ惑溺してゆくのを抑止し、忠告してくれるものは、だれもいなくなった。彼の欲望やわがままをおさえ、そんなことをしちやいけないよ、といつてくれる者は、もういなくなつてしまつたのである。

その意味で、蕭繹の性向がこのましからぬほうへ変化した原因、そしてその時期として、この母阮修容の逝去

とその年とを、想定してもよいのではないか、と私はかんがえる。抽象的な言いかたになるが、かろうじて調和をたもっていた彼の精神が、この母の死によってバランスがくずれた。そして善意から悪意へ、寛容から狭量へ、感情の抑制からその暴発へと、重心がかたむきはじめた——ように感じられるのである。そしてその傾きは、はじめはゆるやかだったが、侯景の乱の勃発をきっかけにして、いっきにわるいほうにふりきれてしまったのだ。た。

#### 野心きざす

蕭繹に関して、よきにつけあしきにつけ、ちょっとかわった男だとか、いけすかんやつだとかの評判は、はやくからあつたようだ。じつさい、彼はわかかして隻眼になったので、まず外見の異様さが、世にひろまったことだろう。さらに前述したように、酒色に淡泊だった（すくなくとも、そうおもわれていた）ので、著述ばかりしているおもしろくない男だとも、おもわれていたようである。

いつぼつ元帝紀を見ると、はやくから「常人にあらず」という噂がささやかれていたようだ。一例をあげれば、彼が誕生に関して、母が懐妊したとき、月が懐にはいる夢をみた。あるいは、蕭繹がうまれたとき、部屋じゅうに常ならぬ妙香がただよった、などとかかかっている（前述）。だがこれらは、後づけの小説に類するものに相違なく、ほんとうにささやかれていたかどうかは、かなり疑問だとせねばなるまい。

だが、つぎのような記事は、かなり真実味がありそうだ。いわく、尋陽にいたころ、蕭繹は夢をみた。その夢のなか、あるひとが「天下がみだれんとしています。湘東王さま、この天下をささえてください」といった。またいわく、蕭繹の背中にほくろができた。ある老巫女がそれを見て、「このほくろは、口にいえぬほどの高貴な

しるしです（天子になるしるしだ、ということだろう）」といった。またいわく、武帝は賀革に命じて、蕭繹の府の諮議とし、三礼の講義をさせようとした。賀革はあまり気がすまなかったが、御史中丞の江革が彼にいった。「私は以前に夢をみた。その夢のなかで、武帝がお子たちをご覧になっておられたが、蕭繹さまのところまでくるや、帽子をぬいで、それをおあたえになった。されば蕭繹さまは、きつと国君になれるはず。だからはりきつて荊州へゆくとよい」と。

これらの記事、はなし半分に解するとしても、蕭繹への期待感がある程度、世間に醸成されていたことをしめすものだろう。とくに最後の話は、蕭繹自身が噂はなしに閉与していないものだ。さらに江革の没年が大同元年（五三五、蕭繹二十八歳）なので、かなりはやい時期から、蕭繹への期待感がひろまっていたことを想像させる。もし蕭繹自身がこの話を耳にしていたなら、ひそかに期するところがあったかもしれない。

では、よりすすんで、蕭繹が驕慢な男であるとか、野心をもっているとか、噂されるようになったのは、いつごろからだろうか。

そうした目で資料をながめてみると、『隋書』五行志上の記事が注目される。この記事、五行を論じた文なので、天人相関の立場から、さまざまな災異とそれについての解釈を叙している。それによると、大同十年（五四四、蕭繹三十七歳）の十二月、南方の建康ではめずらしい大雪がふって、平地に三尺（八、九十センチ）もつもったことがあったという。この記事は、そうした降雪現象を災異だとみなし、つぎのような解釈をくだしているのである。

この時期、邵陵王の蕭綸（六兄）、湘東王の蕭繹、武陵王の蕭紀（弟）の三皇子は、勢威が天子にならぶほどであり、たいへん驕慢であった。皇太子の蕭綱はこれをたいへんにくんだが、武帝はこの三皇子の驕慢さ

を制御できなかった。上天がせつかく変異をしめして警告したのに、武帝はそれをさとることもできなかったのである。

ここでは、邵陵王の蕭綸や武陵王の蕭紀とならんで、湘東王の蕭繹が「驕慢であった」と、はっきり断じているのに注意しよう。そして皇太子の蕭綱がこの三人をにくむなど、兄弟仲がわるくなっていたこと、さらに武帝が「たぶん老齢のためだろうが」息子たちを制御できず、また天意にも気づかなかったことが、指摘されている。『隋書』編者たち（魏徵や長孫無忌ら）がこう叙しているということは、そうした資料が梁のころに記録され、それが初唐にまでつたわっていたのだろう。

それにしても、他の二人はべつとして、蕭繹に関していえば、彼はつい五年まえ、父武帝から「玄義は荀粲のようで、武芸は孫策のようだなあ」といわれて、よろこんでいた。さらに皇太子の蕭綱とも、建康の秋の一日、ともに夜を徹して宴遊し、「二生の至楽だった」と感激していたのだった（前述）。父とも、そして兄とも、親子らしく兄弟らしく、じつに親近し、仲むつまじかったのである。

そうだとすれば、その後の五年のあいだに、蕭繹は「たいへん驕慢であった」といわれるようになったのだ。三十五歳のときに劉敬躬の乱を鎮圧し、三十六歳で母の桎梏から解放された蕭繹は、しだいに自尊の念がたかまり、驕慢と称されるようになったのだろう。

ところで、この『隋書』の記事をよむと、綸・繹・紀グループと武帝・皇太子グループとが対立しあっていて、綸・繹・紀の三子は仲がよかったように、おもわれるかもしれない。だが対立しあっていたのは、両グループだけではなかった。綸・繹・紀の三子も、たがいにおたがいを警戒しあっていたのである。

この三人、この時点では、まださほどは対立が明瞭にはなっていない。だがこの四年後、侯景の乱がおこり、

その翌年に武帝が逝去するや、あたかも接着剤がとれたかのように、バラバラになってしまふ。そして、仲がいどころか、むしろ武帝後の梁の盟主の座をきそつて抗争しあい、けつきよく四分五裂の状況になっていったのだつた。そのことは、右の記述のあと、『隋書』五行志上がつぎのようにつづけるとおりである。

侯景の乱がおきるや、諸侯王たちはみな強兵を擁していた。だが、外見は建康救援の名分をかがげこそすれ、じっさいは勤王の心などもっていなかった。綸・繹・紀の三人は武帝をほうりっぱなしにして、骨肉の殺戮合戦をくりひろげ、けつきよく梁王朝は滅亡してしまつたのである。

#### 蕭綸の狼藉

この綸・繹・紀の三人のうち、もっとも建康に反抗的だつたのは、六男の蕭綸のほうだつた。蕭繹や蕭紀も驕慢だつたようだが、蕭綸の横暴ぶりは、言語道断というべきものがあつた。

彼はそもそも、蕭統こと昭明太子が逝去したあと、三兄の蕭綱が太子の地位をついだことじたいが、気に入くわなかつた。彼からみれば、蕭綱は徳望がすぐれていたもので、太子にえらばれたのではない。ただ、たまたま二兄の豫章王蕭綜が北魏に亡命し早折した（五三一）ので、年齢順で太子になつたにすぎぬ。くそつ、ただ歳がうえというだけで、太子になりおつて、と蕭綸は齒がみしていたのかもしれない。

そうした、鬱屈の日々をすごしていたところへ、太清元年（五四七）侯景の乱がおこる一年まえ、五兄の廬陵威王の蕭統が病死したのである。四兄の南康簡王の蕭績はとくに逝去（五二九）しているので、もう自分より年長で生存しているのは、蕭綱だけとなつた。だが、肝腎の蕭綱は元気で死にそうもない。

奇妙なことに蕭綸の憤憑は、太子の蕭綱でなく、父の武帝のほうにむかつた。こんな不公平なこと（と蕭綸は

おもいこんでいたろう) になったのも、父の武帝が太子選びをまちがえたからだ。けしからぬのは、父うえだ。どうやら蕭綸は、そういうふうにおもいこんだらしい。

この蕭綸は、わかいころは聡明で文才にもめぐまれていた。だが長じては軽薄にして残虐、感情の起伏がはげしく、乱暴狼藉はしょっちゅうだった。かつて南徐州の刺史を擢行していたとき、市中にでて魚売りに「この刺史どのは、どんなかたですかな」とたずねた。魚売りが「軽率でむごいひとだよ」とこたえると、蕭綸はいかつた。すぐ部下に命じて、魚売りの口に魚をつっこませ、窒息死させたのである。

さらにあるときなどは、棺桶のなかに、ある人物を無理にはいらせ、そのまま靈柩用の馬車にのせた。そして、それをひきながら挽歌をつたわせ、さらに年おいた泣き女を馬車にのせて、わざわざ号泣させたという。この行為、葬礼をなによりも重視する当時にあつては、冗談や悪ふざけではすまぬ、はなはだしい悪行だといわねばならない。武帝はこれをきいて怒りを発し、兵に命じて蕭綸をとらえさせ、獄中で死を命じようか、とかんがえたほどであつた。だがこのときは、長兄の蕭統が涙をながして、ゆるすよう諫止したので、武帝はなんとかおもいとどまったのである。

この蕭綸、父の武帝に対しても反抗的だった。あるとき、武帝からはげしく叱責された蕭綸は、こんな憂さばらしをしたという。すなわち、背格好が父によく似た、ひとりの老人をさがしだしてきた。そして、その老人に天子ふうの衣冠を着せて、高座にすわらせた。すると蕭綸は、父帝に朝見する真似をして、その老人に自分の無罪をつつたえたかとおもえば、やおら老人の衣冠をはぎとって、庭内でこっぴどく鞭でうちすえたのである――。この話柄は、こりることをしらぬ蕭綸の性分をよくしめしているが、それとともに、彼の心中にも、そうとうの鬱憤がたまっていたことを想像させるものだ。

その鬱憤が、この五兄蕭統の死をきっかけに、爆発したのである。武帝をうらんだ蕭綸は、なんと父の暗殺をもくろんだのだ。彼は、兵を草むらにひそませ、武帝の馬車を邀撃しよつとしたのである。だが、舎人の張僧胤がこの計画をかぎつけたので、けつきよくその計画は未遂におわつたのだ。するとこんどは、毒殺をたくらんだ。彼は武帝に、百瓶の曲阿酒を献上した。ところが、武帝がその酒を側近の宦官にあたえるや、それのんだ宦官が、死んでしまった。こつしたことによつて、武帝は身辺に不安を感じるようになり、護衛をふやして、宮廷内を警戒させるようになったのだ。

このあと、蕭綸があやしいという流言がとぶようになった。しかしこつした事態になつても、この蕭綸、おそれるふうは、まったくなかつたという。おそらく蕭綸は、高齢で氣のよわくなつた武帝は、しよせん自分を罰するよつなことはできまいと、タカをくくつていたのだらう。そして、それはあたつていた。蕭綸のおもつたり、けつきよく武帝は彼を免職させることができなかつたのだ。このとき、武帝はよわい八十四、果断な処罰をやつてのける氣力は、もはやもちあわせていながつたのである。侯景の乱は、その一年後にせまつていた。

西帰内人

こつした蕭綸にくらべると、この時期、つまり三十代後半の蕭繹は、まだ良心的だつたといつてよい。蕭繹は、武帝を襲撃しようとするほどは、増長していなかつた。たとえば五兄の蕭統が死んだ太清元年（五四七）、四十歳の蕭繹は、蕭統の逝去をうけて、再度荊州へ刺史として赴任した。そのとき、彼は「示吏民」詩をつづつて、つぎのよつな、真摯な意欲をしめしているのである。

孔子がうまれた闕里の地では謙遜の徳がゆきわたり

闕里尚撝謙

老子がうまれた厲郷の地では知足の教えがひろまっているそう

厲郷裁知足

ああ、余はまたこの荊州の地にやつてきた

咨余再分陝

自己を主張せず欲をおさえることにしよう

少思寡寡欲

露がかかって水辺の流れはあかく色づき

露出浦流紅

苔むして岸辺の水は緑色になっておるぞ

苔生岸泉緑

この荊州にすむ人びとを

方令江漢士

鄒魯（孟子と孔子の生誕の地）のような良俗の土にしてみたい

變為鄒魯俗

これによると、彼は荊州の人びとを「鄒魯のごとき」良俗の土にかえてみたいもの、と意気こんでいる。つまり、蕭繹は驕慢だといわれることがあっても、それでも、まだよき地方官としての自分を理想とし、それをめざしていたのである。傲岸不遜な蕭綸とは、おおちがいだといつてよい。

父の蕭衍は、なんといつても高齢である。まもなく崩御することは、おおきな声ではいえぬにせよ、心中だれもが予測していたはずだ。だがそうなくても、その後には世継ぎの太子たる蕭綱がひかえている。梁朝は、磐石の固めを有しているのだ。そうであれば蕭繹には、よき地方官としての将来しかない。そのことを、彼はよくわかきまえていたのだらう。この太清元年の時点では、この翌年に侯景が反乱し、建康が包囲されてしまつなど、蕭繹にかぎらず、なんびとも想像できなかったに相違ない。

ただ、この章の最後に、蕭繹にとつて不愉快な、ひとつのできごとを叙しておこう。それは、あとからみれば、のちの蕭繹のどすくろい悪意を、予告するものであつた。それは、西帰内人事件 とでも称すべきことである。

時間はすこしさかのぼる。

繹は十九歳のとき（普通七年、五二六）荊州に赴任するや（第一次）、まもなく、李桃児という才知すぐれし女性を寵愛するようになった。しばらくのあいだ、たのしい日々がつづいたが、やがて三十二歳になったとき（大同五年、五三九）、繹は荊州刺史の任をおえて、建康にかえることになった。そのさい、彼はこの李桃児を手ばなすにしのびず、彼女をつれて建康へもどったのだった。

ところが、李桃児は宮戸（戦争捕虜の家系）の出身だった。宮戸出身の者を州外へつれだすことは、当時では嚴重に禁止されていた。おそらく蕭繹はそうした規則をわけていて、露顕せぬよう内密につれだしたつもりだった。ところが、たぶん役人が密告したのだから、それがもれて、ことがおおやけになってしまったのだ。後任の荊州刺史になったのが、五兄の蕭統だった。彼は役人から報告をうけるや、事がらを大仰にいいふらし、ついに弟を不品行だとしてうつたえたのである。

そこで、蕭繹はなきながら、太子の蕭綱にとりなしをたのんだ。おかげで、女性をつれかえった件は無事におさまったが、蕭繹は後難をおそれ、けっきょく李桃児を荊州におくりかえさざるをえなかった。これ以後、世間では李桃児のことを、「西帰内人」（西へおくりかえした愛人）とよぶようになったという。

このとき蕭繹がつくったとされる「送西帰内人」詩が、いまにつたわっている。

秋気がひろがり、長江の渡口でただようなか

秋気蒼茫結孟津

枕席をすすめし巫山の神女を、荊州の地に送りがえすことになった

復送巫山薦枕神

昔時は鬱々としても、「神女のおかげで」憂いがきえさったが

昔時慊慊愁心去

今日はいれいつつ、神女とわかれることになったのだ

今日勞勞長別人

一句目の「孟津」は、黄河の渡し場だが、ここでは長江のそれをさそう。また二句目の「枕席をすすめし巫山の神女」とは、宋玉「高唐賦」をふまえた表現で、もちろん李桃児そのひと（西帰内人）を暗示している。その桃児を建康の渡し場から、荊州の地へかえらせることになった。「今日はうれいつつ神女とわかれる」とは、その別れがせつないということだ。この詩、艶麗さをただよわせているが、愛する女性との別れをかなしんだ、なかなかの好篇だといってよからう。

蕭繹のごとき貴人にとつては、この種の女性の存在は、めずらしいことではない。だが、そのおおくは、あそびめいたものである。だが蕭繹はどうやら、かなり熱をあげていたらしい。さきにものべたように蕭繹は、九歳のときに結婚した徐妃とは、不仲な関係がつづいていた。とすれば、その反動として、女人への愛情が、この李桃児のほうへそそぎこまれたのかもしれない。

この事件は、わがいころの一場のロマンスではおわらなかつた。子どもころ、蕭繹は五兄の蕭統と仲がよくいつも二人でじゃれあっていたという。ところがこの一件以後、蕭繹は五兄をつよくうらむようになり、ついに二人の関係は絶縁してしまった。李桃児と別離させられたことによって、兄へのふかい怨恨が生じてきたのである。

ここで、時間はもとへもどる。その西帰内人事件から八年後の太清元年、蕭繹四十歳のとき、彼は、五兄の蕭統が死んだ（病死）というニュースを耳にした。すると彼は、部屋にはいつてひとりになるや、屨くがやぶれるほど小躍りしてよろこんだという。

さらにおなじ年、蕭繹はふたたび刺史として荊州に赴任し、右のような「示吏民」詩をつづつたのだが、彼はまだ、西帰内人とわかれさせられた恨みを、わすれていなかった。「あるとき役人が蕭統に告げ口したので、李

桃兎のことがばれてしまった」と信じていた彼は、役人たちに復讐しようと思意してした。そこで、荊州の役人たちが、新刺史となった自分を州境にまで迎えにくるや、彼は役人たちをなじって、かえれとおいやったのである。おかげで役人たちは、蕭繹に失望してしまったという。

この八年ごしの復讐、執念ぶかく、子どもじみたふるまいだというべきだろう。このあたり、蕭繹の後半生に露骨になってくる、他人に対するつよい仕返しやいやがらせ、それが発露したものとみえなくもない。その意味で、この西帰内人事件は、後年の蕭繹のくらい側面を予告したものだといったてよからう。

## 五 即位と骨肉の争い

### 救援軍の混乱

大清二年（五四八）十月、侯景の軍は、ゆうゆうと長江をわたった。困難なはずの渡河だったが、内応した蕭正徳が手配した船によって、あっけなく成功したのだ。南岸に上陸するや、梁軍の油断をういて疾風のごとく馬をすすませ、いっきに梁の都の建康に殺到した。そして、ついに包囲したのである。南朝衰亡のきつかけとなる、侯景の乱のはじまりだった。

建康が賊軍に包囲されたとの、驚愕すべきニュースが、たちまち地方を駆けめぐった。この知らせを耳にするや、諸軍を指揮する使持節都督荆揚湘司映州郢寧梁南北朝秦九州諸軍事という任にあつた蕭繹は、すぐ諸州に救援軍をおくるよう命じた。さらに荊州の地からも、自分の配下、すなわち呉華、樊文皎、世子の蕭方等、王僧弁らにも、軍をひきいて救援にゆくよう命じた。こうして、侯景軍がせめあぐんでいるあいだに、はやい救援軍は十一月に建康に到着し、以後も諸州の軍が三三五と建康に集結しはじめた。そして翌年一月ごろには、侯景軍を圧倒するほどの軍勢となったのである。

ところが、いくら軍勢がふえてきても、混成部隊の悲しさで、まとまった行動がいつこつにとれなかった。指揮系統がきちんとしていないので、個々の軍が散発的に攻撃しては、侯景軍に撃退されるというありさまだった。これではならじと各軍が協議し、戦歴ゆたかな柳仲礼を、救援軍全体をすべる大都督としたのだが、これをきめるだけでも、諸將のあいだで紛糾をきわめ、険悪な雰囲気になるほどであった。

さらに、大都督となった柳仲礼そのひとが、きわめて傲慢な性格だったことも、救援軍のまとまりに水をさし

た。彼は、しばしば諸將をみくだした発言をして、すっかり人望をうしなってしまったのである。このとき、武帝の息子として、唯一はせ参じていたのは蕭綸だった。彼は、建康が包囲されるまえから、武帝によって「侯景を征伐する」征討大都督に命じられており、建康のちかくに陣どつていたからだ。だが、柳仲礼はその皇子の蕭綸に対しても、無礼な態度をとつたのである。そのため、諸軍は協力して作戦にあたれず、たがいに牽制しながら、むなしく包囲をつづけるだけだった。

もつとも、こうした救援軍の不和は、指揮官たちだけに責任をおわせるべきではない。そもそも、救援軍を進発せしめた武帝の息子たちじたい、本気で建康を救援する気がなかったし、また野心をもちつつ警戒しあつていたのである。「諸侯王たちはみな強兵を擁していた。だが、外見は建康救援の名分をかがげこそすれ、じつさいは勤王の心などもつていなかった」（前述。『隋書』五行志上）。

さらに、救援の旗振りをした蕭繹じしん、「大軍を擁しても進発するのをためらい、内心に野望をたくわえていた。そして国難を座視し、それを幸運だとおもつていた」（『梁書』元帝紀）という始末だった。率先して救援すべき武帝の諸子たちが、こうであつたなら、その配下の將兵たちが、協力する気にとぼしいのは、とうぜんのことだったとせねばならない。

こうして救援の諸軍、せっかく建康までかけつけながら、いたずらに台城や侯景軍を包囲するのみで、積極的に戦いをいともうとしなかった。それどころか、なかには民衆をおそつて、物資を略奪する不逞のやからもでてくるしまつで、彼らの士気はひくくなるいっぽうであった。

蕭繹自身も、こうした諸子不和の一因、いや端的にいえば、おおきな原因だったといつてよい。武帝の七子であり荊州刺史でもあつた彼は、この時期は、梁室の堂々たる重鎮であり、もし建康が陥落したりすれば、彼が反

侯景軍の盟主になるべきことが予想された。逆にいえば、そのぶん、他の諸子や親族から、警戒されやすく、じつさい、警戒されていたのである。

そのためだろう、蕭繹が使持節都督という立場によって、各地の諸侯王（親族がおおい）たちに、「すぐ救援の軍をひきいて建康にむかえ」と命令をくだしたが、その反応はかんばしいものではなかった。

まず、岳陽王の蕭譽（江陵の北方の雍州刺史。亡き長兄蕭統の三男。蕭繹から見れば甥にあたる）は、配下のものを救援にやることを約したが、みずからは襄陽を出立しようとはしなかった。おなじく、蕭譽の兄の河東王蕭譽（南方の湘州刺史。蕭統の二男。蕭繹の甥）は巴陵までいったが、それ以上は進軍しようとしな。蕭繹の弟（八子）の武陵王蕭紀（西方の益州刺史。武帝の八男）も、蕭繹の指示にしたがうことなく、救援にゆこうとしなかったのである。

けっきょく、武帝の息子で救援にあたったのは、もともと建康にいた六子の蕭綸のみであった。この蕭綸がどんな人物であつたかは前述した。なりゆき上、征討大都督に命じられているものの、その内心は、本気で武帝や太子を救援する気があるかどうか、かなりあやしいといわねばならない。そして蕭綸以外の息子は、自分の名代で配下の武将や将兵を派遣しただけ。それ以外は、親族や別姓の刺史や太守たちが、建康に救援にむかっただけだったのである。

こうした状況を、蕭繹は非難する資格がない。諸侯王に救援を命じた蕭繹そのひとが、建康にむかわなかったのだから。蕭繹は、以前から兄弟や親族と仲がよくなく、彼らの言動につよい危惧をいだいていた。どうも、わが兄弟や甥どもは、この一大事を奇貨として、不遜なことをたくらんでいるようだ。そうだとすれば自分も、軽々に江陵をはなれるわけにはゆかぬ。もし自分が軍をひきいて建康救援にむかったなら、わが江陵の地が、彼らに

急襲されるやもしれぬ。

鬱勃たる野心

かく蕭繹が危惧せねばならぬことじたい、親族相互の不和がはなはだしかったことをしめしている。じつさい、このとき猜疑心をつのらせていたのは、武帝の息子たちだけではなかった。さきに名をだした蕭簪や蕭譽、つまり亡き長兄蕭統の息子（武帝の孫にあたる）なども、ひそかに野望をつのらせていたし、その他の親族たちも、この混乱に乗じようと、各様の思惑をめぐらせていたのである。

たとえば、梁の蕭一族のひとり蕭範も、そうした男だった。彼は、武帝蕭衍の弟、恢陽王蕭恢の息子だったので、蕭繹とは従兄（蕭繹より九歳の年長）の関係になる。そんな人物も、この機に飛躍しようと期していたのだ。『南史』の蕭範伝に、

武帝の息子兄弟たちは、たがいにそつばをむいたまま、おのおの名声をたかめようとしていた。……「この蕭範もおなじで、つぎのようにかんがえた。」武帝がもし崩御したなら、諸王たちのあいだで、きっと内乱がおきるにちがいない。すると自分は、もう民衆の心をつかんでいるし、名声もたかまっている。だから、その内乱をきつかけにして、この自分こそ、天下を平定することができるやもしれぬ——と。そこで蕭範はいっそう人士の招聘につとめ、不測の事態の到来を熟望していたのである。

とある。この蕭範は、息子の蕭繹や孫の蕭簪にくらべると、武帝からはいささか血縁のうすい親族である。だがこの時期、そうした人物でさえ、こうした野心をもつにいたっているのだ。

彼らにとつては、武帝や太子を救援することよりも、自己の軍備を温存し、勢威をたかめることのほうがたい

せつだった。不測の事態が出来たとき、すぐ対応できるようにしておかねばならぬ。計算だかい者は、武帝や太子が侯景に殺害されたとき、だれかが梁軍の盟主となって、侯景討伐にあたらねばならない。そのだれかとはいだれか。自分であつてはいけないのか……というような思いが、脳裏をかすめていたに相違ない。そうした思いは、蕭繹はじめ、梁室ゆかりの者がひとしく有していたのであり、だからこそ、たがいに牽制し、警戒しあつていたのだった。彼らが建康に救援にゆかず、おのが根拠地をはなれようとしなかつたのは、こうした事情があつたからなのである。

このとき蕭繹はどうしたか。彼は、建康を救援すべく、みずから軍をひきいて江陵を出立することはした。だが、郢州の武城の町で軍を駐屯させたまま、四方の援兵をまつと称して、それ以上はすすもうとしなかつた。もちろん、他の兄弟の動きを警戒しながら、建康の動向をうかがつていたのである。

そうしたなか、太清三年（五四九）の三月、都の建康はついに開城を余儀なくされた。いちおう、梁と侯景軍とのあいだで和約が成立し、武帝の地位はそのまま、ということにはなつていた。だが実態としては、建康は侯景によつてのつとられ、制圧されてしまったのである。そして侯景の指示によつて、「和約がなつたので、救援軍は解散して国にかえれ」という布告がだされたのだった。

これがいつわりの和約であり、布告も侯景のさしげにすぎぬことは、蕭繹もよくしつていた。だがそうだったとしても、彼にとつては、ありがたい布告だった。自分が軍をひきいて、建康までゆかなくてもすむ口実ができたからだ。蕭繹はすぐ兵糧をすてて身軽になり、いそいで武城から江陵へとつてかえしたのである。

さらに同年五月には、武帝が崩じ（享年八十六）、皇太子の三兄蕭綱が踐祚した、という知らせもどいた。野心勃勃たる蕭繹のことで、いつそのこと、蕭綱も父帝といつしよに死んでくれたらよかつたのにと、このとき

おもったかもしれない。しかし、それでもこのニューズは、わるいものではなかった。蕭綱が践祚したといつても、しよせん侯景の傀儡にすぎぬことは、天下周知のことだ。とすれば、建康の朝廷はもはや、なくなつたものなものである。父帝さえいなくなれば、傀儡の兄弟など、まったく顧慮する必要はない。いずれ力をたくわえて、侯景をたおし建康をつばいかえしたら、この自分が、兄弟にかわつて即位できるではないか。かんがえもしなかつた千載一遇のチャンスが、いま目のまえに到来したのだ。蕭繹はこうおもつて、興奮したかもしれない。

蕭繹はこのとき、かつて隻眼になつた自分が、父武帝から呉の孫策に擬せられ、しっかりやれとはげましてもらつたこと、またある秋の一日、兄蕭綱と夜を徹して華宴をともし、「一生の至樂だつた」と感激したことなどは、とつくにわすれさつていたのだらう。彼の脳裏をしめていたのは、鬱勃としてわきおこる野心だけであつた。

#### 誉訥との争い

蕭繹がまだ、郢州の武城にとどまっていたときのことだ。遠縁の張纘（蕭訥の前の湘州刺史だつた）から、書翰がとどいた。その書翰には、「蕭訥は起兵し、蕭訥は米をあつめています。二人は協力して不逞をなさんとし、江陵を襲撃しようとしておりますぞ」とあるではないか。

じつは、張纘は蕭訥蕭訥の兄弟と仲たがいでいた。そこで、蕭繹に訥兄弟を処断させようとして、かかる注進におよんだのだつた。だがこの張纘の注進は、客観的にみれば、半分はあつていたといつてよい。この時点での訥兄弟は、江陵を襲撃する計画はなかつたものの、とおからず、そうした策謀をめくらせる可能性は、じゅうぶんあつたからだ。その意味で張纘の手紙は、両勢力の衝突をはやめる原因になつたといつてよからう。

それはそれとして、蕭繹はこれをよんで、一驚を喫した。そして蕭繹の誉督兄弟への不信感が、いつそう増幅したのである。さらに前後して、江陵遊軍主の朱栄からも、「信州刺史の桂陽王蕭慥は、誉と督の造反に呼応しようとしています」という連絡があった。これによって、誉督の兄弟が自分への攻撃をたくらんでいるのは、まちがいなさそうにおもわれた。蕭繹はおもったことだろう。誉と督が建康へ進発しなかつたのも、これで合点がいく。やつらは、こんな不逞をなさんかのために、軍備の消耗をおしんでいたのだ。この兄弟、梁室が存亡の秋をむかえているというのに、なんとということをとくらんでいるのか——。蕭繹は、自分のことは棚にあげ、甥たちをばげしくにくんだ。むこうがその気なら、こつちも準備せねばならぬ。蕭繹が兵糧をすててまで、すばやく武城から江陵へ帰還したのは、そうした事情もあつたからなのである。

江陵にかえるや、繹はまず使者を湘州の蕭誉に派遣して、侯景を討伐するにつき、食糧と兵隊とをさしだすように命じた。すると蕭誉は、「おのおのの軍府が所有するものだ。どうして、急にそんなことをいいたすのか」といって拒否する。使者が三度往来しても、いっこう埒があかない。やはりそうか、もうゆるすことはできぬ。蕭繹は、いよいよ蕭誉討伐を決意した。かくして同年六月、世子の蕭方等に精兵二万をひきいて、湘州の長沙めざして進発せしめた。建康では先月、武帝が侯景によって衰死させられ、朝廷が蹂躪されている。そうした状況をほつたらかして、梁の親族、叔父と甥の内訌が火をふいたのだった。

この叔甥の争い、枝葉をかりとつてあらましのみをのべれば、つぎのような経過をたどった。大清三年（五四九）六月、江陵を出撃した蕭方等の軍は、長沙近郊で蕭誉の軍に迎撃され、方等は溺死させられた。この蕭誉は父の蕭統に似ず、年少のころから武勇にすぐれ、彼がひきいる兵士たちもみな剽悍であつたといふ。すると蕭繹は七月、こんどは鮑泉に命じて誉を攻撃させた。鮑泉が誉のたてこもる長沙を包围するや、さ

しもの誉もせつばつまってしまい、同盟する弟の蕭簪に急をしらせ、援助をたのんだのである。

そこで同年九月、北方の雍州刺史蕭簪は、兄の誉をすくおうと決心した。そこで大軍をひきいて、叔父蕭繹の根拠地にむかい、江陵をせめたてたのだった。このとき、叔甥のあいだで、ことばのやりとりも、はげしくいきかった。この天下混乱の時期に、甥が叔父を攻撃するとはなにごとか。すぐ兵をひけ。いや、叔父うえこそ、なぜ罪なき兄の誉を攻撃なさるのですか。もし叔父うえが兄の長沙から軍をひいていただければ、私も雍州にかえりますぞ——。こう口論しあいながら、はげしい攻防がつづいた。

そうしたおりしも、杜岸はじめとする杜一族が、ふいに蕭簪から蕭繹のがわへ寝がえるという事件がおこる。そして杜岸らはずぐさま、蕭簪の根拠地たる雍州の中心地、襄陽を攻撃しはじめたのである。これに気づいた蕭簪は、あわてて江陵攻撃を中止して、襄陽にかえってゆかざるをえなくなった。ここにおいて戦況は、いっきに蕭繹有利にかたむくことになった。おいかけるように蕭繹は、建康からかえってきた柳仲礼に命じて、蕭簪の雍州の攻撃を命じる。いよいよ蕭簪は、おいこまれたのだった。

#### 西魏の参入

蕭繹（叔）と蕭簪（甥）の攻防がはじまったのをみて、世の識者たちはうれえた。侯景をほったらかしにして、なぜ親族どうしがたたかつか。どちらがかったとしても、それがどうだといつか、と。そこで六兄の邵陵王蕭綸は、蕭繹に書翰文をおくって、つぎのようにいましめた。

わが先君（武帝）は孝で天下をおおさめになり、おかげで九親はしたしみ、四表は怨みもなかった。これが政をなすうえで、わが梁室のやりかたであった。そのうえ、天の時、地の利は、人の和にしかずともいう。親族

どうしが、たがいにあらそうなど、もつてのほかではないか。

現今、梁朝は侯景によつて蹂躪され、建康の人びとは塗炭の苦しみにあえいでいる。我われは、親族どうし角つきあわせるのでなく、臥薪嘗胆して外敵をおいだすよう努力すべきだ。侯景が江南からさかのぼつてこないのは、我われ諸侯王の力がまだ強力だからである。我われがたたかえば、いたずらに梁室の力をよわめ、侯景の餌食になるだけだ。

弟蕭繹よ、なんじが蕭譽の長沙を陥落させたとして、戦いはおわりにはならぬぞ。けつきよく、脅威に感じた蕭譽が、西魏の連中に援助をもとめて、あらたな外敵をよびこんでしまうだけだ。いま江陵の地を支配し、もつとも勢威のつよい貴殿こそ自重し、甥との戦争を中断すべきである。そうしてこそ、この梁は安泰になるのではないか。

これが、蕭綸がおくつた「与湘東王書」の概要である。要するに、「蕭繹よ、なんじが甥と対立し勝利したとて、漁夫の利をえるものはだれか。あの西魏であるぞ」ということだ。この書翰をおくつた蕭綸、野心のみ旺盛だが、人格陋劣でじつにつまらぬ男である（前述）。ただそうした男でさえ、これぐらいの道理はわかつていた。だから、右のような書翰を蕭繹におくつたのだらう。

だが、なぜか蕭繹だけは、それがわからなかった。甥つ子にくしの感情が、道理をわすれさせていたのだらうか。蕭繹は兄の綸に、つぎのような返事をおくつた。いや、あの蕭譽の罪は、けつしてゆるすわけにはゆきませぬ。蕭譽に味方する蕭譽が、かりに楊忠（西魏の將軍）と同盟したとしても、私は、談笑しながら秦を撃破した魯仲連のように、かんたんにやつつけてみせます云々。

蕭繹はこういつていたが、蕭綸の危惧のほうがあたつた。柳仲礼の軍にせまられた蕭譽は、同年十一月、煩悶

したあげく、ひとつの決断をくだした。それは、まさに蕭綸が予想したとおり、西魏に臣属して救援をあおぐ、というものであった。蕭詧は叔父にくさのあまり、胡族の国に臣属することをいとわなかったのだ。敵の敵は味方という論理かもしれぬが、大局をみあやまつた判断だとせねばならない。あとからみれば、この叔甥の戦いは、まだコップのなかの嵐にすぎなかった。だがおいこまれた蕭詧は、嵐どころか、コップそれじたいを破壊させるような猛烈なハリケーンを、よびこんでしまったのである。

後日のことになるが、これから五年後の承聖三年（五五四）十一月、蕭詧は、西魏の軍に合流して、蕭繹がたてこもる江陵を襲撃した。そしてあつというまに陥落させて、蕭繹を降伏せしめた。そしてさんざん罵倒したあげく、殺害したのだった（第一章を参照）。蕭詧はよほど叔父を憎悪していたのだろう。その意味で、けっきょく蕭繹は、このときうちもらした甥に、こっぴどい仕返しをうけてしまったのである。

とまれ、この西魏の参入により、戦局はいつきに蕭繹に不利となった。楊忠ひきいる西魏軍は、蕭詧の要請をうけて雍州になだれこむや、いつきに柳仲礼の軍を打ちちらし、怒濤のごとく南下していった。そして蕭繹の本拠たる江陵にまで、接近してきたのである。そこで蕭繹は、あわてて楊忠に講和を提案し、翌大宝元年（五五〇）二月、息子蕭方略を人質におくって、なんとか西魏軍の鋭鋒をまぬがれたのだった。

いっぽう、南方の戦いはどうなったか。鮑泉は、蕭詧がたてこもる長沙を包囲したものの、おとすことができなかった。かかる戦況の膠着ぶりに蕭繹はいらだち、鮑泉を王僧弁に交代させた。それでも、すぐには長沙を攻略することができず、大宝元年の五月になって、ようやく王僧弁は長沙をおとし、蕭詧を殺害することができたのだった（享年三十二）。

こうして蕭詧との戦いは、幕をおろした。結果的に蕭繹は、蕭詧をころすことはできたが、蕭詧のほうは、し

とめることができなかった。それどころか、蕭詧が西魏に援助をもとめたおかげで、蕭繹は西魏という、てこわい外敵を漢東の地によびこんでしまったのである。

### 蕭紀の野心

叔甥の争いは、いちおうの決着をみたが、蕭繹にやすらぎの日はこない。つぎに、蕭繹のまえにたちはだかつたのは、弟の第八子蕭紀であった。

蕭紀との戦いをのべるまえに、蕭繹のその後の動きを略述しておこう。北面に、西魏に臣属した蕭詧を警戒しつつも、蕭繹の当面の敵は、なんといつても侯景であった。その侯景は大宝二年（五五一）四月に、配下の宋子仙や任約とともに西上してきた。建康を制圧した彼は、蕭繹らを殲滅してから、正式に梁をほろぼして帝位にくつもりだったのだらう。侯景軍が勝利して南方のすべてを支配するか、それとも蕭繹軍が反撃して梁朝をもちかえすか、おおきな節目をむかえたのである。

同年六月、蕭繹は王僧弁や胡僧祐、陳霸先らに命じて、巴陵にて侯景軍を迎撃せしめた。そして、みごとに大破し、侯景を建康に潰走させたのだった。武芸は得意ではない蕭繹だったが、この時期になると、いくたの戦いをへて、そうとう緻密な軍略をたてることができるようになっていた。今回の戦いは、王僧弁らの奮闘もあつたが、蕭繹の適切な作戦も功を奏したようだ。

これで潮目しほめがかわつた。もともと軍勢がすくない侯景軍である。いったんやぶれるや、歯止めがかからない。以後はもっぱら、守勢にまわるようになった。建康ににげかえつた侯景は、やけになったのか、蕭綱を退位させ（のち殺害。享年四十九）、同年十一月にみずから即位した。だがその五か月後の大宝三年（五五二）四月、彼

は怒濤のごとくおしよせた王僧弁や陳霸先らの軍にやぶれ、殺害されてしまったのだった（享年五十）。

さて、この侯景との戦いと前後して、蕭繹の勢威はいちだんとたかまってきた。武帝なきあと、帝位をついで、梁朝を再興させる者はこのひと以外にはない、こうした機運が醸成してきたのは、このころからであった。しかし蕭繹は、何度も愆憑され、懇願されながらも、がんとして帝位につくことをがえんじなかった。侯景軍をまだ殲滅していないという事情もあったが、蕭繹のことだ、三顧の礼をつくさしめようとしたのかも知れない。だが、侯景を殺害してから七か月後、ようやく蕭繹は、みずからの根拠地の江陵で即位したのである。とくに大宝三年（改元して承聖元年）十一月。

このときの蕭繹の得意ぶりや、おもっべし。片目だと嘲笑されてきた自分が、ついに武帝亡きあと、梁の中興の主とおおがれ、新天子になることができたのだ。いままで歯をくいしばって、努力し、研鑽してきた甲斐があった。冥界におられる母つえ、よろこんでください。あなたの息子が、あなたのあの隻眼の息子が、ついに侯景をたおし、踐祚したのですよ。蕭繹は心中、母の阮修容にこうかたりかけていたかも知れない。

こうした蕭繹得意の時期をぬうようにして、蕭繹の弟、蕭紀の動きが活発化してきたのだった。

この蕭紀は、軽薄な六男蕭綸や偏屈な七男蕭繹とはちがって、寛大にして温和な人がらとしていられていた。学問にはげみ、文才もあつたようだ。そのため武帝からも期待され、わかくして武陵王に封ぜられ、また揚州刺史に任ぜられた。さらに大同三年（五三七）には、刺史として、ゆたかな益州（蜀）の地をまかせられたのである。そのとき武帝は蕭紀にむかって、「天下がみだれても、益州だけは混乱からまぬがられよう。だからおまえをゆかせるのだ。しっかりとげめよ」といったという。

このことばからすると、蕭紀は繹以上に期待されていたのかも知れない。彼は赴任後、父の期待にたがわぬよ

う努力した。南方を開拓し、西方と交易をして財用をふやし、前任者の十倍もの蜀の特産品を建康にとどけたという。以後も、着実に益州の地を経営しており、大宝三年の時点では、蕭繹につく諸侯王の雄となっていた。その意味でこの蕭紀こそ、真の意味で蕭繹の好敵手になりえる人物だといつてよい。

蕭紀には、こんなこともあった。天監年間とあるから、彼がまだ十代のころだろう、宮殿の大陽門に雷がおちた。すると門のうえに、「梁の帝位をうけつぐのは武王だけ」とよみとれる字様がうかんだのである。あるひとが、この「武王」は武陵王、つまり蕭紀をさすと解したので、それ以後朝野の人びとは、蕭紀に注目するようになったという。

このふしぎなできごと、『南史』本伝にもしるされているので、おそらく当時かなり評判になったのだろう。こうした評判、本人の耳にまで達していたかどうかはわからぬが、いずれにしても、蕭紀も、梁朝の帝位の座には、まったく無関心ではなかったろうとおもわれる。

そこへ侯景の乱がおこったのである。このとき蕭繹は、益州の蕭紀にも建康救援にゆけと命じたのだが、蕭紀はこれを無視して、いっかな建康にむかおうとしなかった。そして僚佐にむかって、「あの蕭繹など、文人にすぎぬ。どうして建康をすくえようか」といったという。この発言、蕭繹のごとき戦争オノンチが、建康を救援できるはずがない。できるのは、このわが輩であるぞ、といたかつたのだらうか。いずれにせよ、こうした行動や発言をなす以上は、蕭紀の心中に、彼なりの野心が生じていたとせねばなるまい。他の息子たちとどうよう、この蕭紀も、父兄の救援より、自分の野心のほうを優先させていたのである。

武帝にはたくさんの子や孫がいた。詩文や学問にすぐれた息子、しつかりはげめよと期待した息子、そして武芸にひいでた息子や孫など。だが肝腎かなめるとき、おのが野心や思惑など意に介さず、おっとり刀でかけつけ

てくれる者は、だれもいなかったのである。こうかんがえると、文武の両道にひいでた英雄であるが、どうも子や孫の教育という点では、あまり成功したとはいえぬようだ。包囲された建康の台城のなかで、武帝は「ああ、徳施（蕭統のあざな）よ。おまえが早逝さえしなければ、こんなことにはならなかったかもしれない」と、つぶやいたであろうか。

さて、そうした蕭紀だが、当初、蕭繹はなんとか、この弟を懐柔していた。大宝元年四月、てこずりながらも蕭譽を殺害して、おのが軍勢力をみせつけるや、蕭紀はようやく軍の派遣に応じたのである。

まず五月、世子の円照に軍をあたえて蜀をでて、兄の節度をうけさせた。さらに同年十一月には、蕭紀みずから軍をひきいて長江をくだろうとした。だが蕭繹は、いずれのときも、益州の軍に東下せぬように要求した。

十一月のときは、蕭繹は弟に書翰をおくり、「貴殿の蜀は途絶された地であり、いったん軍を發動すると、しずめにくくなるはずだ。弟よ、おまえは蜀をしつかり統治せよ。侯景討伐には、この私があたる所存であるぞ」、「貴殿と余とは、孫権と劉備のようであり、おたがい自分の国をしつかりまもることにしよう。だが、心は周の周公と康叔よりしたしくし、以後も連絡をとりあおうぞ」とのべている。

この書翰文、どうだろうか。親密なふうをよそおっているが、弟をライバルとして警戒しているようすが、ひそかにうかがえるようだ。蕭繹は、東下をゆるして、弟の勢威を拡大してもらってはこまる、とおそれていたのである。いつぼつ、弟の蕭紀のほう、二度ともおとなしく兄の指示にしたがったが、彼のほうも、兄の出かたを慎重にうかがっていたのだろう。

ところが、そこに事件がおこる。蕭紀の第二子の円正は、西陽太守となって善政をおこない、鄂州に駐屯していた。蕭繹は、この円正が蜀の父に合流するかもしれぬと警戒し、大宝二年（五五一）六月、平南將軍に任ずる

と称してよびよせ、酒で酩酊させたところを監禁したのだ（ちょうど巴陵で、配下の王僧弁らが侯景軍をやぶったところだ）。さらにおのが配下をつかって、円正の罪を捏造させたのである。この陰湿な事件をきっかけとして、蕭紀と蕭繹とのあいだには、完全に亀裂がはいってしまったのだった。

その結果だろうが、翌年の大宝三年四月、蕭紀はついに蜀の地で即位し、皇帝を称したのである（蕭繹より約半年はやい）。前年冬、蕭綱が侯景にころされたからには、だれかが帝位をつがねばならない。それは自分がいちばんふさわしい、という理屈だろう。くわえて、このままでは侯景追討の殊勲を、兄の蕭繹にとられてしまいかねない、というあせりもあつたにちがいない。「梁の帝位をうけつぐのは武王だけ」という字が宮殿の門にかんだように、梁を継承するのは「蕭繹などではなく」自分しかおらぬ。自分こそが皇帝を称し、そして侯景を打倒すべきなのだ。蕭紀の脳裏には、こつした野望がうかんでいたのだろう。

#### 兄弟対決

即位して四か月すぎた大宝三年（五五二）八月、蕭紀は満を持して蜀地をたつた。東方へむかつて軍船を出立させたのだ。もちろん侯景を打倒して、おのが梁帝の地位を自他にみとめさせようとして、である。ところがこのとき、侯景はすでにこの世のひとでなかった。蕭紀が帝を称したそのおなじ四月に、彼は王僧弁の軍にせまられて殺害されていたのである。

蕭紀の世子円照は、その報をつけていたのだが、あえて父親の紀にしらせなかった。この円照も、彼なりの野心があつたのだ。そのため父親をあざむいて、つぎのようになつたのである。「侯景の乱は、まだ平定されておられません。父うえ、いそぎ出発して討滅すべきです。荊州の地まで、侯景に陥落させられたそつですぞ」と。

父の紀はこれを信じて、出立したのだった。すると蕭紀は、蜀をたつ時点で、蕭繹は死んだとおもいこんでいたかもしれない。とすれば、「いまがチャンスだ。もし自分が侯景をうちたせば、自分の即位に異議をもうしたてる者はいなくなるだろう」と意気こんでいたことだろう。

それにしても世子の円照、この大事なときに、とんでもない虚言をいったものだ。当時、遠地に鎮する諸侯王たちは、世子を建康に人質としてさしだす慣例があった。だが、このとき武帝は蕭紀をとくにかわいがっていたので、例外的に円照の建康滞在を免除し、父のそばに待させたのだった。今回は、それが仇となったというべきだろう。

蕭紀の命取りとなったこの蜀出立に対し、『南史』蕭紀伝は、明確に「蕭」紀の鬻きんを構かまえしは、悉ことごとく其（息子）の円照の謀なり」と指摘する。父の武帝も、いざというとき、自分を救出してくれる息子がいなかったのだが、この蕭紀も、よい息子にめぐまれなかったといふべきだろう。

蕭紀は出立したあとに、侯景が殺害されていることをしった。だが、大軍をひきいて蜀を船出した以上、もはやいかんともしようがない。彼は、円照が「侯景はころされましたが、江陵（蕭繹）はまだ父うえに服従しておりませぬ。ただちに討滅すべきです」というまま、たたかう相手を侯景から蕭繹にかえ、そのまま船で東下をつづけたのだった。蕭繹のやつ、いきとおつたのか。いずれ、この兄とは雌雄を決せねばならぬ。それがちょっとはやまったただけだ。蕭紀はこう頭をきりかえた。いや、きりかえざるをえなかったのだらう。

この兄弟の対決、兄の作戦勝ちであった。蕭繹はこのとき、もうひとつ、南方の陸納が反乱をおこし、その鎮庄に手をやいていた。両面での戦いは不利だったので、承聖二年（五五三）三月、蕭繹は西魏に提案して、弟の蕭紀が出立した蜀の地を、西魏軍に攻撃せしめた（のち、西魏が占拠してしまった）のである。これも、さきの

蕭簪とおなじで、敵の敵は味方という論理なのだろう。弟にくさのあまり、この蕭繹も、胡族の国に蜀をとらせ  
ることを決断したのである。蕭繹の作戦どおり、出立した蜀があやつくなつたといふ報をきくや、蕭紀の軍勢は、  
すっかり浮足だつてしまつた。そのためか、はるばる西陵まで東下してきた蜀の軍であるが、あつけなく兄の軍  
にうちやぶれてしまい、蕭紀も斬死させられたのだつた。ときに承聖二年七月、享年四十六であつた。

蕭繹は、蕭紀を殺害したのち、その長子の円照をとらえて、獄中にほうりこんだ。そして、監禁していた円正  
(二子)に父の死を暗示して、自殺するようつなげたが、円正は自殺しなかつた。そこで蕭繹は、情けをかけ  
てやつた(つもりだつたのだろう)のに、と腹をたてたのだろう、円照と円正の二人に食をあたえず、獄中で餓  
死させたのである。二人はともに、飢渴にたえられず、自分の腕をかじつて血をすすつたすえ、十三日目に事き  
れた。「天下は聞きて之を悲しめり」と史書はしるしている(第一章も参照)。

弟との戦いの直前、蕭繹は弟に二通の書翰文をおくつた。どちらも名文であり、『梁書』はともに蕭紀伝のな  
かに採録している。ここでは一通目の「与武陵王紀書」をひこつ。原文も引用するので、整齊した美文らしさを  
ご確認いただきたい。

皇帝がつつしんで、假黄鉞太尉の武陵王(蕭紀)にたずねるぞ。

九黎が中国に侵入し、三苗が梁を混乱させてから、天の常道はみだれ、蛮人が狼藉をはたらいた。そして  
梁廷を侵犯し、王室を敗残せしめた。

そこで朕は、戈を枕としながら東の建康をながめ、血の涙もて西方の地を舟行した。息子を二方面で死な  
せ、八百諸侯もおらぬ状態のなか、みずから甲冑をまとつて戦いにのぞみ、手が流矢につらぬかれたことも  
あつた。そこへ、ふいに父帝ご崩御の報に接し、無念の情はやまず、国家転覆の危をつけ、百憂にとりつか

れた。それでも復讐心をふるいおこし、わが身をかえりみまいと決意したのである。

ただ、宗廟は侯景にあやつられ、凶漢は征伐されておらぬ。朕は臥薪嘗胆して機をつかがい、天罰をくだそうとし、知力をふるって、よき施策を実行せんとした。壇上でちかかって將軍をまねき、帳をあげて能士をまねこうとするも、赤壁で魏軍をこばんだ魯肅のごとき謀議の士もおらず、「官渡の戦いにおいて」烏巢で食糧をやきはらった荀攸のごとき人物もやってきてくれぬ。わが知能はおいつかず、資金もつきてしまいそう。さらに援助も皆無で、あらゆる苦難をなめつくした。だがそれでも、なんとか長狄を駒門できりころし、蚩尤を楓木でとらえるがごとく、侯景を殺害することができたのだ。

こうして朕は先帝の恥辱をはらし、天下より悪党をおいはらったのである。これから四方を統治したいが、ぜひ貴殿にも協力してほしい。そして天下の州牧とともに、太平の日々を現出させたいとおもつ。

暑熱はますますきびしくなってきたが、弟はこのごろ、体調はどうであるか。貴殿の文武の臣下たちも、さぞかし疲労していることであろう。いま、散騎常侍、光州刺史の鄭安忠をつかわせて、この朕の思いをつたえさせるしだいであるぞ。

皇帝敬問假黃鉞太尉武陵王。

|   |       |         |                      |
|---|-------|---------|----------------------|
| 自 | 九黎侵軼、 | 天長喪乱、   | 虔劉象魏、                |
|   | 三苗寇擾、 | 獯醜憑陵、   | 黍離王室。                |
| 朕 | 枕戈東望、 | 殞愛子於二方、 | 身被屬甲、俄而              |
|   | 泣血西浮、 | 無諸侯之八百、 | 手貫流矢。                |
|   |       |         | 霜露之悲、百憂繼集。           |
|   |       |         | 風樹之酷、万恨始纏、扣心飲胆、志不凶全。 |

直以宗社綴旒、鯨鯢未剪。嘗胆待旦、龔行天罰。獨運四聰、雖復結壇待將、

坐揮八柄、  
襄帷納士、

拒赤壁之兵、無謀於魯肅、才智將殫、傍無寸助、陔阻備言、遂得斬長狄於駒門、

燒烏巢之米、不訪於荀攸、金貝殆竭、挫蚩尤於楓木、

怨恥既雪、經營四方、方与岳牧、同茲清靜、

天下無塵、專資一力、

隆暑炎赫、弟比如何。文武具僚、当有劳弊。今遣散騎常侍、光州刺史鄭安忠、指宣往懷。

この文書は、「与武陵王紀書」（武陵王紀に与うる書）と称されている。だが、それは後代の呼称にすぎず、蕭繹としては、詔勅「与武陵王紀詔」をくだしたつもりだったろう。この文書は、蕭繹即位後の承聖二年（五五三）六月の執筆であり、その時点では、蕭繹はもう践祚しているのだから。だから彼は、冒頭で「皇帝が、つつしんで假黄鉞太尉の武陵王にいうぞ」とのべて、みずから「皇帝」と名のっているのである。その後も「朕」と自称し、そして末尾では、「暑熱はますますきびしくなってきたが、弟はこのごろ、体調はどうであるか。貴殿の文武の臣下たちも、さぞかし疲労していることであろう」というありがたいおことばを、臣下の武陵王（蕭繹）にたまわっているのだ。

蕭繹は、この文書にカチンときた。蕭繹からすれば、自分だって天子なのだ。しかも、蕭繹より七か月もはやく、践祚を天下に喧伝している。それなのに、あとから即位した蕭繹が、みずから皇帝などと称し、自分を臣下あつかいするとはなにことだ——と。

このとき蕭繹は、詔勅をもってゆく使者にいいくめて、弟にある提案をもってゆかせた。それは、蕭繹がこ

のまま蜀に帰還し、当地を占有することをゆるす、というものである。要するに、このまま蜀へかえれ。そうすれば、今回の東下はなかつたことにしてやるぞ、ということだろう。

だが、ここにいたった以上、蕭紀も「そうですか。じゃあ、蜀にかえります」といつて、かえられるはずがない。とうぜん彼は、兄の提案を拒否した。その拒否した蕭紀の書翰、いまは佚しているが、家族あて書翰文の体裁でかかれていたという。兄はあくまで兄だ。オシは、兄を天子とはみとめぬぞ、という意思表示だろう。これは蕭繹が兄蕭綱の年号（大宝）を使用せず、父帝の太清「の年号」をつかいつづけたのと同種の心理だったに相違ない。

それにしても、この対偶や典故でかざられた詔勅（書翰文）、その内容や口調は、つよい自信にあふれている（おそらく蕭繹自身の執筆だろう）。第三章の「湘東苑のあそび」を参照。侯景の乱によって、「天の常道はみだれ、蛮人が狼藉をはたら」くようになった。だが、「みずから甲冑をまとって戦いにのぞみ、手が流矢につらぬかれ」る辛苦のすえ、ついに「先帝の恥辱をはらし、天下より悪党をおいはらったのである」と、自慢げにつづいている。やはり、他人ではなく、この自分が「配下の将兵を派遣して」侯景をうちとったのだ、という自負があるからだろう。もちろん、父帝や兄を見殺しにしたことや、甥を殺害したこと、西魏と同盟して弟の領土に侵入せしめたことなどには、しらぬ顔をしているのである。

兵威を逞しくせよ

こうして蕭繹は、弟の蕭紀を誅殺することができた。これで、蕭繹の兄弟、つまり武帝の息子たちは、蕭繹以外はすべて、この世をさったことになる。というのも、六兄の蕭綸も、これより二年まえに蕭繹のさしがねによつ

て、殺害されているからである。その経緯をのべておこう。

蕭綸は、蕭譽が蕭繹にころされたあと、自分が侯景を征伐しようとして、郢州にかえって兵器を改修しはじめた。ところが、これをみた蕭繹は、この兄の動きをきらい、王僧弁を派遣して攻撃せしめた。この蕭繹という男は、他人が侯景をうちとつて殊勲をあげるのが、我慢できなかったのである。侯景をうちとり、つぎの帝位にくるのは、自分でなければならぬ。それをだしぬこうとする者は、兄弟であつても排除せねばならぬ。つまり、自分が蕭譽や蕭譽とたたかっているあいだに、鳶に油揚をさらわれてたまるものか、とおもつたのだらう。

こうして、王僧弁の軍においつめられた六兄は、郢州を脱出して北方に逃走し、転々したあげく、最後は西魏の楊忠によつて殺害されたのだつた（大宝二年二月）。その意味で、これも間接的に蕭繹がころしたといつてよからう。

それにしても、この蕭紀の誅殺をはじめ、ここまで蕭繹はおおくの兄弟や親族を殺戮してきた。ここで兄弟七人の死因を再確認しておこう。

まず、長兄蕭統（五三一死、三十一歳）、二兄蕭綜（五三一死、三十歳）、そして四兄蕭績（五二九死、二十六歳）については、三人とも早世したということもあり、蕭繹が手をくだしたわけではない。また五兄の蕭統の病死（五四七死、四十四歳）についても、蕭繹は関与していない。もっとも、前述したように、生前は「西帰内人の件もあつて」とても仲がわるく、統が死ぬや、蕭繹は小躍りしてよろこび、はいている屨くがやぶけたという。もし彼が病死していなかったら、二人ははげしく対立したに相違ない。

そして六兄蕭綸（五五一死、四十五歳）と弟の第八子蕭紀（五五三死、四十六歳）とは、実質は彼が殺害を命じたものといつてよからう。

のこる三兄の蕭綱（簡文帝）については、どうだろうか。蕭綱は、直接的には侯景にころされている（五五二死、四十九歳）。だがそうした蕭綱を、蕭繹は救援にゆかなかったわけであり、いわば見殺しにしたといっている。いや、見殺しにしたどころか、こんな話がのこっている。

蕭繹が王僧弁に建康進攻を命じて、侯景を討伐させたときだから、大宝三年（承聖元年、五五二）の二月のころだろうか。王僧弁と蕭繹のあいだで、つぎのような会話がなされた。

「侯景どもを平定したのち、もし皇太子さま（蕭綱のこと）がご存命でしたら、この僧弁めは、いかがりにはからえはよろしゅうございますか」

「台城のなか、兵威を極めるがよい」

「侯景の殺害は、この私めの仕事でございます。ですが、成済のしかしたようなことは、どうか別人におやらせください」。

この会話、「兵威を極める」（おもつ存分に攻撃する、の意）や「成済のしかしたようなこと」などは、つまりはどういう意味なのか、ややわかりにくい。

まず「成済」のほうから説明すれば、これは人名であり、主君を弑逆した男のことである。「資治通鑑」梁紀二十の胡三省注には、「成済とは、魏の高貴郷公をころした男のことである。王僧弁は主君を弑する汚名からのがれたかったので、こついつたのだ」とある。すると「成済のしかしたようなこと」とは、主君（ここでは蕭綱をさす）を弑することを意味することになる。そうだとすれば、ここの「兵威を極める」ということは、「台城のなかにいる」蕭綱をころす」という意になるではないか。

このとき、幸か不幸か、蕭綱は前年に死んでいたもので、台城を攻略した王僧弁は、おのが手をけがさなくてす

んだ。しかしもし存命していたら、おそらく蕭綱は、自分の弟「の命」によってころされていたらう。この蕭綱は、「前述したように」弟の蕭繹をかわいがり、なにかと庇護してくれた恩義ある兄であった。だが蕭繹は、そんなことにはいっさい頓着せず、自分の権力を確立させるため、冷然と「兵威を極めるがよい」といいはなつたのである。

兄弟の死因は以上だが、蕭繹はほかにも直接間接に、おおくの親族をころした。名前だけあげれば、蕭譽（甥）、蕭棟（蕭統の孫）、蕭紀の息子の田照と田正、田満、そして蕭慥や蕭賁（遠縁）など。血のつながりぬ者にいたっては、もうきりが無い。

こうした蕭繹の残虐な親族殺害に対し、後世の史家はそろって、つよい糾弾のことはあびせている。ここでは、その代表的なものとして、初唐の魏徴の評言（『梁書』「元帝紀、また『南史』同篇もこれをひく）を紹介してみよう。

元帝は盤石の宗族のもと、荊州刺史に任ぜられていた。そうしたとき、建康の父帝が侯景に襲撃されたので、軍事司令官の地位についた。だが、彼は臥薪嘗胆の努力をすることなく、率先して侯景に戦いをいどむこともしなかつた。大軍を擁しても進発するのをためらい、内心に野望をたくわえていた。そして国難を座視し、それを幸運だとおもっていたのである。そのため彼は、王莽や董卓のとき悪党の誅殺を後まわしにし、兄弟の殺害のほうを優先したのだった。

彼はまた、猜疑心がつよくて残忍であり、かぞえきれぬほどの無礼な行為をおこなった。きれいごとをいっておのが非をかざり、怒りを爆発させて他人をころしたので、武臣や將軍、さらに股肱の臣や謀臣らは、右顧左眄しても「けっきょくは」獄中にいられ、諫言しては「ころされて、その死体を」塩漬けにされる始

末であつた。おかげで朝臣たちは怖し、びくびくしながらみつめあうだけだつた。

元帝は、江陵は泰山のごとく安泰で、算段にも遺漏はないと自負していた。さらに邪説を気にしたので、荊州の地からうごかなかつた。侯景は討伐したが、まだ社稷が安定せぬときに、西魏が叱声を発し、ついに江陵は滅亡においこまれたのである。このことたるや、天の神靈がいましめんとして、西魏の手をかりたものだろう。天命の趨勢たるや、どうしてあざむくことができようか。

元帝は学芸に熱心だつたが、軽薄なものをこのみ、忠信なものを無視した。また軍事にも果敢だつたが、肉親を殺害し、敵軍は後まわしにした。六経をよく読誦し、諸子にもよく通じていたし、孔子の学もまなび、周公旦のごとき才腕も有していた。だが、そうした学識があつたとしても、ただ驕慢さをつよめ、禍害をひどくしただけだつた。ましてや、どうして建康の陥落をふせいだり、江陵の滅亡をすくえたりできたであらうか。

ここで魏徵がいう「王莽や董卓のごとき悪党の誅殺を後まわしにし、兄弟の殺害のほうを優先した」（原文は「不急莽卓之誅、先行昆弟之戮」とは、西魏や北斉を攻撃せず、兄弟や親族の殺害に熱心だつたことをいうのだらう。もちろん、ころしたのは兄弟や親族だけではなかつたのだが、しかし侯景の乱以後の蕭繹は、とくに親族に対して刻薄だつた。自分が権力をにぎるためには親族、なによりも兄弟が邪魔になつたからである。

こつした魏徵の評言、もし泉下の蕭繹がこれをきいたら、どうした反応をしめすだらうか。後悔の情をつかべたり、首をつなだれたりするだらうか。いやいや、けつしてそんなことはあるまい。江陵陥落後、西魏軍の長孫侯に長広舌をふるつたように（第一章）、こんどもまた反省することなく、兄弟批判と自己弁護のことはを、滔々と弁じるに相違ない。

親族への迫害、とくに蕭紀父子の殺害のしかたなどをみると、彼はおのが骨肉に、愛情のかけらも有していなかったようだ。たとえば、蕭紀が船で東下したときくや、蕭繹は心中、憎悪の情がふつふつとわいてきたのだろう。方士に命じて蕭紀の姿絵をかかせた。そして槌をもつて絵のまえにすすみで、みずから釘を「蕭紀の」肢体にブスブスツとうちこんで、自分の弟を呪詛したという。

これをみていた近侍の者たちの反応については、史書はなにもしるさない。だがおそらく、みなふるえあがったのではあるまいか。いったんにくいとなれば、親族だろつが兄弟だろつが、平然とこんなことができる男、それが蕭繹なのであった。

そうした結果、皮肉なことというべきか、とうぜんの報いというべきか、彼自身も、最期は甥の蕭簪にくまれ、そのはげしい罵倒のなかで、ころされてしまったのだつた。まったく、なんとという生きかた、なんとという死にかたであるうか。彼は、皇帝菩薩と称された、あの寛仁な武帝の息子なのだ。その皇帝菩薩の息子が、蚩尤や桀紂のごとき殺人鬼になり、最後はわが身をほろぼし、また国をも滅亡させてしまったのである。

この蕭繹という梟雄のなかには、読書にはけみ、著述に熱心だった勤勉さと、兄弟や親族を殺害した冷酷さとが、矛盾することなく両立している。いったいどうして、こんな奇妙な人格がうまれてしまったのか。つぎの章では、この蕭繹の人がらや性格をかんがえてみよう。

## 六 なぜ書物をやいたか

根源は劣等感

この章では、蕭繹でなく、元帝の称をつかおう。

さて、ここまで元帝の生涯を概観してきた。彼の生きかたは、なにことにおいても苛烈だった。ほどほどにとどまることなく、極端をもとめようとする。努力しようとするれば、昼夜をとわず書物を読誦させつづけ、にくいとなれば、躊躇せず残虐な行為にはしってしまう。後者の典型例が、侯景の乱以後の「兄弟をふくむ」親族殺害であって、おのが競争者を容赦なく殺戮していったのだった。正の方向、邪の方向、いずれにむかうにせよ、彼の生きかたには、尋常とはいいがたい激しさがある。

そうした彼の苛烈さや激しさは、なにに由来するのだろうか。

この種の人物のこの種の行動については、権力欲 ということでは説明できることがおおい。権力や高位、とくにその頂点としての帝位を、つよくもとめる。邪魔だてをするものがあれば、兄弟だろうが親族だろうが、苛烈に、そしてはげしく排除しようとする。そのためには残虐なこともいとわな—— というような説明である。

じつさい、六朝期をみわたすと、帝位をめざし、あるいは保持しようとして、親族を殺戮することは、北朝南朝とおして、けっしてめずらしいものではない。

南朝だけを例にとっても、まず宋の劉劭が典型としてあげられる。皇太子だった彼は、はやく帝位につこうとして、父の文帝を殺害したが、功をあげたため準備が不足していた。おかげで反対派によって、すぐにころさ

れてしまった。

おなじく宋の明帝は、帝室の傍流からたつたためか、本流の孝武帝（兄）の子どもたちを敵視した。そのため先帝（孝武帝）の子は二十八人全員、天寿をまつとつでできなかった（うち十六人が明帝にころされた）のである。さらにこの明帝、亡き文帝（父）の妻だった太后（路淑媛）が、毒いりの酒を自分にのみせようとしたので、この継母までころした。すさまじい一族、すさまじい殺戮ぶりだ。だが、いっばつで彼は読書をこのみ、『江左以来文章志』を編したり、『論語』の注釈書をつくったりしているので、蕭繹に似ているといえなくもない。

その宋を廃してたつた斉も、残虐さではひけをとらない。斉高帝こと蕭道成は、順帝はじめとする宋室の者を根こそぎ殺戮した。おなじく傍流からたつた斉明帝は、わが子への継承をはかるうとして、やはり本流の武帝（蕭道成の子）の子孫を根だやしにしたのである。

これらの事例は、いずれも帝位を奪取し、あるいは保持しようとして、他の競争者を排除しようとしたものだ。その意味で、たしかに権力欲の所産だといってよからう。これらにくらべると、権力欲といっても、世に名だけい、魏の帝位をめぐる曹丕・曹植兄弟の不和などは、まだ牧歌的でおとなしいものだといわねばならない。南朝の皇族たちは、「七歩の詩」をつくるいとまもなく、あつというまに殺害されているのだから。

かくみてくれば、元帝の残虐な行動も、同種の動機（権力欲）に起因するものだった、といえなくはあるまい。じつさい元帝が、侯景や西魏軍の討伐を後まわしにしてでも、兄弟や親族の殺害を優先したのは、彼らが権力奪取のライバルであり、邪魔だったからである。邪魔者はきえてもらわねばならない。

だが、元帝の苛烈さや激しさは、この権力欲だけでは、じゅうぶん説明しきれないようだ。では、十全に説明するためには、権力欲にプラスして、なにが 필요한のか。それをかんがえるために、ここまでの本稿の記述によ

りつつ、もういちど元帝の生涯をふりかえってみよう。

第二章では、彼の生いたちと十四歳時の片目失明について叙した。少年期の元帝は、隻眼ということからかわれることもあった。だが、母の愛情によって庇護され、彼は健全に成長していったのだった。

つづく第三章は、隻眼のハンディを克服すべく、熱心に読書しつづけた三十二歳までの日々だった。いわば青年期であり、一回目の荊州刺史をつとめた時期である。このころの彼は上昇意欲にあふれ、勤勉に著述にはげみ、詩文もおおいにたのしんでいた。兄弟との関係も良好で、したしく交際しあっていた。

第四章では、江州刺史としての精励ぶりと野心のきざしとをみてきた。このころの元帝は、堅物の知識人としていられていたが、軍事面でも功績をあげて、しだいに自信をふかめてきた。ところが、母の逝去をきつかけとして、心理的に枷がはずれたような気分になったようだ。そのため、傲慢なふるまいが出現しはじめ、親族とも亀裂がひろがりはじめたのである。

そして第五章において、侯景の乱発生以後の元帝を叙した。この期の彼は、以前とは違ってかわり、鬼神のごとく「親族をふくむ」競争者とたたかい、つきつきと相手を殺戮していった。理性の奥にかくされていた蛮性が、いつきに外へほとばしりでた時期だといえようか。

そしてその結末は、第一章で叙した悲惨な最期に接続してゆく。つまり、西魏と甥蕭詧との連合軍が、疾風のごとく江陵におしよせ、あつけなく攻略されてしまった。そして降伏した元帝は、蕭詧の罵言をあびながら、殺害されていったのである。

かかる元帝の生涯をみてくると、彼の根底にあったものは、後天的な権力への欲というより、むしろ十四歳時の失明だった、といってよいのではないだろうか。そして大局的にみれば、元帝の生涯は、「隻眼による劣等感

とその克服（この克服のなかに、熱心な読書や著述、そして残虐な殺戮などもふくまれる）「ということ、説明できるのではないかとおもわれる。それを私なりに説明すれば、以下のようになる。」

元帝は、幼少時に眼疾をわずらい、十四歳のときに片目を失明してしまった。だが当初、この隻眼の劣等感は上昇意欲の原動力となり、このましい方向へむかっていた。母の庇護のもと、熱心に読書にはげんで著述をつみあげ、堂々たる知識人かつ地方官になったのである。ところが、「おそろく」母の死をきっかけとして、元帝の意識に変化が生じてきた。劣等感に起因する嫉妬心や被害妄想が頭をもたげはじめ、さらに権力欲も高じてきたのである。そして、それらが侯景の乱を機に、いつきに噴出した。かくして、競争相手や親族を躊躇なく殺戮し、ひたすら帝位にむかって驀進していったのだった――。

こうかんがえると、元帝の言動が有する苛烈さや激しさの原因として、権力欲にくわえて、隻眼ゆえの劣等感「そしてそれに起因する嫉妬心や被害妄想」も想定してしかるべきだろう。

当時のことである。隻眼に対し、心ない言動や態度をなす者は、すくなくなかったに相違ない。わかいころの元帝は、それらに、うちのめされるような思いをしたことも、一再ではなかったろう。そうしたことがあるたび、彼は「あいつは「自分とちがい」両目が見えるのだ」と嫉妬したり、「陰かげで、オレのことをわらっているんだらう」と被害妄想をいだいたり、したのではなかったか。そして、「いつかあいつらに仕返ししてやる。いや仕返しせずにはおかんぞ」という思いが、心の奥で醸成されていったのだらう。さればこそ、侯景の乱以後の激動期、他「の晴眼者やライバルたち」に対する彼の攻撃が、より苛烈、かつはげしいものになっていったのだとおもわれる。

以下、元帝のさまざまな言動をみわたしながら、その様相をみてゆこう。

体面をかざる

『南史』元帝紀には、彼の性格をつぎのようについて、「性として矯り飾るを好み、猜忌する多し。名に於いて人に假る所無し。微かに己より勝る者有らば、必ず毀害を加う」と。体面をかざるのがすきなうえ、嫉妬心がよかつた。だから名声において、他人にまけたくなかつた。もしちよつとでも自分よりすぐれた者がおれば、かならず危害をくわえたのである、と。

ここでいう「体面をかざるのがすき」というのは、自分をよくみせて、名声をたかめることをさし、「嫉妬心がよかつた」とは、他人の才能をねたみきらうことをいう。だからこそ元帝は、「自分よりすぐれた者がおれば、かならず危害をくわえ」るようなことをしたのだらう。この『南史』の記述、かなり辛辣な書きかただが、「あとで実例をしめすように」あたっているといつてよさそつだ。

では、なぜ元帝はこんな性格になつてしまつたのか。『南史』は「性として」といつているので、うまれつきだつたとかんがえているのだらう。

だが、私はここに「片目失明と、それへの劣等感」という因子を想定したい。「うまれつき」ということも、多少はあつたかもしれない。だがそつしたところへ、少年時、この因子がくわわつた。そのため元帝は、体面をかざるのがすきなうえ、嫉妬心がよかつた性分がよけいに亢進してきた、ということではないだらうか。つまり元帝は、隻眼という劣等感を有していたため、「隻眼でない」すぐれし人びとに嫉妬するようになった。その結果、ややもすれば、名声たかき人物をひきずりおろし、危害をくわえるようになった——といつことである。以下、元帝紀のなかから、そつした元帝の性格に起因した「とおもわれる」事例を、いくつかあげてみよう。

たとえば、武帝の妹（義興昭長公主）の息子は、長兄の王銓はじめ、九人とも優秀だつた。元帝は彼らの評判

をねたんで、自分の寵姫王氏の兄の王珩（有能な武將で梁室のために奮闘した）を「王琳」に改名させ、王銓たちの父（名が琳）とおなじ名にさせたという。つまり兄弟の父とおなじ名にして、諱をおかせたのである。周知のように、旧時では父の名字は、紙にかくの mouth にするのものはばかられる、甚大なタブーだった。父と同名となった「王琳」をまえにして、王銓兄弟はさぞかし困惑し、また恥辱を感じたことだろう。これは、名声において、他人にまけたくなかった事例としてよかるう。

また、母の阮修容の喪に服していたとき、彼は漢の丁蘭（父母の死後、その木像をきざんでお仕えたという）の故事に模して、母の木像をつくった。また父の武帝が崩御すると、梅檀をきざんで武帝の像をつくり、百福殿に安置した。そして朝夕に食事をお供えし、日々のできごとをかならず報告したという。これらの行為に対して、『南史』は「その体面のつくろいぶりはかくのごとくであった」という。つまり体面をかざった、わざとらしい行為だとみなしているのである。

これにくわえて、建康が制圧され、簡文帝が殺害されるや、元帝は周囲からしばしば、諸侯王を統率し、帝位についてほしい、と懇請された。だが彼は、こうした要請を固辞して、なかなか即位しなかった。これは、謙虚な性格のためというより、周囲の人びとをじらせ、期待感をたかめさせようとしていたのだろう（前述）。すると、これも体面をかざり、名声をつりあげようとする意図だったろうとおもわれる。

さらに、いかにも元帝らしいのが、劉之遴への仕うちだ。当時、劉之遴（四七八―五四九）という篤実な学者がいた。武帝も彼の学識を敬重し、あるとき彼に「貴殿のご母堂は年齢も徳も、ともにたかいそうな。されば貴殿は錦を身につけて帰郷し、母堂に榮譽をあたえ孝養をつくせばよかるう」といったこともあったという。

ところが、之遴七十二歳のとき、侯景の乱をさけるため、彼は故郷に避難しようとした。すると、以前からこ

の之遴の学識ぶりを嫉妬していた元帝、之遴が夏口にまでやってきたと知るや、こつそり鳩毒をおくって殺害させたのだった。しかもこのことが世に知られぬよう、元帝自身が彼の墓誌銘をかき、あつい贈り物をしたという。これは太清三年（五四九）のできごと。太清三年といえ、侯景の監視下、武帝が建康の宮中で衰弱死させられた年でもある。元帝はそのおなじ年に、こんなことをしていたわけだ。

もっとも、劉之遴のための墓誌銘は現存していない。そのためこの話、どこまで信用できるのか、いささかこころもとない。このとき四十二歳の彼が、なぜ三十歳も年長の老人に嫉妬せねばならぬのか、疑問といえ、疑問であるからだ。だが、『南史』の元帝紀や劉之遴伝にも記述されているので、そうそう根も葉もない噂ばなしでもなさそう。すくなくとも、初唐の史家はこれを事実だと信じて、史書に記述したのである。

かく史書の記述を信じれば、このエピソード、とくに、之遴の学識をにくんで毒殺しておきながら、世間の目をこまかすために墓誌銘をつづったところなどは、体面を重視する元帝の面目が躍如しているといつてよい。「体面をかざるのがすきなうえ、嫉妬心がつよかった。だから名声において、他人にまけたくなかった。もしちよつとでも自分よりすぐれた者がおれば、かならず危害をくわえた」という『南史』の記述を、そのまま地味でいっているからである。

この話柄を紹介したあと、元帝紀はさりげなく、「この種のがたいへんおおく、骨肉の者であっても、元帝からの禍害をこつむつたのである」とつけくわえている。侯景の乱が発生したとき、元帝は骨肉、すなわち父武帝と兄蕭綱の救援に、自身ではでむかなかつた。これは前述したように、彼に野心があつたからだとおもわれる。だが心理学的にみると、これも右と同種の理由、つまり頭があがらぬ父と兄に対し嫉妬を感じていたので、あえて救援にゆかず見殺しにした、ということだったのかも知れない。

## 被害妄想

いっぽう、片目失明と、それによる劣等感は、つよい性格のゆがみも生じさせた。

それは、隻眼の劣等感ゆえ「蔭で、オレをわらっているんだろ」とおもいこみ、仕返しせずにはおれないという、邪悪なゆがみである。そして、それはさらに、自分の意にそわない、あるいはそおうとせぬ者への怒りや攻撃性にも転化し、拡大していった。「隻眼だと小バカにして、わが意にそおうとせぬのだから」とおもいこむのである。こうした心の動き、心理学的には、被害妄想と称されてよいかもしれない。

もっとも、わかひころは、他に仕返しをし、攻撃をしたくても、周辺の目を気にして、実行できなかった。しかし元帝が年齢をかさね、彼をたしなめてくれた母が死に、権威あつた父帝も侯景の乱で崩じたあととなって、元帝にはもう遠慮せねばならぬとはいえない。これまで心中に醸成されてきた被害妄想、そしてそれに起因する攻撃性、これをいつきに噴出させてもかまわぬ時期が到来したのだ。そしてそれが「帝位をめざす」権力欲と合体したとき、他者だけでなく、骨肉の競争相手にも、矛先がむけられた。かくして侯景の乱以後、自分の氣に合わない者への苛烈な攻撃が、実行されることになったのである。

まず、隻眼の劣等感に起因するものとしては、王偉の殺害が典型的なものだろう。

王偉は侯景につかえ、あらゆる策略をこらして、梁室をくるしめた男だ。その王偉も、承聖元年（五五二）に侯景が殺害されるとともに拘束され、江陵へおくられてきた。彼は罪をゆるされようと、獄中で「趙壹は友に救命されて窮鳥賦をつくり、鄒陽も獄中書翰をつづつてゆるされた。どうして西江の水でもって、轍中の魚たる私をお救いくださらぬのか」という詩をつくって、助命を嘆願した。さらに五百字よりなる詩をつくり、それを元帝に献上したのである。元帝は当初、その才能に感心し、王偉をゆるそうとかがえた。

だが、王偉をきらう朝臣が、「あやつが以前、侯景のためにつくった檄文に、こんなけしからぬことばがあり  
ますぞ」といった。そしてその檄文の一節を元帝にみせた。すると、そこに

項羽は一目に二瞳があつたのに

烏江の地で死んでしまった

湘東は一目しかないのに

どうして天下をわがものにできよう

という字句があつたのである。元帝はこれを見て激怒した。王偉をとらえるや、釘でもってその舌を柱にうちつけ、またその腸をひきずりだした。そして肉をずたにきりきざんで、惨殺せしめたのだ。「湘東は一目しかない」のことが、元帝の劣等感を刺激してしまったのだった。

また元帝が、王僧弁を派遣して、兄の蕭綸をおそつて逃走させたことは前述した。そのほぼ半年後の大宝二年二月（五五一）に、蕭綸は西魏の楊忠に殺害されたのだが、そのきっかけは、元帝がつくつたのだった。元帝と蕭綸とは、帝位をめぐるライバル関係にあり、それが二人の不仲の主因であつた。

だが二人の不仲には、もうひとつ重要なきっかけがあつたはずだ。それは、時期は不明ながら、蕭綸が「戲湘東王」という詩をつくっていることである。

湘東王蕭繹は 病氣もちだ

湘東有一病

それは啞でもなく 聾でもない「隻眼であることだ」

非啞復非聾

相思えば隻涙を下す

相思下隻淚

直を望めども功を全うすること有らんや

望直有全功

この「戲湘東王詩」、『太平御覽』卷七四〇に右四句しかのこらぬうえ、下二句の意味がとれず、正確には解釈できない。だが「湘東王に戯れる」という題や、上二句の内容からみて、元帝の隻眼をからかったものではない

かとおもわれる。おそらく、なにかの宴席の場で、蕭綸がこうした詩をつくって、弟をからかったのだろう。こうした詩句がのこっているとすれば、軽薄な蕭綸のことだ。この種の言動を、しばしばしていたのではあるまいか。もちろん、この詩じたいが、元帝の王僧弁派遣に直結したかどうかはわからない。だが、この種の心ないからかいが、二人の不仲の地下になったことは、じゅうぶんかんがえられる。

さらにこの時期、元帝は妻の徐妃を自死せしめている。彼は、第二子蕭方諸をつんだ王氏を寵愛していたが、この時期に死去した。元帝はこれを徐妃のしわざだとおもいこんで、きびしく追及し、徐妃に自殺せよとせまったのである。徐妃はもうまぬがれぬとおもい、井戸に身をなげて死んだのだった（太清三年、五四九）。この事件、直接には王氏殺害の嫌疑が原因だが、遠因として、やはり隻眼のからかい（元帝が夜に夫婦の寝室へやってくるや、いつも顔半分だけ化粧して、これをむかえた。前述）への怒りもあつたであろう。

つづいて、自分の意にそわぬ者への攻撃もあげよう。

侯景が健康をかこんだ太清三年（五四九）のこと、元帝は武城で軍を駐屯させたまま、健康の救援にむかわなかった。そして、武帝と侯景の和約（じつは偽約にすぎない）がなったときくや、元帝はいさんで江陵にかえろうとした。そうした彼にむかつて、蕭貢という男が、つぎのような嫌味をいったのだった。「王（元帝のこと）は十万の軍をひきいながら、建康の賊徒（侯景）とたたかわずしてお帰りなされるのか」。元帝はこの発言をにくんだ。そのため後日、別件にことよせて、この蕭貢をころしたのだった。

さらに承聖元年（五五二）、元帝は侯景を討滅せんとして、みずから檄文「馳檄告四方」をつづつて発布した。すると、やはり蕭貢という男（さきの人物とは別人）が、その字句に具合がわるい箇所があるといつて、ケチをつけたのである。すなわち檄文中の、

偃師から南をみれば 儲胥宮や露寒宮もみえず

偃師南望、無復儲胥露寒

河陽から北をのぞめば 穹廬や氈帳がみえるだけ

河陽北臨、或有穹廬氈帳

という対偶をとりあげ、蕭賁はいった。「この語句はあまり適切ではありません。梁廷のようすを叙したようですが、侯景のやつらとは関係ない叙述です」。

これをきくや、元帝は烈火のごとくいかって、蕭賁を獄中にはつりこみ、餓死せしめた。さらに死んだあと、彼の死体を凌辱し、さらに「懷旧伝」という書物をかいて、そこでも罵詈雑言をつらねたという。

ただか、字句上でのことに、すさまじい怒りかたである。詩文に自信をもっていた元帝は、この批判めいた発言が、がまんならなかったのだろうか。蕭賁が多才多芸だったので、嫉妬したという説があるが（『蕭繹評伝』一八頁）、それだけが理由ではあるまい。おそらく史書にかかれておらぬ、べつの理由があったのだろう。だがそうだとすると、この蕭賁への執拗な怒りは理解しがたく、むしる精神の不安定さを感じさせるものとせねばならない。

以上、隻眼の劣等感に由来した殺害三件、自分の意にそわぬ者への攻撃二件を、それぞれあげてきた。いずれも苛烈なものであるが、とくに王偉と蕭賁（後者）への殺害のしかたは、異常なほど残酷であり、執拗であるといわねばならない。両件とも、自分の弱点（隻眼）や瑕疵（字句の表現）をつかれたことへの衝動的な怒り、という点で共通している。

つかれたようにライバルをころし、野望を追求する日々。おそらく元帝は、怒りをおさえ攻撃性を自制する力が、とほしくなっていたのだろう。もし父母が健在だったなら、同種のからかいや批判をこうむっても、すこしは言動をつつしんだかもしれない。だがこの時期にはもはや、遠慮せねばならぬ者はだれもいなかったのである。

## 衝動的な焚書

そうした、おさえきれぬ怒りや攻撃性が、ひとでなく書物にむかったのが、元帝の悪名を後世にのこした焚書であつたとおもわれる。

事からは、第一章でかたつた焚書の話にもどる。承聖三年（五五四）十二月、西魏の攻撃を受け、講和をもうしてた元帝は、配下の者にむかつて、十四万巻にのぼる書物を蔵した東閣竹殿に火をはなて、と命じたのだつた。そしてみずからも、火中に身を投じようとした。かろうじて宮女や左右の者にとどめられた元帝は、「文武の道、今夜尽きたり」と歎じたのだつた（『資治通鑑』巻一六五）。

この元帝の焚書、後述するように書物の五厄のひとつとされるなど、文化史上にのこる愚行だとされている。ただ、元帝そのひとも、火のなかにとびこもうとしたこと、「文武の道、今夜尽きたり」と歎じたこと、さらに梁朝が滅亡したことなどもあいまって、この事件、なにかいたましい悲劇であるかのように、みえなくもない。たしかに、大量の書物が灰塵に帰したことは、悲劇的なことであろう。しかし、そうなるにいたつた焚書の動機たるや、悲劇というのものはばかれる、愚劣なものにすぎない。じつさいのところは、元帝が自暴自棄になつて、衝動的に「ええい、火をつけてしまえ」と命じてしまった、というだけのことなのである。

元帝の混乱ぶりは、このとき、きわまつていた。西魏軍の攻勢によって江陵が陥落し、おのれの運命も、そして梁朝の命運も、つきはてようとしていた。元帝は興奮し、捨てばちになり、そしてすべてに絶望していた。そのとき、ふとみると、目のまえに大量の書物を蔵した書庫がある。ああ、たくさん書物。これまで大事にしてきた、自分の宝物。だが、けつきよくなんの助けにもならなかつた。こんな役たたずなもの、自分といっしょにこの世からきえてしまえばいい。どうせ、自分のものだ。かまうもんか、もやしてしまえ……。元帝の心理を

私なりに代弁すれば、このようなものだったのだろう。

くわえて、元帝の短気で直情的な性格も、この愚劣な行為に拍車をかけた。

彼の直情的な性格といったとき、私はすぐ王僧弁への仕うちをおもいだす。これより五年まえの太清三年（五四九）六月、元帝は長男の蕭方等を派遣して、自分のいうことをきかぬ湘州刺史蕭譽を征伐せしめようとした。だが蕭譽の軍はつよく、逆に方等が敗死してしまった。そこで元帝は、こんどは王僧弁に出陣を命じた。

ところが僧弁は、竟陵の兵が到着してから攻撃したいとおもい、元帝に出陣の延期をもうしたのである。すると元帝は、命令をきかぬ僧弁におおいにいきり、刀を手にとった。そして、配下に命じて僧弁をとらえさせ、「おまえは敵と内通しておるのか。されば死あるのみだ」といって、刀をふりおろし、僧弁の左腿にきりつけたのである。流血がとびちり、僧弁は悶絶してしまった。やがて息をふきかえずや、元帝は瀕死の僧弁を、子姪ともども獄中にほうりこんだのである。

すさまじい怒りようだ。これは、計算すくの芝居などではなく、ほんとうに逆上し、刀をふりおろしたのである。いったんカツとなると、見さかいがつかないのである。もし刀が左腿でなく、心臓をひきさいたら、僧弁はこのとき、即死していたに相違ない。

この王僧弁、本稿中でもなんども登場してきており、元帝のために忠誠をつくしてきた將軍である。太原王氏の出身で、わかいころからずっと元帝につかえ、その爪牙として活躍してきた。元帝の最期、江陵が西魏軍に包囲されたとき、彼がもつとも頼りにしていたのは、この王僧弁の救援であった。彼は、それほど元帝に信頼され、気にいられていたのである。

にもかかわらず、そうした彼でさえ、いったん元帝の怒りをつかたならば、右のような仕うちをこうむってし

まうのだ。この時期の元帝は、こうした怒りの衝動を、制御できなくなっていたのである。

おそろしい主君ではないか。かかる激情タイプの元帝につかえる臣下たち、さぞかし恐慌をきたしていたことだろう。初唐の魏徴は、こうした元帝の凶暴ぶりを、つぎのようにかたっていた（前述）。「爪牙重將、心膂謀臣は、或いは顧眄こへんして以て拘囚に就き、或いは一言ありて焮醜せらるるに及ぶ。朝の君子、相顧して慄然たり」（『梁書』元帝紀）。武臣や將軍、さらに股肱の臣や謀臣らは、右顧左眄しても「けっきょくは」獄中にいれられ、諫言しては「ころされて、その死体を」塩漬けにされる始末であった。おかげで朝臣たちは畏怖し、びくびくしながらみつめあうだけだった——と。

そうだったとすれば、このときの僧弁、「ころされて」塩漬けにされなかっただけでも、まだよしとすべきだったのかも知れない。さいわいなことに、このときは、僧弁の母がなきながら許しを請うてくれたので、なんとか元帝の勘気もおさまり、僧弁は命びろいをしたのだった。

このように、侯景の乱以後の元帝は、これまでみられなかったほど、短気で怒りっぽくなっている。武帝晩年のあまりに寛仁すぎる姿勢が、人心の弛緩や乱脈をまねいたのをみて、意識的に強権をもってのぞんだということも、多少はあったのかも知れない。しかし、それだけではあるまい。この時期の彼は、権力を志向するあまり、前後の見さかいがつかなくなっていたのだろう。じっさい、この種の話は、ほかにもあった。甥（蕭譽）がにくいとなれば、いくら西魏が侵攻してくるぞと忠告されても、頭にはいらなかったし、弟（蕭紀）がけしからんとおもえば、その姿絵にブスブスと釘をうちこんだのだった。

こうした元帝について、魏徴は「忿戾ふんれいを肆はしまして以て物を害す」、怒りを爆発させて他人をころした、とかたっていたが、まさにそのとおりだったのだろう。この時期の元帝は、つねにイライラしていて、いったん頭に血が

のぼつたら、激情をおさえられなかった。私は、東閣竹殿への放火も、そうした激情による衝動的な行為だったろう、とかんがえるのである。

こうした私の推測に、傍証めいたことをひとつ、つけくわえよう。

書物をやき、降伏した元帝は、処刑までの日々を飲酒と詩作とですごした。その間につくられた詩四篇は、第一章で紹介した。そしていよいよ刑が執行されるとき、つぎのようなことがあったという。

梁王の蕭譽は尚書の傳準を派遣し、死刑の執行を指揮させた。元帝は傳準に「貴殿は私のために、これらの詩を世間にひろめてくれ」といった。傳準は詩句をつつた紙を手にはささげもったが、涙がでるのを禁じえなかった。

この元帝の最期のことば、じつにつじつまがあわぬことではないか。おおくの書物（そのなかには、むろん詩文の類もあつた）をやきはらつておきながら、みずから辞世の詩をつくり、それを世間にひろめてくれ、とたのんでいるのだ。つまり元帝は、詩文それじたいを、拒絶しているわけではないのである。このささやかな一、元帝の焚書は、文武の道に絶望したとか、詩文を憎悪したとかの深甚な理由ではなく、激情からきた、一過性の自暴自棄にすぎなかつたことをしめすものだろう。

処刑にたちあつた傳準は、「涙がでるのを禁じえなかつた」という。この傳準、いったいなんに對して涙をこぼしたのだろうか。元帝の運命に對してか、梁朝の滅亡に對してか。それとも、こんな男にやかれてしまった書物に對してだろうか。自分の書物をやかれた人びとが、元帝の最期のことばをきいたら、あまりの自分勝手さ、あまりの愚劣さに、彼らのほうこそ、涙がとまらなかつたにちがいない。

### 名声をあげる道具

それにしても、激情や自暴自棄によって書物をやいたにしても、そうした行為の根底には、やはりなにかしら彼なりの論理があつたはずだ。さらに、みずからも身を火中に投じようとし、「文武の道、今夜尽きたり」と歎じたという。かくするからには、そうするだけの理屈というか、論理があつたようにおもわれる。では、いったいどうした論理があつたのだろうか。これをかんがえるには、すこし遠まわりになるが、元帝と書物との関係にふれなければならぬ。

元帝にとって、書物とはどういうものだったのか。この種の質問に対しては、たとえば、趣味だった、娯楽だった、修養の糧だった、人格を陶冶させるものだった——などの答えかたがありえよう。ただ、たいていは複合的なもので、一言で「 だった」といえるようなものではあるまい。

だが、それでもしいて一言でいったならば、元帝にとって書物は、自分の名声をたかめてくれる道具だったのだろう。道具であるからには、血肉のごときものではなく、あくまで自分の外側にある。したがって、自分の内面、たとえば徳性をみがくなどというようなことは、あまり関わりはない。外からみた見ばえや体裁をよくする、つまり名声をたかめてくれる道具。それが元帝にとっての書物だったのだろう。

隻眼になってしまった自分。その自分が人なみ、あるいはそれ以上の名声をえようとすれば、書物をよんで、著述をおこなうしかない。元帝はわかひころから、そうおもひこんでいた。だから読みあげ係をそばにおいて、昼夜をとわず書物を読誦させ、それにきぎいったのだった。

かく読書するためには、書物を手にいれねばならない。だから元帝は、聚書にもげんだ。彼の熱心な聚書ぶり、『金楼子』聚書篇にくわしい。それによると、天監十三年（五一四）、彼が七歳で永福省へうつったころ、

父帝から「五経正副本」をたまわった。それが、最初の聚書だったらしい。以後、地方官として会稽や荊州、江州などへ赴任することに、その地でおおくの書物を捜求し、入手していった。武帝の息子であり、大藩の刺史であつたことも、書物捜求に有利にはたらいたことだろう。

注意したのは、彼は、書物をもらつたり購入したりしただけでなく、自分でもすすんで抄写していることだ。隻眼にはきつかつたろうと想像されるが、それでも彼は熱心に抄写にはげんだのである。たとえば、

私が琅琊の太守となつたとき、父うえが敕を發して私に書物をさずけてくださった。私は自分用の書物をもちたくて、それらを自分で抄写したものだつた。

とある。元帝が琅邪郡の太守になつたのは、十歳のときである。十歳は現在でいえば小学四年生。そのころから彼は、自分専用のコレクションをつくりたくて、武帝からもらつた書物を、わざわざ自分で抄写しているのである。よほどの書物ずきだつたのだろう。

成人後も、どうようだつた。彼は熱心に書物をあつめた。だがいろんな事情で、ゆずつてもらつたり、購入したりができぬ場合もあつたろう。そうしたときは、たのんで抄写させてもらつたようである。たとえば、

左衛將軍の蘭欽が南鄭から帰還すると、また彼の書物を抄写することができた。それらには、しばしば南渡以前の書物があつた。またそれ以後にかかれたものもあつて、たいへん新奇な内容だつた。

などが、そうしたケースである。元帝、その抄写した書物は「たいへん新奇な内容だつた」といつてよるこんでいる。彼は、現代にも通じそうな書物マニアだつたのだろう。

ただ、みずから抄写するというのは、量的にみると、たかだかしかれたものだ。やはりひとからもらつたり、配下の者に抄写させたりしたほうが、とつとりばやく入手できたらう。元帝はそうした聚書のしかたも、さかんに

おこなっている。一例をしめすと、

元嘉の『後漢書』（范曄の撰）、そして『史記』『続漢春秋』『周官』『尚書』、諸子、そして文集など、一千余巻を手にいれた。また細字でかかれた『周易』『尚書』『周官』『儀礼』『礼記』『毛詩』『春秋』各一部も収集することができた。さらに孔昂に命じて、『前漢書』『後漢書』『史記』『三國志』『晋陽秋』『莊子』『老子』『肘后方』『離騷』などを抄写させた。その合計六百三十四巻は、すべて巾箱のなかにおさめた。書体は精細をきわめたものだ。

などがそれだ。一千余巻を手にいれたとか、六百三十四巻を配下の孔昂に抄写させたというから、量的にはきわめて大規模だったといわねばならない。「すべて巾箱のなかにおさめた。書体は精細をきわめたものだ」などのことは、いかにも自慢げで、うれしそうではないか。こうした大量の聚書は、たかい身分や地位のゆえだろうが、やはりつよい熱意があればこそだったのだろう。

こうした努力をつみかさねた結果、元帝のもとには、膨大な書物のコレクションができた。元帝は『金樓子』聚書篇の末尾で、

私は今年（承聖二年、五五三）、四十六歳となった。書物を収集しはじめてから四十年、いままで八万巻を手にいれた。前漢の河間王劉徳の書物は、漢王室の蔵書量に匹敵するほどだったというが、私の蔵書は、それ以上ではないかとおもつ。

と自慢している。たしかに、元帝のいうとおりだ。梁代、個人でもっとも書物を有していたのは沈約だとされ、「墳籍を好み、書を聚めて二万巻に至る。都下に比無し」（『南史』沈約伝）と称されている。だがその沈約でさえ、せいぜい二万巻程度だったにすぎない。四十六歳の元帝は、その沈約に数倍する蔵書を有していたのである。

この聚書篇末尾の記述では、もうひとつ、「八万卷を手にいれた」「私の蔵書は、それ（河間王劉徳の蔵書）以上ではないかとおもつ」にも注目しよう。この叙しかたからみれば、元帝はどつやら、おのが手元に蔵する書物を、自分個人のものとおもっているのではないか、ということだ。とくに河間王劉徳よりすごいと、自慢するところなど、そうした思考が顕著であるように感じられる。たしかに自分で抄写したりしているのだから、そうした気分も生じやすかつたのだろう。

そのためだろう、「書物は天下おおやけのものであり、たまたま自分のところにあつただけ」という考えは、彼にはなかつたようだ。元帝は後日、東園竹殿に蔵された書物に火をかけてしまったのだが、そうした行爲のおくには、「自分のものだから、自分でもやしてもかまわぬ」という意識が脳裏に存していたのだろう。

#### 書物への怒り

こうした、熱心な聚書と読書のうえにたつて、元帝は著述に専念した。そしてその結果、みずからおおくの書物を執筆し、編集した。やはり『金楼子』著書篇によつて、彼が完成させた主要な著述を概観してみよう。この篇には、彼の手になる著書の目録が、甲乙丙丁の四部（それぞれ経史子集に該当する）に仕わけられて、ズラツとならんでいる。その分類にしたがつて主要なものをあげると、つぎのようである。

甲部 連山三秩三十卷以下、四件百三十二卷

金楼秘訣、周易義疏、礼雜私記

乙部 注前漢書十二秩百十五卷以下、十一件二百十一卷

孝徳伝、忠臣伝、丹陽尹伝、仙異伝、全徳志、懷旧志など

丙部 老子義疏一秩十卷以下、十八件百六十卷

玉韜、貢職図、同姓同名録、式苑、荊南志、江州記、薬方など

丁部 安成煬王集一秩四卷以下、四件百四十四卷

集、碑集、詩英

内典博要三秩三十卷

以上六百七十七卷

これが彼の著述リストである。このなかには、文学の土に編纂させたものもすくなくないし、逆に、このリスト以後に著述したものもあつたらう。その意味で、あくまで参考程度のものにすぎぬが、それにしても六百七十七巻という量は、個人の著述としては、たいへんなものだとせねばならない。元帝の熱心な聚書と読書とは、かかる膨大な著述として結実したのである（残念ながら、自身の焚書のせいか、おおくが残存しない）。

このリストを詳細に点検してみると、元帝の著述は、いわゆる文学の類（詩歌や賦頌の類）にかぎられず、經史子集（仏教もふくむ）のすべての方面にわたっている。これによって、元帝がおおくの分野にわたり、意欲的にまなび、著述したことが確認できる。遠縁の蕭恭から、「この世には、楽しみをこのまず、ベッドに横になつても、天井をみながら著述しているものがあるそう。そんなに刻苦したつて、だれが千年後までつたえてくれよう」と揶揄されながらも、努力しただけの甲斐はあつたとせねばならない。

これほど熱心に、読書や著述にはげんだ元帝。ただ、そうした勤勉と努力によって、彼がどんな品性をもつた人間になつたかといえは、いままでみてきたとおりだ。カツとなつたら自制できず臣下に刀できりつけ、兄弟や親族を無惨な方法で殺害する、おそろしい人間になつただけだ。その意味で書物や読書は、彼の人格を陶冶

することは、できなかつたのである。まさに、内面をみがかず、外からの見ばえ（著述をよくするという名声）をよくする道具にすぎなかつたのだ。

旧時の知識人のあいだには、「発憤著書」、憤いきどおりを発して書を著すという考えかたがある。ひとは、不遇の状態におかれたとき、発憤しておのが志を書物としてかきあらわす、という考えかたである。周文王、孔子、屈原、左丘明、そして司馬遷、彼らは実生活の不遇や災厄のなかで、おのが精神をふるいおこして、千古にのこる名作をかきのこした。彼らにとつては、著書の執筆は自己実現の道だったのである。

これになぞらえていえば、元帝の場合は「著書馳名」、すなわち書を著して名を馳はせるものだったのである。書物をかきあらわすことによつて、偉大なる人物、諸侯王、そして帝王、という名声をはせること、それが隻眼だった彼の、自己実現の道だったのである。そのために彼は生涯にわたつて、聚書、読書、そして著述に、努力をかさねてきたのだった。

だが、その結果はどうだったか。名声をはせるどころか、亡国の君主という悪名を、天下にさらすことになつてしまった。江陵が西魏軍に陥落させられたとき、彼はひそかに「こんなはずじゃなかつた。オレは書物に裏ざられた」とおもつたのではないか。そしてその無念、その憤激を、書物にぶつつけようとした。それが、右（「名声をあげる道具」の項）にいう元帝なりの論理だったのである。そしてその論理の帰結が、十四万巻の焚書だったのである。

元帝は書物に火をはなつたあと、自分もその火のなかにとびこもうとした。書物と心中しようとしたのだらうか。いやいや、そんな殊勝なことをするはずがない。じつさいのところは、混乱、そして錯乱の極、正気をうしなつて、猛火のなかにとびこもうとしただけのことだらう。

ただ、そういったただけだと、そっけなさすぎるかもしれない。もし、しいて私の推測をのべてみれば、元帝は書物への怒りがおさまらず、火のなかにとびこんで、書物をふみつけ、いためつけようとしたのではないか。そう、ちょうど怒りの衝動に我をわすれ、刀で王僧弁にきりつけたように。

じつさい、後日、臣下から「なぜあのとき書物をお焼きになられたのですか」ととわれた元帝は、つぎのようこたえたという。「書を読むこと万巻、猶なお今日有り。故に之を焚やく」。これまで万巻の書をよんできた。だがそれでもこの始末じゃ。だから「頭にきて」やきすてたのだ。元帝は、自分を裏ぎった「と彼はおもいこんでいる」書物を、にくんでいたのである。

#### 文化史上の蛮行

隋の牛弘があらわした「請開献書之路表」によると、元帝の焚書は、書物の五厄のひとつにかぞえられるという。その五厄とは

- (1) 秦始皇帝による焚書
- (2) 王莽滅亡時の混乱による焼失
- (3) 後漢末の混乱による亡佚
- (4) 西晋末の混乱による亡佚
- (5) 梁元帝による焚書

である。

このうちの②③④の三つは、戦乱によるものである。この戦乱による書物の亡佚は、ひとの世に戦争や騒乱が

おこるかぎり、抑止できぬものであり、むしろ自然災害にちかいものというべきものだろう。

ところが、(1)秦始皇帝と(5)梁元帝の焚書とは、それらとは性格がことなる。これはあきらかに、人為によって火をはなれたものであり、意図的な破壊行為によって、この世から消滅させられたものだ。

では、この始皇帝焚書と元帝焚書とは、おなじ性格の災厄だったのかといえば、そうではない。

始皇帝の焚書は、ここではその理不尽さはとわぬとして、始皇帝の政策判断の結果として、選択的かつ計画的に、書物をやこうとしてやいたものである。その意味で、妙な言いかただが、理性にもとづいた冷静な焚書だといつてよからう。

ところが元帝の場合はどうだったか。これはさきにもたように、冷静さや計画性はまったくなかった。江陵陥落のさなか、興奮し、混乱し、絶望的になった状況で、焚書を命じたものにすぎなかった。カッとなったら激情をおさえられぬ男。その男の捨てばちな衝動が、十四万巻におよぶ焚書になったのだ。元帝が、もうすこし冷静になれる男だったら、この焚書はふせげたかもしれない。そうかんがえると、なんともやりきれぬ思いがしてこざるをえない。

この焼失した十四万巻という量は、『資治通鑑』(その元は『三國典略』である)に依拠したものである。その内訳をいえば、王僧弁が侯景をうちとつたあと、建康から江陵へ移送した書物が、八万巻ほどあつたらしい。するとそれ以外の六万巻が、江陵にもとからあつたものだったことになる(右の『金樓子』聚書篇では、元帝は八万巻を収集したといっていた)。

たとえば、梁初の天監四年(五〇五)につくられた『文徳正御四部及術数書目録』に著録される書物は、わずか二万三千百六巻だった。また梁の中期、阮孝緒が編纂した『七録』でも、四万四千五百二十六巻にすぎない。

十四万卷という量にくらべると、半分にもみたぬ量である。東閣竹殿に蔵していた書物には、重複したのものもすくなくなかったはずだ。それゆえ、多少はわりびいてかんがえねばならぬが、それにしても十四万卷という量が、いかに巨大なものであったかが了解できるだろう。

元帝はそれらに、火をはなったのである。いうまでもないが、これらの書物、人間精神の栄光と苦悩の結晶とすべきものであり、漢民族の叡知が集積したものである。くわえて、この時期は、印刷術もまだなかったころだ。この世に一部しか存在しない書物も、すくなくなかったことだろう。それらのおおぐが、ひとりの男の激情、そして衝動によって、灰になってしまったのである。

元帝は、わかいころから、熱心に読書してきた。片目がみえなくなつてからも、読みあげ係に読誦させ、それをきいて、書物の内容を把握してきた。さらに荊州刺史になつた十九歳のときは、当地にわざわざ学校をたてて、読書や学問を推奨したのだつた。そのとき彼が学生たちに、学問の重要性をかたつた書翰文「召学生書」をふたび引用してみよう。彼はそこで、

きく、後漢の高鳳はうっかり麦を水浸しにし、晋の車胤はむだな螢をあつめた。だが、高鳳が「鳥をおいつつ」読書に夢中になつて、風雨に気づかなかつたほど愚昧だつたとか、車胤が月下で文書をかきながら、螢の明かりが微光にすぎぬのをしらなかつたとか、そんなことはありえないことであるぞ。彼らが麦を水浸しにし、螢をあつめたのは、「学問に熱中していたという」きちんとした原因があつたのだ。

このように不朽となり偉大となりたければ、学問をする以上のものはない。しっかりと自身で学問をまなび、道を修得すれば、えらくなれるものであるぞ。

とかたつていた。ここで元帝は、ユーモアもまじえつつ、学問の重要性をかたつており、その気分には余裕を感

じさせるものがある。

さらにかつて彼は、自分について、「私は、文士としては玄人はだしたが、武人にはあわせる顔がない」ともかたつていた。ここでも彼は、学問や詩文への愛好をかたりつつも、自分には武人の才能はないのだと、謙虚な姿勢をくずしていない。こつした発言、謙虚に、そして冷静に自己を認識できる、しなやかな精神が感じられるではないか。

ところが母が死に、侯景の乱が発生した前後から、人がらが、そして言動が、一変してしまった。彼は、おのが劣等感や野心にひきずられるようにして、侯景や胡族の征伐を後まわしにし、親族を殺害するほうを優先したのだつた。隻眼をからかう者、踐祚を邪魔する者には、とくに残虐にふるまつた。その結果、もくろみどおり侯景の乱を鎮圧し、江陵で踐祚することができた。ところが、死屍累累の修羅道をあゆんでいるうちに、元帝はユーモアも、謙虚な姿勢も、そしてしなやかな精神も、すべてうしなつてしまった。そして最後に、西魏の侵攻と蕭督の裏ぎり（いや、むしろ元帝が彼をおいこんだというべきだろう）とによって、江陵城は陥落してしまつたのである。

かくして元帝は、わかいころからの熱心な読書、学問奨励、著述への専心、これらがすべて無駄であつたことをさとつた。隻眼のハンディがありながら、自分は熱心に書物をあつめ、真摯によりつづけ、文武の道を追求めてきた。そんな自分が、なぜこんな目にあわねばならぬのか。書物はいつたい、なんの役にたつたというのか。こつつぶやいた元帝は、書物を愛惜するどころか、自分を裏ぎつたけしからぬやつ、とおもひこみ、憎しみの情をもつて、これらに火をはなつたのである。骨肉とも、臣下とも、そして書物とも、しあわせな信頼関係をもてぬま、自滅していった人生であつた。



## 参考文献

## 著書

『資治通鑑』梁紀

『梁書』元帝紀など

『南史』元帝紀など

『三國典略輯校』（東大図書股份有限公司 一九九八）

森三樹三郎『梁の武帝』（平楽寺書店 一九五六）

吉川忠夫『侯景の乱始末記』（中公新書 一九七四）

森野繁夫『六朝詩の研究』（第一学習社 一九七六）

『六朝詩人伝』（大修館書店 二〇〇〇）

吳光興『蕭綱蕭繹年譜』（社会科学文献出版社 二〇〇六）

前島佳孝『西魏・北周政権史の研究』（汲古書院 二〇一三）

陳志平・熊清元『蕭繹評伝』（上海古籍出版社 二〇一八）

熊清元・陳志平『金樓子詁注』（上海古籍出版社 二〇一八）

陳志平・熊清元『蕭繹集校注』（上海古籍出版社 二〇一八）

右のうちでは、『蕭綱蕭繹年譜』、『蕭繹評伝』の二書は、蕭繹の事迹を克明に著述しており、つねに座右において参照させていただいた。この二書がなければ、本稿はかけなかつたろうし、そもそも筆をとろうという気もおこらなかつたろう。感謝もうしあげる。また吉川忠夫『侯景の乱始末記』は、いわずとした梁末の政治史を平易に叙した名著である。個人的には、博引旁証の内容もさることながら、研究書らしからぬ物語ふうの叙しかたに、つよく魅せられる。本稿でも、その叙法を参考に

させていただいた。

## 論文

- 興膳宏「講演 梁元帝蕭繹の生涯と金楼子」(「六朝学会報」第二集 二〇〇一)
- 光田雅男「梁元帝『金楼子』にみる魏晋南北朝時代の集書と整理」(「大阪府立図書館紀要」第三七号 二〇〇八)
- 杜志强「蕭繹の評価問題」(「寧夏師範学院学報」二一九 四 二〇〇八)
- 岡部毅史「梁簡文帝立太子前夜 南朝皇太子の歴史的位置に関する一考察」(「史学雑誌」一一八 一 二〇〇九)
- 洪衛中「從 吾于天下為不賤焉 到 擬迹桓文 關於梁元帝蕭繹行為的心理學解積」(「揚州大學學報」一四 一 二〇一〇)
- 興膳宏「金楼子訳注(一〜十二)」(「中国文学報」第七九〜九二冊 二〇一〇〜二〇一九)
- 右のうちでは、洪衛中氏の御論がひじょうに有用だった。氏の御論は、サブタイトルにもあるように、心理学的考察にもとづいて、蕭繹の言動を分析しようとしたもので、本稿もおおいに刺激をうけた。本稿では、じゅうぶんはたせられなかったが、この蕭繹という人物の生まれ、育ち、発言、行動、そしてその性格などは、心理学的知見を援用してゆけば、興味ぶかい分析ができるのではないかとおもふ。